

関東氷上郷友会

山ざくら

第18号 昭和62年5月





渡辺紙工業株式会社

取締役社長 岡崎昌三

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町 5 丁目 22 番 12 号 Tel 849—6611(代)
" 関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町 2192 番 Tel 0471—96—1721(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8F> Tel 861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町 3 丁目 13 番地 Tel 521—8111(代)
大阪支店 工場	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
九州支店 工場	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳 884 番 1 号 Tel 09297—6—2211(代)



渡辺製袋株式会社

代表取締役 前田次郎

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8F> Tel 861—2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町 4938 番地 Tel 028262—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草 1438—1 番地 Tel 0794—95—0257(代)

山さる 第18号 目次

表紙絵……常岡幹彦画	昭和61年作	67
ごあいさつ	伴仲信次	2
昭和六十一年度總會・祝寿会・懇親会		3
財界の雄・西川政一氏逝く		29
ふるさとと兄	須原松柏	31
愛郷の士・渡辺金三氏逝く		32
渡辺金三さん	須原 清	34
村上大憲老大和尚をしのぶ	堀井隆川	35
学友故小西保君をしのぶ	莊 正衛	37
前会計理事・小谷正己氏逝去	足立 正	38
立身と奉仕(足立三治さん)	池田 忍	39
北摂丹波の祭典ホロンピア'88		40
バレーボールにかける夢と青春	森田信三	43
特集 わが青春のふるさと		48
徒歩通学の思い出	片山日幹	50
ふるさとと青春	林田孝子	51
若き日の周辺	谷 達雄	53
思い出のふる里	上山 顕	55
「ツチノコ」を見た	佐々木盛雄	57
解き放された青春	足立 徹	60
思い出すこと	東田 實	61
ふるさと遠く四十五年	田中芳子	64
私と氷上郡	神田敏博	66
わが青春に悔いなし	上村愛子	67
「暗い谷間」の時代と故郷	坂本重雄	67
桜のさくふるさと	岡本庄太郎	69
ある朝の思い出	山内隆行	71
青春虚実	田中篤郎	73
子供のこと(2)	足立源治	74
故郷丹波の国讃歌	莊 正衛	80
氷上の「足立」姓について	足立順治	80
「足立」姓のルーツ	足立和巳	82
丹波の風土と文化	岡本文夫	85
「レクイエム」演奏会と「日中親善の旅」を終えて	笹倉強	95
フランス刺しゅうと私	篠原よね子	97
描ききれないもの	常岡幹彦	99
陶芸雑感	可部美智子	101
いつか花咲く	西崎 祥	103
'86丹波の動き		105
お便り・短信		114
訃報		126
新規登録会員		127
住所・勤務先変更		128
新春役員会		137
柏陵同窓会東京支部から		137
卒業三十周年記念同窓会に出席して	木呂子恵美子	138
同好会報告		139
年会費受領		140
寄付金		142
会計報告書		143
編集後記		168

いあいさつ

関東氷上郷友会

会長 伴 伸 信 次



会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

本会も役員の方々のなみなみならぬお骨折りと、会員の皆様のご協力により、順調に発展を続けており、ご同慶に存じます。

昨年の本誌上で、この関東に二千人近い郷友が居られることがわかり、ホントに驚きました。まだ、洩れている方や学生さんたち、さらに会員の家族まで含めると大へんな人数になり、一方、郷里の過疎を思い合わせて、複雑な感懐におそわれた次第です。

私の手もとにある昭和十年の郷友会会誌を見ますと、会員数は百八十五名で、その他に学生生徒会員七十二名（早大九、日大六、陸士六、帝大七……）、過去六年間の転出者七十二名、帰省者及び居住不明者八十五名、物故者十九名とあり、うたた今昔の感に堪えません。

この『山ざる』誌も、逐年内容が充実して好評を得ており

ますが、一人の専従者もなく、全くのボランティアの方々のご努力のお蔭によるものです。編集、名簿の整理、通信郵送、広告、会計、投稿等々、ご協力くださる会員の皆様に心から感謝し御礼申し上げる次第です。どうかこの上ともよろしくお願い申し上げます。

内外の情勢も大きく変りつつあるように思います。特に私のような前時代の人間にとって、明治・大正の時代より今日に至るまでは、まことに驚異的なものがあります。ことに戦前戦後のハングリー時代を経て、廃虚から目ざましい発展を遂げて今日に至りましたが、昨年あたりからは、今までの成長とは少々様子がかわり始めたのではないのでしょうか。

石炭産業は次々と閉山が増え、鉄鋼・造船業界は生産を縮少したり、輸出産業は海外に生産拠点を設置するなど、産業構造に大きな変化が見られ、一方官業の民営化、税制の改革、ドル安・円高等々、ハングリー精神で営々と築きあげたものが、容易ならぬきびしい「むずかしい時代」を迎えた感があります。

こんな時代に悲観的な見かたや引込思案になるのはもちろん禁物ですが、こんなむずかしい時代に、我等の大先輩であった有田喜一先生や西川政一さん、渡辺金三さんが亡くなられたことは、まことに残念なことでした。

申すまでもなく、有田先生は政治家としてまた当郷友会の

名誉会長として、西川政一さんは日商の創立から日商岩井の今日まで、社長、会長、相談役として、また渡辺金三さんは渡辺紙工業・渡辺製袋の社長及び当郷友会の副会長として、常に私たちの良き指導者であるとともに、郷党の誇る功成り名遂げた大先輩でありました。どんなことでも気軽に相談できた郷友のリーダーを失ったことは、まことに残念なことでありました。今はただご冥福を祈る次第です。

過疎に泣く郷里にも、いま明るい便りがあります。近畿自動車道舞鶴線の高速度道路建設が植音高く進んでおり、来年の春頃には開通の予定で、これを機会に「県」としては『北摂・丹波の祭典』と銘打つ一大イベントを企画しています。これを契機に郷里がより良い方向に転換することを祈念してやみません。

わが郷友会としても、その機会にバスによる郷土訪問ツアーを計画しては、との話が出ております。秋の総会の通知の際に具体案をお知らせできると思いますが、ここに予告いたしておきます。

会員皆様のこの上とも一層のご協力をお願いいたしますとともに、健康にご留意されてご精進ご活躍のほどを念じご挨拶いたします。

(春日建設株式会社会長)

昭和六十一年度総会・祝寿会・懇親会

昭和六十一年十一月八日、九段会館・瑠璃の間において、関東水上郷友会恒例の総会と懇親会、および満八十歳を迎えられた郷友の祝寿会が開催された。

今回は、当会設立九十周年にあたる。一昨年の八十八周年大会を契機として会員数も急激に増加し、若い学生や新顔もふえて、この会にもわかに活気づいた感がある。この日も百人近い出席者で会場はあふれんばかりの盛会であった。

総会は坂上勝朗理事の司会で始まり、伴仲信次会長の挨拶のあと議事に入り、足立正理事から会務報告で、六十一年度版・柏陵同窓会名簿および桃陵同窓会（水上高校）名簿、水上西高校卒業生名簿等から関東在住の若い郷友約六百名を抽出して会員に加えたため、当会の名簿記載会員が千七百名近くに増大したことを説明、またそれにもなう会誌や通信の経費増について会員への協力を懇請した。次に足立和巳理事から会計報告、吉住重造監事より会計監査報告、続いて坂上勝朗理事から会員の慶弔報告等があった。

恒例の祝寿会では、今年満八十歳を迎えられた会員九名にご案内していたが、当日の出席者は、小谷正雄、荘克衛、谷垣正雄、伴仲信次の四氏で、足立玉治、有田久代、小林武治、高桑良弥、最上次郎の五氏は残念ながら欠席であった。

村上末吉副会長より祝詞とともに記念品の陶彫人形が贈呈され、四氏を代表して谷垣正雄氏から謝辞があった。また司会の坂上理事から「記念品は郷友の陶芸家・可部美智子さんがこの日のために心をこめて焼きあげてくださったものです」との紹介もあり、祝寿会は会員の温かい拍手のうちに、ひとしおなごやかな雰囲気包まれた。

○

懇親会は宮野近理事の司会ではじまり、先ず郷里から遠路ご出席いただいた来賓、氷上高等学校校長・森田信三氏、市島町助役・木下軌一氏、氷上町助役・荻野耕一氏、および兵庫県東京事務所所長・今井和幸氏、同次長・満浦謙之氏を紹介のあと足立三治前会長の音頭で乾杯、来賓を代表して今井氏と木下氏の挨拶があり懇親会に入った。

今回は総会・祝寿会などの議事や挨拶を極力切りつめて懇親会の時間をたっぷりという計画通り、万事テキパキと進行し、会場は早くもなごやかな団笑・団らんの場となった。一隅では満浦氏の提供による丹波のビデオが映されたり、柏高第一回卒業同期のグループが集まったの便乗同窓会が始

まるやら、肩をたたきあうもの、握手をくり返すもの、名刺を交換するもの、飲みかつ食べながら、丹波なまりのうずとなった。かっこうよく東京弁を使っているつもりでも、聞けばみな丹波のアクセントである。話せば話すほど打ちとけて、老いも若きも時のたつのを忘れるのがこの会の特性、いつ果てるともつきない熱気が高まる。

宴も終盤にはお楽しみ福引きプレゼントで、うず高く積まれた景品は全員空くじなし。抽選番号が貼り出される揭示を見つめながら、みんなひそかな期待で名札の番号を何度となく確かめる。当たると思わず奇声が飛び、どよめき、拍手、てれながら壇上にあがって押しいただくそのさまは、いかにも楽しく大いに盛りあがるひとときである。

お楽しみプレゼントの景品

△山ざる賞▽

- 一等Ⅱ丹波山の芋四キロ・二本
- 二等Ⅱ丹波生椎茸一キロ・三本
- 三等Ⅱ丹波山の芋二キロ・五本
- 四等Ⅱ丹波あまご甘露煮・十本
- 五等Ⅱ丹波生味噌一キロ・十本

△会員賞▽

白樺賞Ⅱ山本清士氏寄贈・幼児セーターと靴下セット・八本
本ノ幼児ケープと靴下セット・七本

ノールスター賞 吉積重造氏寄贈・トレーナー・七本／
モデルカー・五本

吉田屋賞 市島町吉田屋寄贈・山菜の味噌漬・二十本

ホンゴ出版賞 池田忍氏寄贈・ライフメモリー・五本

二玄社賞 渡辺隆男氏寄贈・故宮名画複製額・五本

会長賞 伴仲信次氏寄贈・甲州ブドー巨峰・二本

西崎賞 西崎祥氏寄贈・テレホンカード・もれた人全員

○

中締めは若手のホープ岡吉明、足立勝、山内隆行、松山康裕の四氏が壇上で声高らかに三本締め。なごりつきない友垣もようやくほぐれて散会。出口では景品のほかに丹波の黒豆が一袋ずつ全員に手渡され、「これももらった方がいいの?」と顔をほこばせながら、来てよかったねといったげである。それもそのはず、会の補助、有志の後援あつての大盤ふるまい。会費にしてはべら安のパーティなのである。——来年もぜひどうぞ——来年こそぜひ出席を——次回は昭和六十二年・十一月二十一日(土)十二時半から四時まで、九段会館ときました。十月頃には詳細おしらせ致します。

なお当日の出席者は以下の九十八名であった。

’86 関東氷上郷友会懇親会出席者芳名(敬称略・順不同)

▲来賓

兵庫県東京事務所所長今井和幸 同副所長満浦謙之 市島町

助役木下軌一 氷上町助役荻野耕一 氷上高等学校校長森田信三

▲祝寿

小谷正雄 莊克衛 谷垣正雄 伴仲信次

▲一般会員(出身町別)

●青垣町(11名)

足立和巳 足立源治 足立三治 足立静雄 足立誠一 足立勝 鶴沢洋子 鴻谷正博 竹村政雄 安原三智子 山中岩雄

●市島町(14名)

井田悦子 大槻作治郎 荻野一雄 荻野 武 木村つた江 須原 清 田中篤郎 鶴田ゆき子 早瀬徳郎 広内光正

森本康成 山内隆行 近藤 勇 西山敬次郎(代理)

●春日町(19名)

井手梅野 上田 脩 小笠勝啓 大城戸しず代 大島信子

岡田一男 木呂子恵美子 近藤勇夫 谷垣美代 中野周子

波多洋三 畑 秀夫 船越祥郎 前川和子 松山康裕 水船

隆昌 村上末吉 山本直樹 吉住重造

●柏原町(12名)

井上悦子 上村愛子 上山 顕 小田富士夫 大野善三

岡 吉明 可部美智子 志村勝郎 常岡 昭 常岡幹彦

宮野近 村上善英

●山南町(6名)

清水正男 田中貴美子 田中 寛 東田 實 松下トシ
柳川瀬隆志

●氷上町(24名)

安達健一郎 足立謙悟 足立順治 足立 正 足立 稔
秋元多美子 葦田有功 池上亘泰 大坪真子 岸田昌子
小森康裕 谷口 捷 新田浩勉 伴野秀作 広瀬敏行
細見利明 本城英明 松山尚子 山本紀子 渡辺圭三
渡辺隆男 渡辺なをゑ 渡辺也寸美 坂上勝朗

●多可郡(2名)

神田敏博 藤田正雄

●東京都(1名)

村上悟悠(故大憲師ご遺族)

以上

祝寿者からの礼状

有田久代さん

拝啓 紅葉の美しい晩秋よりいよいよ初冬へと木枯らしの吹く頃となって参りました。其の後益々御清栄の事とお慶び申し上げます。

さて先日は誠に結構な御心尽くしの長寿記念品をお届け頂き、有難き御祝詞を賜わり御芳情の程深く謝し上げます。

可部美智子女子銘作の陶彫「里の秋」素晴らしい傑作とて

一同昔をしのび大喜び致しました。早速亡夫の霊前にも報告し皆々様の御懇意と共に末永く保存させて頂きます。(中略)身体の調子も相不変にて皆々様に御迷惑をおかけしておりませんが何卒御寛恕の程を。

寒さも愈々加わります候とて呉々も御自愛の上御健勝の程御祈り致します。

先は右万々御礼まで

敬具

(昭和六十一年十一月八日)

谷垣正雄氏

郷友会総会の場において温情こもる御祝辞と立派な記念品を頂き身に余る光栄と有難く拝受し厚く御礼申し上げます。

毎年祝寿会が催され傘寿の方々に表彰が行われてきましたが、私などはまだ遠い先のことと思っておりましたところ、いつの間にかその年になっていたことに驚きました。他の祝寿を受けられた方々は、それぞれの道に永年貢献され立派な業績を残された方ばかりですが、私は八十年の長い間社会に貢献することなくいたずらに馬齢を加えたに過ぎず、省りみて誠に恥かしいと思います。

考えてみますと今年八十歳の者は、わが国の興廃をかけた日露戦争に勝利を収めた翌年の明治三十九年生まれで、以後昭和二十年の大東亜戦争(第二次世界大戦)の敗戦まで、軍

籍に関係あつた者はいつ赤紙が来るか、召集されるかとあた
ら青春を安閑としておられない不安と緊張の連続で、過ごし
たことでした。戦災、終戦直後の困難といろいろな痛苦を経
験しましたが、その後、平和が続き日本興隆の時代となり、
社会福祉も充実、精神的にも安定した有難い世の中となり今
日に至つたのであります。

今後何年生きられるかわかりませんが、健康に留意し意義
ある余生を送りたいと念願しております。郷友の皆様には何
とぞ変らぬ御交誼をお願いして感謝の言葉と致します。

転変の人生行路 八十の秋

椒風

莊克衛氏

拝啓 去る十一月八日水上郷友会懇親会、並びに傘寿の祝
宴に御招待賜わり真に有り難くおかげを以て晴れの席に列す
る事を得て何より喜ばしく、其の上御見事な可部様の陶彫
「里の秋」を美しき花束と共に頂き、この上もなくかたじけ
なく茲に重ね重ねの御厚志の程深く御礼申し上げます。

いたずらに年を重ね汗顔の至りですが今後の一日を大切に
精進したき所存ですから何分にもよろしくお願い申し上げます。

最後に心より貴会の御隆昌と会長様をはじめ会員の皆様の
御健康と御繁栄を祈って擲筆させて頂きます。

敬具

感動の 傘寿の宴や 秋深し
小春日や 懇親の夕べ 去り難く

「里の秋」抱きて家路 紅葉映ゆ

花束の 香り床しや 秋日和

莊克衛

△可部美智子さんへの礼状▽

先日関東水上郷友会より傘寿記念として、貴女御丹精の陶
彫「里の秋」なる御品を頂き誠に有難く御礼申し上げます。

しみじみ拝見致しますのに大変見事な芸術作品にて思わず心
温まる思いにて早速書斎に飾り永く観賞させて頂きたく存じ
ております。御厚志の程深く御礼申し上げます。

最後に貴女の今後の御発展を祈っております。

(昭和六十一年十一月十四日)

小林武治氏

拝啓 秋も深くなってまいりました。丹波では今頃誓文弘
いのある季節でしょうか。今年は京都、大阪、神戸に行く要
用がありまして四回程西下致しましたが、丹波までは行く余
裕なく残念に思いました。

郷友会の皆様、役員の方々のご尽力にはつねづね敬服して
おります。何分忙しい仕事をいくつかがかえ失礼ばかりして
います。今日は結構なる品をご恵送下さいまして恐縮の至り
に存じます。何らなすこともなく年を重ねました。私は日本

の私立学校が国公立並みになることを悲願としてやってきました。残年はそう多くはないと存じますが、最後のご奉公に精進するつもりでおります。財団法人私学研修福祉会の理事長は私学県代表者会議で満場一致再選、九月から第二期目をやっております。国学院大学の方は来年四月上旬改選となります。あまりに仕事が多いし重要なので第一線を退きたい気持ですがうまくそうなるかわかりません。私大連盟常務理事は昨年二月改選これもやめたい一心です。当院院友会会長は八年間やりましたので来年四月改選には是非やめたいと今から副会長三名の方々に話してありますが、全国八万の院友の統括はなかなかむずかしいので誰も積極的になりたい方もなく弱っております。

少し楽になって皆様方の驥尾^{きび}について、少しましなお手伝いもしなければ申し訳ないと存じております。私など本当にお祝い頂く資格などない者で、返す返す恐縮に存じます。

(61・11・17)

△編集部より▽

小林武治氏は昭和六十二年四月十二日、急逝され、四月二十六日、青山葬儀所において盛大な国学院大学葬が行われました。謹んでご冥福をお祈り致します。

氏のご経歴など次号で詳報の予定です。

伴仲会長の挨拶・坂上理事の司会



足立正理事の会務報告



足立和巳理事の会計報告

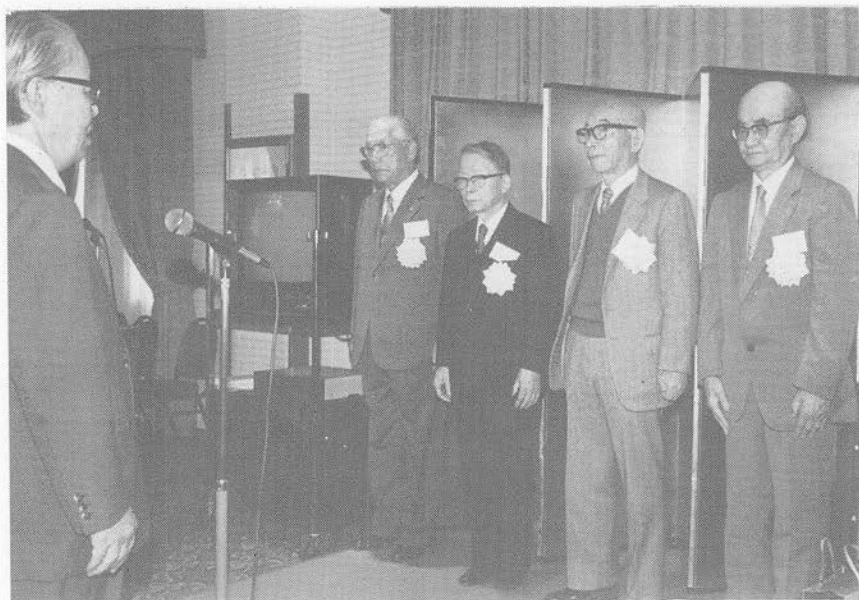


吉住理事の会計監査報告



渡辺副会長の「山ざる」誌経過報告





村上副会長より祝辞をうける伴仲・小谷・谷垣・荘の四氏



祝寿の花束をうける四氏



祝寿者を代表して謝辞を述べる谷垣さん



祝寿記念品・可部美智子作・陶彫人形



市島町助役・木下軌一氏の挨拶



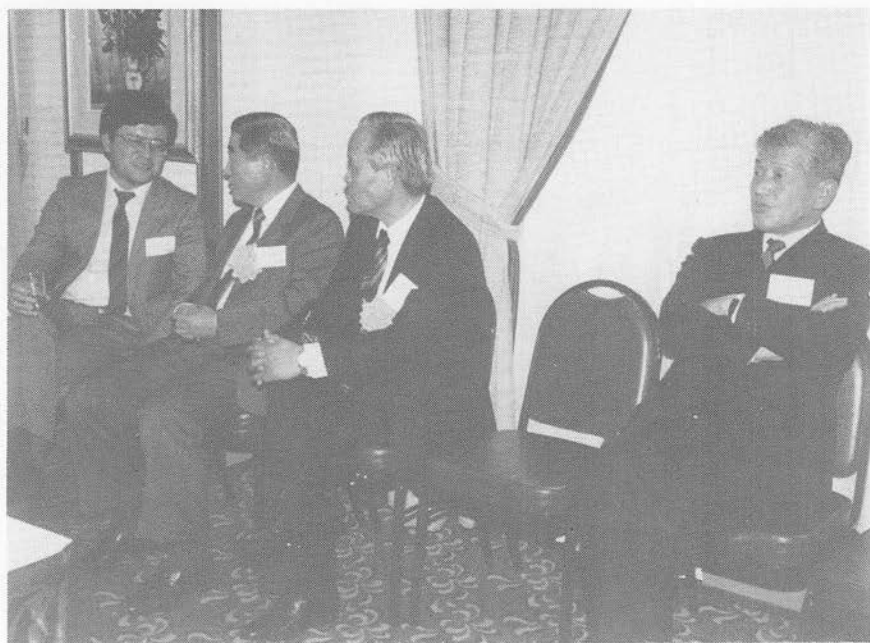
足立三治前会長の乾杯



県東京事務所・今井所長の挨拶



宮野近理事の司会





懇親会には町ごとのテーブルがある

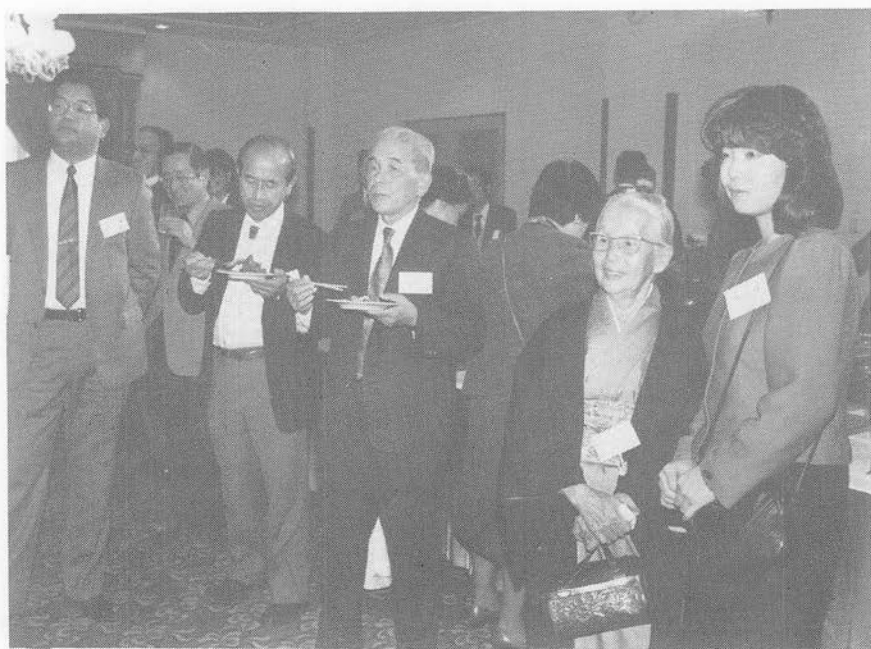












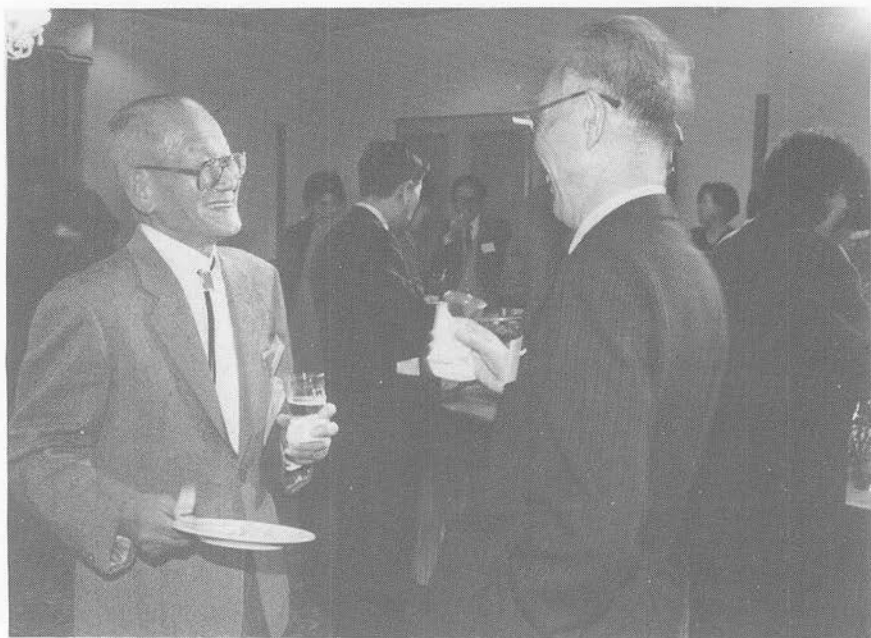














財界の雄・西川政一氏逝く



西川さんが「山ざる」に、随筆Ⅱ「水漫筆Ⅱ」を寄せられたのは、昭和四十八年、第四号である。以来、毎号「山ざる」のために筆をとられ、昭和五十三年、第九号まで、海外旅行記を主とした、滋味あふれる文章を六回にわたって書いてくださった。

さらに、昭和五十六年・第十二号には「永井さんのこと」として、郷土の大先輩・永井幸太郎氏（日商憐元社長、元吉田内閣貿易庁長官）について書いてくださった。

そのころの西川さんは、郷友会の会合にはほとんど出席された。そんなときの西川さんのスピーチは、ユーモアがあふれ、大きく、すべてを包みこむような温かなお人柄がにじみ出ていた。大きな声で、懐かしい丹波弁で、だれにでも、気さくに声をかけておられたお姿が今も昨日のように思い出される。

昭和五十三年六月、日本経済新聞の『私の履歴書』に西川さんの自伝が連載された。読み進むにつれて、我が郷土は、

大変な人物を産んだものだとの思いを強くする。後年、「私の履歴書」「山ざる」連載の「「水漫筆」等をまとめて「伸び行く葦^{あし}」を出版された。

その巻頭に、作家の城山三郎氏が書いておられるので、それをここに紹介して、今は亡き偉大なる先輩をしのぶこととしたい。

ロマンの人西川さん

城山三郎

米騒動で鈴木商店が焼き打ちされたなどを追って、わたしは、「鼠^{ねずみ}」という小説を書いたが、その取材の過程で、西川さんを知った。

にこにことして温厚、あたたかな赤味を帯びた満月のような感じのひと、と思ったのだが、実は内に灼熱のロマンを秘めたひとでもあった。

丹波の山奥で飛行機乗りを夢みた少年に、金子直吉、西川文蔵、といった個性的な経営者の率いる鈴木商店は、新しいロマンの世界でもあったはず。

だが、その会社が倒産する、サラリーマンにとっては、天地もひっくり返るような一大事であつたろうが、西川さんはその前後も、会社の仕事に疲れ切ったあと、バレーボール振興のため、新妻と力を合わせてガリ版を切ったり、資金をつくったりと、奔走を続けた。一文の得になるわけではなく、だ

れかに認められようというのでもない。バレーボールを通して、日本を愛したためである。日本のバレーボールの隆盛は、西川夫妻のこうした長年の努力のおかげのように、わたしは思える。

現実には、思えることなく、いつも夢をもち、夢を育てる。ロマンに賭ける。人間に賭ける。

西川さんは、恩人の写真をいつも懐に持っておられた。

ある上司が社内でも力があつたとき、その上司のエレベーターには、社員たちがわれもわれもと乗り込んだ。だがこの上司が失脚しそうとわかったとき、社員たちはあわてて次々とエレベーターからとび出していった。その上司と西川さんだけが残った。

「落ちるときも、最後までいっしょだと、心に決めていましたから。」と西川さん。

人間が人間に傾倒するとは、そういうことをいうのである。打算ではなく、ロマンの問題である。そして企業社会においても、そうした人間的な誠実さや心の熱さが必ず報われるものであることを、西川さんの「履歴書」が示してくれる。

といって、決して窮屈なひとではなく、むしろ、のびやかな考えの持主である。

西川さんのお子さんたちの結婚式は、能楽婚あり、音楽婚

ありと、それぞれ若いカップルの個性を生かしたユニークなものであった。

西川さんは、ゴルフもお上手で、とくにアマチュアでは使えぬといわれるドライビング・アイアンの手手として評判であった。大患いからすっかり回復された西川さんに、いつの日かドライビング・アイアンの牙えをみせて頂きたいと、わたしはわたしなりに夢見ている。

○

西川さんは、明治三十二年九月五日、氷上郡竹田村下竹田（現市島町下竹田）生まれ。旧姓須原。大正二年、竹田小学校高等科卒業。大正三年、神戸に出て鈴木商店に入る。大正五年、勉学のため鈴木商店退社。育英商業入学。大正六年、育英より神港商業に転学。大正九年、神港卒業。神戸高商（現神戸大学）入学。大正十三年、神戸高商卒業。同年再び鈴木商店入社。昭和二年、鈴木商店破綻により、新生、日商株式会社に参加。昭和三十三年、日商株式会社社長。昭和四十三年、合併により日商岩井株式会社と商号変更。同社社長。昭和四十四年、会長。昭和四十七年、相談役。

昭和六十一年六月四日逝去、行年八十六歳。
静かな、眠るが如き大往生であった。

△主な肩書▽

(財)日本バレーボール協会会長

アジアバレーボール連盟会長

国際バレーボール連盟副会長

(社)日本貿易会常任理事

日本パキスタン協会理事

日印協会副会長

日本インドネシア協会理事

関西スウェーデン協会理事

フィリピン協会理事長

日本メキシコ協会会長

(社)経済団体連合会常任理事

(財)関西経済連合会常任理事

△受章▽

昭和四十三年 五月 大阪府産業功労賞

昭和四十三年十一月 ブラジル文化勲章

昭和四十五年十一月 勲二等瑞宝章

昭和五十六年十二月 メキシコ文化勲章

△没後特旨叙位▽

昭和六十一年 六月 叙正四位銀杯一組

心からご冥福をお祈りします。

ふるさとと兄

須原松柏

幼き日の思ひ出は

ふるさとの上に

将 父の上に母の上に

すべては

励みの心のいづみ

よく努め よく学ぶ

ふるさとの

幼き子等を思いて

甲戌の春 於神戸

西川 政一

昭和四十八年十一月三日、市島町竹田小学校において創立百周年記念祝典がにぎやかに催された。

そのとき新設された記念児童像（なかよし）―同窓生芦田政一氏作―の隣りに並び立つ二宮金次郎翁（もと銅製だったが戦時中軍用資材に供出され、いまは御影石となる）の台の背面に浮き彫りされた前掲の詩（寄贈者西川政一の数少ない詩）を発見した。

遺著『世界は一つ』によれば、この像の由来は次のとおり

(正)

である。

昭和十年ごろ、村長さんがみえ、銅像寄付の申し出があったが一応断った——月給百円そこそこのところ申し出金額は三百円——が、しかし考えてみれば、懐しい故郷、子供のころ通った小学校は更に思い出深い。あの小学校にはやはり当時の自分と同じ年ごろの村の子供たちが通学しているのだと思つと、金銭の問題を超越した“人間としての情”に動かされてしまったのである。

この竹田小学校の百周年を祝し、西川政一として何か記念品を配つたらとのことで、小生は小生の親友依田則夫君（故人）と計り——本人の同意も得——文鎮を作成することとした。表は「祝 竹田小学校創立百周年」、裏には前掲の詩を浮き彫りにし、ゆかりの人々に贈呈した次第である。

＊

片田舎の小学校の校庭の片隅に立っている少年金次郎の薪を背負い本を読む姿は、貧家の三男として育つた幼き日の故人の象徴でなくて何だろう。

広い世界にはばたかせたその力の源泉は、
ふるさとを思う心

絶えざる 励みの 心のいづみ

＊

＊

愛郷の士 渡辺金三氏逝く



関東水郷友会前副会長、渡辺紙工業・製袋株式会社社長、渡辺金三氏が、昭和六十一年十一月三日、肝硬変のため急逝された。享年七十九歳であった。

十一月五日に練馬区桜台の自宅で密葬、十四日に中野・宝仙寺において盛大な社葬が行われ、広い境内は各界多数の弔問客で埋まった。友人代表として関東水郷友会会長・伴伸信次氏が弔辞を読まれ、並みいる参列者の感動をひとときわ高めた。伴伸会長の弔辞はおよそ次のような内容であった。

『……渡辺金三さん、あなたが渡辺紙工業株式会社並びに渡辺製袋株式会社を、今日斯界屈指の企業にまで育てあげられたその原動力は、いったい何であつたのでしょうか。それは、丹波のあの清澄な空のもと、あの美しい山河に育まれたあなたの、慈愛の魂、寒村・氷上の、あの厳しい環境に培われたあなたの、何にもめげぬ強い意志のたまものではなかつたでしょうか。……郷友会では来年、あなたの八十

歳の祝寿会を計画し、あなたもそれを楽しみにしておられたと聞きます。……あなたが生涯持ち続けられた郷土愛は、私共郷友会後輩のもって範とすべきところであり、当会の歴史に永く語り継がれることでありましょう。……」

○

故渡辺金三氏は、明治四十年四月十日、水上郡沼貫村朝坂（現水上町朝坂）に生まれ、旧制中学に進み、大正十二年、義兄・渡辺泰造氏の創立した株式会社渡辺製袋所に入社、大阪、京城、広島、名古屋の各出張所に勤務、昭和十三年、常務取締役となって東京支店をつくった。

昭和二十年、株式会社渡辺製袋所は渡辺紙工業株式会社と改名、昭和二十五年、専務取締役、三十四年に代表取締役社長となった。昭和三十六年には渡辺製袋株式会社を併設、この頃から当社は急成長を遂げ、たちまち年商百億円を超える企業となった。昭和四十年、全国製袋工業会副理事長となり、昭和四十六年から五十七年まで関東水上郷友会副会長も務め、会に寄与するところまた大きなものがあつた。

○

当社の社員は当初その大半が郷土出身者によって運営されていたのも大きな特色であつた。昭和五十八年秋、渡辺金三氏は郷里の各新聞に挿入して郷土から人材を公募したことがある。新聞紙大四ページにわたる美しいカラー刷りで当社の

全容を紹介し、『丹波水上の地に蒔かれた一粒の種子が、星霜七十余年、日本第一の製袋企業に成長』の見出しのもと「郷土のみなさまへ」と題して次の一文を掲げた。

『当社は明治四十五年、当時の農村の窮乏に心を傷めた創業者渡辺泰造が、副業の一助にもと、沼貫村朝坂の一隅で紙袋の手貼り加工を始めたのが発端であります。大正十五年、柏原町に工場を移転、昭和三年にはいち早くドイツの輪転製袋機を導入、わが国製袋業界近代化の端緒を拓きました。引き続き東京、名古屋、大阪、福岡にも工場を建設、終戦の混乱期も無事に乗りきり……』

思えば、会社変遷の歴史はまた私の人生の航跡でもあります。僅か数名で始めた事業が、七十年を経た今日、四百名を擁する会社となりました。丹波で蒔かれた一粒の種子が、よくぞここまで育ってくれたと、数々の想い出に浸りながら感懐を新たにいたします。

現在、紙工業、製袋の両社は六支店・七工場を有し、年生産額は近く二百億円に達する見込みであり、目下最新鋭機を続々と設備していますが、会社にとって何よりの資産は優秀な人材であります。当社は現在、管理職の六十名を丹波出身者で占めている会社ですが、近年非常に残念なことには郷土出身の応募者が少いことでもあります。出身地を問わず優秀な人材を募るのが企業本来の姿勢ですが、できることなら当社

発祥の丹波の地から、バイタリティーと創造力ある人材が、当社の入社試験に挑戦してくださることを念願しております。

寒中に他の花木にさがけて咲く梅の心と、目を世界に向ける広い視野を持つようにと、地球印に梅花をシンボルマークとして七十余年、包装一筋に生きてきた会社です。……』

○

渡辺金三氏は、こよなく郷里を愛した。酒は丹波の“小鼓”を好み、季節が来ると山椒の“木の芽”なしにすまなかった。お得意をよく松たけ狩りや佐治川の釣りに誘い、ときには猪を丸ごと贈ったこともあった。郷里を訪れては村人と談笑するのが何よりの楽しみだった。氏が関東氷上郷友会を愛したのはいうまでもない。会合にはよほどのことがない限り、晩年までよく出席した。

人一倍き帳面な性格で、物腰が低く、衣食住すべてにわたって一流好みであった。また恐るべき記憶力の持主で、晩年『紙工業七十年、製袋二十年の歩み』と題し、三百ページに及ぶ社史を書きあげて刊行したが、七十年間のできごとをその年月や経緯に至るまですべてが詳細に記憶にあったのである。その巻頭に『私もはや七十有余歳、この“七十年の歩み”は私の墓標のつもりで書きました。今後、わが社の事業がいかに大きく成長しようとも、顧客に対して常に“誠心誠意のサービス精神”を忘れないことが大切であります。そして今

後は、古い社歴と資本力だけに頼ることなく、常に新製品の開発をもって会社躍進の原動力を培っていただきたい……』と記している。

一途に自からの信念を貫き通した生粋の丹波人であった。またまよとわに安らかに――。

(玄二)

渡辺金三さん と

須原 清

約束どおり九時五十分西武池袋線桜台駅に着くと、同行の足立正さん、故松山竹水さん等の顔が見え、駅前に待っている渡辺さんの車へ乗り込む。

国道十八号線をとり、渡辺製袋俵の藤岡工場へ着く。よく整備・整頓された工場を約一時間見学して、近くの料亭に案内され、鯉の活き作りその他丹精の珍味で舌鼓を打った。

ときは四月二十八日。陽気は申し分なくそれに天皇誕生日の前日にアヤかったか快晴で、お神酒も程よくきいてきたので、お目当ての館林『ツツじが丘』へ向かう。

満山これツツジでしかも満開ときているのでまるでおとぎの園に踏み込んださまである。

水に映える美しい丘を後に、文福茶釜で有名な茂林寺まで足を伸ばし、寺宝等を拝観して一同帰途についた。

このたび渡辺金三さんがご急逝なされたことを足立正さん

より承り、喫驚するとともに、館林行きの楽しかった一日のことが思い出され、あれからもう何年経ったか?と古い日記帳を引っ張り出し、それが昭和五十三年のことだったと分かり、懐旧の念ひとしおである。

来年十一月には「山ざる会」の祝寿会で、ともに元気で傘寿を互祝することを楽しみにしていたのに――
ご冥福を祈るばかりである。

村上大憲老和尚をしのぶ

堀井隆川

真照寺住職(山南町)



昭和五十八年十一月に竹橋会館(千代田区)で開かれた八十歳を迎えた郷友を祝う「祝寿会」での五名の祝寿者の中の一人であった村上大憲老師が、昭和六十年十月三十日午前七時、自宅療養中老衰のため静かに遷化されました。世寿八十三歳。

祝寿会では代表して謝辞を述べられ、「まだまだ元気で他人から七十歳位に見られています。我が国も今や世界一の長寿国になりましたので、今や八十歳以上生きなければ長寿者

に入ってもらえません。私たちも頑張りますので、私たちより若い皆さんもどうか健康を通していただきたい」と語っておられたのが印象的であったのに訃報に接し残念な気持ちでいっぱいです。この会の後で開かれた五十八年度総会でも、老師は顧問をお引受け下さり、まだこれから本会の歩みを温かく見守って頂き、相談できる立場におられただけに愛惜に堪えません。

老師の名声については存じておりましたが、私と老師との親しくお話しする出合いは「山ざる」編集部で、丹波出身の私ども二人の僧が、大都会で新寺を建立して法灯を掲げている異色の存在を対談で記事(「山ざる」第十五号『曹禅寺を訪ねて』)にしようと企画された時です。昭和五十八年十月で、編集部の宮野近氏と一緒に大田区池上七丁目にある大乘山曹禅寺を訪問しました。高い塀に囲まれた立派な総けやき造りの山門をくぐると、本堂前は高所から大慈大悲の平和観音に私たちが見つめられる格好で、白い石砂で敷き詰められた庭園は、禅の心を自ずから表現しているような築造で印象的でした。

老師は、すらりとした背の高い方で、座禅で鍛えられた端正な姿勢と、終始にこやかに私たちを接待して頂だき、本堂、書院、庫裏、檀信徒集会場など案内して下さいました。禅寺らしい本堂の造りと、本尊釈迦如来を拜ませて頂だき、秘蔵の「豊

臣秀吉直筆の書状」まで披露され感激したものです。芦田均元総理や根津嘉一郎、五島慶太、築地の料亭「新喜楽」の女将・伊藤さんのお話等、著名な人々が登場し、その歴史とご交際の広さに人柄を感じ入りました。

その後、昭和五十九年夏にも、他に用事があり突然お寄りしたにもかかわらず、親切に応待して頂だき、その時お話ししたのが最後となりました。

老師は、明治三十六年旧幸世村・氷上で村上茂治氏の五男として生まれられ、近くの檀那寺・帰命時の住職にかわいがられ、十歳で通学しながら黒井の称名寺の弟子として預けられ、十三歳の時、成松・宗蓮寺の関本大仙和尚おしょうに弟子入りし得度されました。以後、成松高等小学校を卒業し、千葉の曹洞宗立大正中学院三年に編入、卒業後の大正九年、大本山永平寺専門僧堂に安居三年。特別僧堂に安居二年勉道しんどう精進しやうじんされました。次いで東京麻布の長谷寺内の永平寺別院に、本山役僚として勤務され、それが東京に永住されるきっかけになりました。

大田区の矢口禅宗教会を創設され、川崎市清浄院住職、柏原の明願寺住職等三カ寺も兼務されました。そして矢口の教会に居住されてから、一大決心して悲願の現在地に、昭和十三年盛高院（現在の曹禅寺）という禅道宣布の新寺建立をなされたのです。当時の新寺は厳しい制約のある条件で許可が

おりるなか、敷地は老師が全部法人に寄付され、檀信徒の力を結集して立派に寺を建てられたのもつかの間、昭和二十年四月の大空襲で全焼してしまったのです。直ちに仮建築から、昭和三十三年に寺号を曹禅寺と改め、今の本堂を総けやき造りで再建され、曹洞宗管長親下を拝請して落慶入仏式、結制上堂を執行されました。昭和四十三年に書院・庫裏も建築、あわせて庭園築造、山門建築もされ、見事に復興の念願を達成されたのです。

大田区は、震災後、郊外の住宅地として急激に人口増加したが、禅宗の寺は馬込に二寺あるだけで、禅門帰依者が不便を感じているところに土地を求め、しかも池上本門寺（日蓮宗本山）のおひざ元で、直接本門寺に掛け合って所有地の交換もされました。このようなバイタリティーと労苦に敬服しました。

後継者でお弟子（子息）の悟悠師を今春二月五日お訪ねしてお話ししました。老師は開創開山（何もないゼロから新しく造る）新寺開山であり、第一世住職として本山からも業績・功勞が認められ、権大教師を追送され宗門の正式な本葬次第にのっとり、永平寺副貫首老師、本寺成松宗蓮寺大方丈、永平寺顧問、馬込万福寺大方丈はか百余名の御隨喜で破格の盛儀を執り行なわれたと承りました。悟悠師は、「唯一の師匠であり父であるわけですが、若いころの私の目には家庭で

はとても厳格な人でした。一緒の部屋で話しをさせてもらうという事はできない程でした。母親の苦勞も大ですが、今は私を厳しく育ててくれたことに感謝しています。

ゼロから出発して寺を三回も建て直し、路線を作ってくれた功績は宗門の内外に知れ渡り、伝灯を守っていく苦勞もあります。まだ師匠のやり残した仕事を引き継ぎ、託された弟子として禅宗寺本来の生き方を檀信徒一同と心を合せて精進勉道に務めたいと思っています。偉い父だったと今は思い出が尽きません」と力強く語られました。本年十月三十日には、開山三回忌法要と共に開創建五十年記念式典、併せて悟悠師晋山式を執行される由にて準備にかかっておられるとの事です。

私も同じ郷里出身のこのような偉大な先輩を見習い、頑張らねばならないと心身を引き締めています。

心から老師のご冥福を祈念し、功德力を頂戴したいものと願うのであります。

合掌。

学友故小西保君をしのぶ

―郷土が生んだ真の教育者―

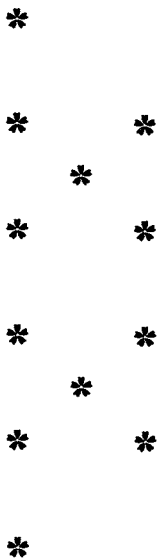
莊 正 衛 (柏原町)

昭和六十一年八月十五日(お盆の日)朝六時半ごろに起床してまもなく、胸の痛みを訴え、その後三時間程の間に眠るように安らかにあの世の人になられたと奥様からうかがった。人生は朝露のごとしというが、これほどまでに人の命のはかなさを感じたことはなかった。

「生者必滅、会者定離」古い詞のとおり、彼は永遠の世界へ旅立って再び帰らぬ人となりました。この世ではもう会うことも語ることもしない。さみしさたえようもなく、悲しき極みである。

小西君と初めて出会ったのは大正六年春、郷里の小学校入学の時、そして、同じ土地の中学と一緒に卒業、その間十一年、同じ庭に学んだ。卒業後、一時大阪のご令兄宅に寄ぐう、私も近くの叔父の家に居た。しかも、ご令兄と叔父は親友の間柄だったこともあり、自然に交遊を深めていった。

私は実業界に入ったが、彼は教育畑に進んだ。彼の真しな学究的な生き方にいろいろと教えられ、特に彼の教育哲学に興味を覚え、ともに語ることがこよなく楽しかった。おそく



までお邪魔してはご家族ぐるみでいつも温かくして頂いたことは生涯忘れることのできない、すがすがしい懐かしい思い出である。

彼は温和で、いつも微笑をたたえ、まじめな人格者であった。私は今まで彼のような立派な教育者に接したことがない。私は良き友を持ちえたことを限りなき生涯の喜びとしている。彼がたぐいまれなる人格を形成せられたる要因はいろいろあると思うが、その一つ二つをあげるならば、まず第一に血統であろう。

彼の生家田家は郷里の古い名家であり、祖先には有名な徳川時代の俳人田捨女がある。明治に高名をなしたる人は枚挙にいとまない。その一人、元東京物理大学長小谷正雄氏はわが国物理学会の第一人者であるが、彼の従兄弟であることをみても、ほかに多く語る要はないであろう。

いまひとつ初期教育の環境について、母校の崇広そうこう小学校は織田藩高の流れをくみ、兵庫県下一、二の名門校であり、当時の山脇伝太郎校長もまた屈指の名校長であった。

彼はあるとき、今日の自分があるのは先生のおかげであると語ったことがある。私はこのような自然の美しい環境と歴史につつまれた学校は外に見たことがない。ちなみに同校庭には、田捨女と叔父田艇吉翁（元住友総理事）の銅像が立っている。

また、柏原中学は兵庫県では姫路中学と神戸一中に次ぐ名門で近畿地区で総理大臣（芦田均）を出した学校は他にはないと思う。

やや自慢話のように思われるかもしれないが、客観的事実であり、教育環境がいかに人格形成の上に大きな影響を及ぼすかを思わずにいられない。

＊

＊

前会計理事・小谷正己氏逝去

小谷正己さんが、昭和六十一年六月二十八日、なくなられました。六十九歳でした。

いつも若々しく、お元氣な方という印象を誰にも持たれておられた小谷さんが、こんなに早く亡くなられるとは、信じられない思いでした。小谷さんは青垣町の出身で、逗子でつるや洋装店を経営しておられ、逗子商店街や、つるやチェーンの役員として活躍しておられました。

氷上郷友会では、足立前会長のもとで、会計担当理事として十年にわたり、会の財務確立に大きく貢献されました。

心からご冥福をお祈りいたします。

（足立正）

立身と奉仕

― 足立三治さんの自叙伝から ―

池 田 忍 (山南町)

関東水上郷友会前会長の足立三治さんが、このたび満八十歳の傘寿を記念して、自叙伝『私の歩んだ道』を上梓された。私は、小さな出版社を営み、自叙伝関係の企画を進めていた関係でお声をかけていただき、出版のお手伝いをする光栄にあずかった。そこで、本書の紹介を兼ねて、その概略を記すことにした。

足立三治さんは、高級婦人服製造卸の老舗『つるや産業株式会社』の社長さん。今もかくしゃくとして、その道六十余年の大御所である。出身は、丹波の秘境？遠阪村遠阪(現青垣町)、但馬への街道筋にあつて往時は旅人で賑わった「東の森旅館」の次男に生まれた。尋常高等小学校を優等で卒業したが、父親にむりやり家業に就かせられ、悶々の日を送るうち、降って沸いたように東京から就職話が舞い込む。チャンス到来と、故郷を出奔する。大正十三年九月、一年前の震災の傷跡が残る東京に降り立った。

奉公先は、同郷の大先輩、矢本平蔵氏が経営するつるや洋装店の麻布支店、同郷の先輩店員達もいて、一年遅れの新参

者にはとりわけ辛い奉公の日々であつたが、持ち前の負けん気と熱心さで頑張り抜き、やがて店長格へ。そして独立まであと一歩という時、思いかけぬ病魔に冒される。

結核性腰椎カリエスという大病を背負つて、二度と帰らぬと決めた故郷へ。この無念さは、察するに余まりあるものであるが、われらが三治さんはあくまで気丈、五年間に及ぶ闘病生活に耐えて見事難病を克服される。

この闘病記は、本書の旺巻であるが、厳しい試練に耐えぬく強靱な精神力と克服への信念は、その後の三治さんの人生と事業の展開に一貫して流れるテーマである。「神仏のお加護があつたればこそ」、もともと信仰心の厚い家庭に育った三治さんは、この闘病試練の中で「信仰心」を不動のものにされる。三治さんが好んで使われる「信念」という言葉は、この「信仰心」に支えられ、一体となつて、「不動の信念」へと強化される。

再起を期して、舞い戻った東京は無一物の若者を試すには十分すぎるほどの修羅場であつた。「行商」しながらの苦難の道であるが、あるとき鎌倉の避暑客目当てに開いた出張店舗が大当りを取り、独立開店へのチャンスをつかむ。川崎市内に小さいが待望の独立店舗を持つ。かと思つたら早くも一年後には駅前が目抜き通りに進出して評判の繁昌店となる。このあたりの決断と行動の素早さ、度胸の良さは驚くばかり

である。

戦後のスタートも早い。焼け跡の匂も残る昭和二十一年三月、小売業から製造卸への転進を期して「つるや産業株式会社」を設立される。創業時代の苦労は勿論だが、持ち前の誠意と努力で次々と難局を乗り越えてゆく。若いときからそうであったが、この人が困り事、頼み事をする、不思議と救いの神のような人物が現われる。熱誠というのか、人の心を打つ神通力があるのであろう。三治さんは「縁」というものを大事にされ、感謝の心を忘れない。

会社が軌道に乗り発展するにつれて、三治さんの旺盛な活動力は「社会奉仕」に向けられる。町内会からロータリークラブ、商工会議所、そして流通近代化をめざした卸売センター設立と、活動の場が広がる。一部の指導者に私物化された川崎商工会議所の改革に敢然と立ち向う姿は、さっそうとして三治さんの面目躍如たるものがある。ロータリーでは毎週の例会に二十五年間無遅刻無欠勤の記録を打ち樹て表彰されたことがある。自分を律するのに大変厳しい人である。そうしなければ他人の面倒などは見られないのであろう。

今ではあまり使われなくなったが、「立身出世」という言葉が「世のため、人のため」にあることを、この明治生まれの事業家は、何のてらいもなく実践してみせてくれる。そこには燃えるような正義感と世の中への感謝の心があり、それが

ごく自然に、純粹に発露するところが、三治さんの素晴らしい人間性である。

最後に、編集後記風に書けば、三治さんは知る人ぞ知る能筆家、流れるような筆致に苦労したが、そのうち目で追ってゆくよりも声に調子をつけて読んだ方が判読しやすいことがわかった。よほどの集中力で一気に書かれたものであろう。その息づかいで文脈が通じるようになった。最後の原稿で、「もう疲れたよ、二度とは書けないね」とおっしゃった。三治さんが初めてもらされた「弱音」を聞いて、なぜかホッとした。

北摂丹波の祭典 ホロンピア'88

テーマ 新しい田園都市への出発

国鉄福知山線の複線電化、近畿自道車道舞鶴線の開通を契機に、阪神都市圏の一翼を担うにふさわしい「京阪神のなかの田園文化都市づくり」を目指し、三田市、水上郡、多紀郡、美濃郡の一市十一町を会場に新しい町づくりの多彩なイベントが企画されている。

会期 昭和六十三年四月十七日(日)～十一月六日(日)

会場 三田市、美嚢郡吉川町、水上郡柏原町・青垣町・水

上町・春日町・山南町・市島町、多紀郡篠山町・西紀町・丹南町・今田町

イベント

△二十一世紀・公園都市博覧会

三田市の北摂三田ニュータウン南地区を会場にポンペイから未来都市まで、人間と文化の都市物語をドラマチックに演出する。世界に知られる丹下健三先生設計のテーマ館・ホロニアを始め、中世の町並みや世界の民家、二十一世紀の夢の都市を展示する。また、楽しさを演出するため、プレイランド、マジックハウス、バザール、レストランなども設置される。

△ひょうご食と緑の博覧会

水と緑が美しい篠山盆地の一角、四季の森公園（丹南町）を会場に農林省が全国四カ所で開催する「食と緑の博覧会」を誘致、先端技術が生かされた未来の農業を映像と展示で紹介する「二十一世紀農業展」、変わりゆく食文化の行方を考える「食文化と明日の暮らし展」などが開催される。

△二十一世紀をにう少年祭

丹波CRSクラフト創造遊園地（柏原町）を会場に県、全国、海外の青少年たちが個性と創造力を伸ばし、幅広い国際

感覚を養う多種多様な交流と友情のイベントが展開される。

△ひょうご健康・福祉祭

人生八十年時代をひらく健康と福祉の祭典を北摂・丹波地域の各施設を利用して開催する。

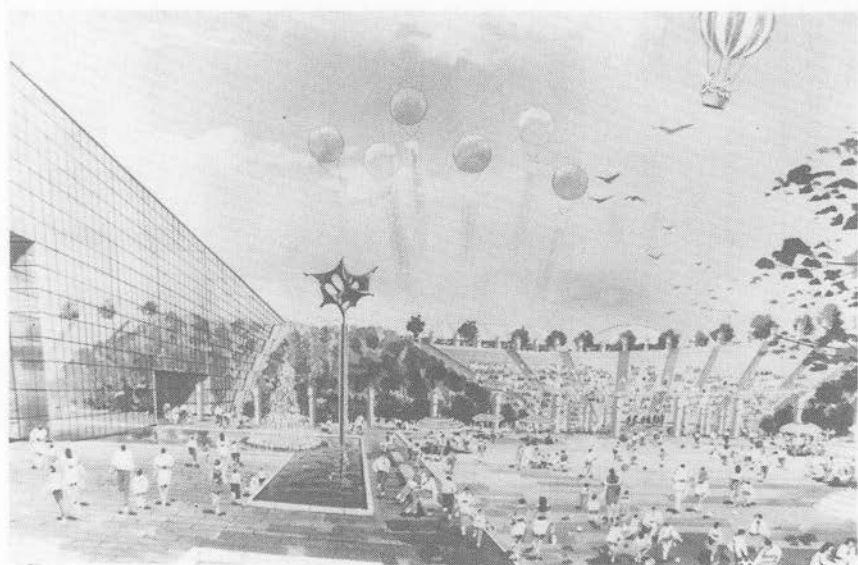
△その他

立杭焼と古窯展（丹波伝統工芸公園・今田町）、田園交響芸術祭（たんば田園交響ホール・篠山町）、阪神・たんば青少年交流（丹波少年自然の家・青垣町）、兵庫県能楽文化祭（春日神社能楽殿・篠山町）、丹波ふるさと美術展（春日町）などのイベントが開催される。

さらに、「丹波国フェスティバル」「川と野と文化を考えるシンポジウム」「森林浴大会」「フラワーロード・コンクール」「花と味覚まつり」「漢方の里づくり交流事業」「ふるさと街道の指定と旅」「ひょうご国民文化祭」などが企画されている。

△編集部より▽ 北摂丹波の祭典の好機に郷友会では郷土訪問のバスツアーを計画しています。六十三年五月ごろ、新緑に包まれた丹波を数日間訪れます。祭典の会場や古寺をめぐったり、丹波料理？やおふくろの味を味わったり、各自のプランで生家や親戚、幼なじみを訪ねたり、好き者は水上カントリーでゴルフもよし、そんな自由のきく楽しい旅を計画します。

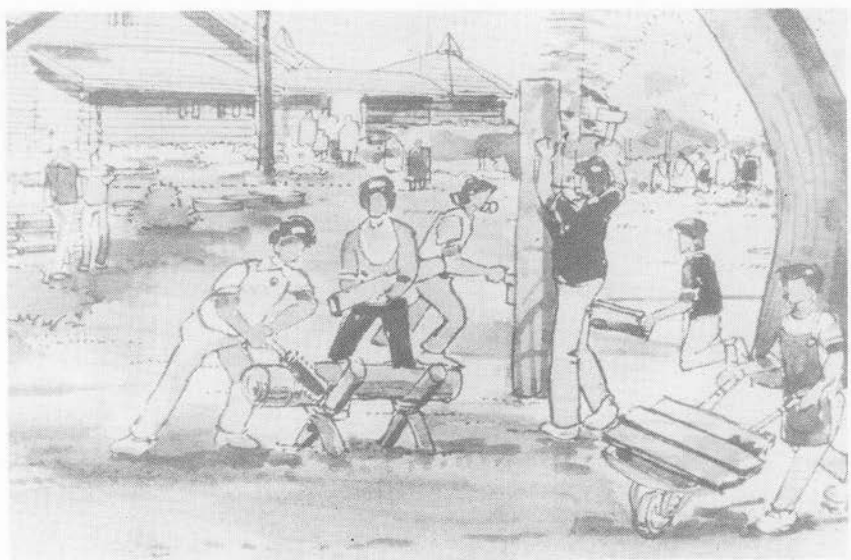
どうぞご期待ください。詳細は今秋の懇親会で発表の予定です。



三田都市博・ホロンピアと円形劇場



四季の森公園



柏原町・21世紀をになう青少年祭

バレーボールにかける夢と青春

森 田 信 三

(県立氷上高等学校校長)

郷土にがいせんのこと



昭和六十一年十一月十七日夜七時
特急電車「北近畿号」が黒井駅に到
着しました。駅頭に集まった三百人
を超える人々の間から一斉に大きな
拍手が起きました。山梨県で開催さ

れた「かいじ国体」少年女子バレーボール部で優勝の本校女
子バレーボール部選手が帰郷してきたのです。選手諸君は一
瞬何があったのか戸惑った様子でしたが、仮設舞台に立ち中
井県民局長、杉本春日町長のお祝いの言葉を頂いて、厳しか
った試合を勝ち抜いてきた感激と地元の方々の皆さんのご声援への
感謝に涙ぐんでいたのが印象に残っています。

堂々の二冠達成

昭和六十一年七月、岡山県津山市で開催された全国高校総
合体育大会（全日本バレーボール高校女子選手権大会）で優
勝し、日本一の偉業を成し遂げ、優勝杯・旗を持ち帰りました。
全国四千三百校という高校女子バレーボールの頂点に立



かいじ国体優勝歓迎会 黒井駅頭で杉本春日町長よりレイを受ける

ち、本校の歴史に大きな足跡を残してくれました。優勝を祝して坂井前県知事から“心”の文字を頂き、校門の傍に優勝記念碑が建てられました。

兵庫県スポーツ賞受賞のこと

昭和六十一年十一月には、兵庫県スポーツ賞が本校女子バレーボール部に贈られました。県大会では、六年連続優勝を飾って県内では敵なく、全国でも昭和五十八年の国体で優勝という輝かしい成果を上げました。このたび、兵庫県からバレーボール部専用体育館を新築して頂きました。

いずれも名誉なことと感謝しています。



61年度全国高校総体（全日本バレーボール高校女子選手権大会）優勝旗

輝かしい試合成績

名実共に、全国高校バレーボールの“トップの座”に着きました。が、全国大会に出場できるチーム作りを目指して九年目にして得た壮挙です。

下の成績は、よい指導者のもとで、素質のある選手が、規律と基本を重視した練習を徹底的に重ねた結果であるといえます。

日本一の監督 高見諭教諭のこと

本校のバレーボール部は、高見監督をぬきにしては語れません。

高見先生は氷上郡春日町多利生まれで、柏原高校から日体大に進み、高校教師になった昭和三十七年春から二十五年間をバレーボール一筋に打ち込んできました。

昭和五十二年、市立尼崎高校から本校に転任し、本校教育の活性化を図る一助として、バレーボールの育成にとりくみました。交通に恵まれず、県立学校という枠の中でのチーム作りは本当に困難なものであったといえます。全く無名の田舎のチームを、県下では七年間無敗、全国優勝三回という日本の頂点に育てあげたのです。高見教諭はまさに熱血漢です。早朝と放課後、毎日五時間以上の練習を続けるのです。いつもコートに立たない日はありません。練習の厳しいことでは定評がありますが、「監督と選手は信頼関係が何よりも大事

年 度	高 校 総 体			県 大 会	選 抜 大 会		国 民
	県 大 会	近畿大会	全国大会	新 人 戦	県 大 会	全国大会	体育大会
55	2	ベスト 8	ベスト 16	1	2	1	—
56	1	3	32	1	1	3	—
57	1	2	3	1	1	2	—
58	1	1	2	1	1	8	1
59	1	3	32	1	1	8	—
60	1	1	3	1	1	3	ベスト 16
61	1	1	1	1			1

だ」を持論にしています。時には、合宿所に泊まり込み、選手との相談相手になっています。「部員はわが子のように」と語っています。

コーチ富田善弘教諭のこと

今年の目標は「もちろん優勝です」と張り切っているのは富田コーチです。但馬の豊岡高、日体大を経て、本校の体育担当教諭となった人です。練習しないと緊張感がはぐれてだめになるというバレーボールだけに、常に選手の指導に打ち込んでいます。

彼は部員の良き兄さん役なのです。

バレーボール部員のこと

現在、部員は十八名で、県下各地より進学してきています。全員が生活科で、授業や農場での実習、当番や学校行事等に積極的に役割を果たしています。学業とバレーボールを両立させているのです。

気持よく挨拶できる人、他人の話が素直に聞ける人、感謝のできる人、人に尽くせる人、「こんな人の集まり」を合言葉に、全員が合宿所で共同生活を送っています。本校バレーボールの心髄であるコンビプレーもここで培われます。来る日も来る日も血のにじむ練習を繰り返し、ひたすらバレーボールに青春をかけています。部員は、「勝つこと」の夢でいっぱい입니다。体育館にも「私たちは絶対に勝つ。私たちに



昭和61年度 全国高等学校総合体育大会
全日本バレーボール高等学校女子選手権大会

1986.8.1~5
岡山県津山総合体育館・他

氷上高校女子バレーボール部メンバー



日本一をめざして今日も猛練習

その力がある」と書かれた横断幕を垂らし、毎日、練習前には大声でコールを繰り返しています。

部員は高校三年間、バレーボールを通じてしっかりと人生観を身につけてくれるものと確信しています。

バレーボール部卒業生のこと

本校のバレーボール部出身選手は、実業団リーグや大学で活躍しており、明日の日本を背負って立つ人として育っています。全日本の石掛美智子さん（イトーヨーカドウ）を始め、十数名の選手が実業団リーグに登録されています。また全日本学生選手県大会で優勝した筑波大の白谷智美さんは名セッターとして活躍しています。今春卒業する選手八名も、大学進学二名、実業団入り六名と進路も決っております。なかでも、全日本高校選抜チームに参加した桑村、岡村の二選手は全日本級の実力保持者だけに今後の活躍が期待されています。

暖かいご支援・ご声援に感謝していること

県立学校という枠の中での部活動とはいえ、これほどの成果を上げ得たことは、兵庫県や春日町当局を始め、関係各位のご指導・ご支援の結果と感謝しております。

今年も、わがチームは全国優勝を目指して頑張ります。ご支援・ご声援くださいますようお願い申し上げます。

特集 わか青考のふりかへ

徒歩通学の思い出

片山 日幹（春日町）

（日蓮宗大本山北山本門寺貫首）

私は丹波国領（今は春日町）東中の貧寺「本妙寺」に生まれ、父が学校はあるだけ行けというので尋常小学校卒業で中学校に行くことを許されず、進修高等小学校を卒業後柏原中学校に入学したが、汽車や自転車通学を許されず、徒歩通学せよとの父の厳命で、毎日七里（二十八キロ）の山道を徒歩通学したが、風雨降雪の際の困難は言語を絶し、一面白銀の中で道もわからず幾たびか川やがけから落ちてはい上がる力もなく、こんな苦勞をするなら凍死しようかと思つたこともあつたが、またしてもはい上がり死に切れなかつたのも神仏のご守護であつたと思う。毎朝三時起床、一時間勤経、四時出発、暗い間は走り続けた。登校の時間に間に合わないからでもあるが、何ぶん睡眠時間が足りないので、まともに歩い

ていれば眠くてがけから落ちるし、電信柱等につかるからである。夜が明ければ風呂敷の書物を背負つて予習、復習または宿題を書かねばならない。帰途また然りで毎晩八時、九時、十時の帰宅であるから通学の途中が勉強場である。歩きながら英語の辞書の単語を暗記したり、幾何、三角の問題を解き、先生の解き方とは違つていても答えは同じであることがあつた。真つ暗な往路でいちばん恐しかったのは野村と朝日村の中間にある避病院の前を通る時に、火葬場の所にりんでも燃えていたのであろうか、青い火が燃えているのを見た時である。ソラ幽霊が出たと思ひ、やっとそこを通り抜けると突如キヤツという叫び声がしたのでお化けと思ひ、思い切つて走り、遠くから石を投げた。何とこじきが暗い道に寝ている上を通つたことがわかつて謝つたのであつた。歩いている近くを汽車が通り、汽車通学をしている友達を見るとこつこつ歩いて通う自分がみじめであつた。

父は嚴格で今日は頭が痛いといえは鉢巻きをして行け、腹が痛いといえは腹を押さえて行けというようなわけで、苦難

を極めたが、五ヶ年間は皆勤で、学力も優秀で一貫することができた。

私のクラスは秀才ぞろいで、早世した井浪弘君や数年前に亡くなった有田喜一君らとは首席を争ったもので、二番にたった時ほど悔やしいことはなかった。村の人から歩いて五ヶ年通学ができるか、とからかわれたが、なにくそ頑張ってみせろと思つたものであった。八十九歳の今でも日常生活に張りみせているのは父の硬教育によるものと感謝せずにはいられない。

大正八年卒業が間近になつたころ倉塚源太郎校長が父を訪ねて来られ、柏原中学校の先輩の実業家が是非とも私を無条件で援助したいとの申し出があり、子息は勉強がよくできるから官立の高等学校から工業大学に進学するようにして頂きたい、と勧められた。父のそばで聞いていた私はクラスの秀才が皆官立の高等学校を受験するので、自分もどうしてもそうしたいと願つたが、父は頑として聞き入れなかった。校長先生は檀家総代の松山善雄氏を通じても再三父に勧められたが、父は僧には僧の道があるとして、遂に私は残念ながら日蓮宗大学（立正大学の前身）に入学することになった。父は万事に厳しかったが愛情も強く、夜どんなに遅くかえつてもそれまで待つて、私といっしょに食事をし、また私が予習復習している間は自分も読書をして苦楽を共にしてくれた。

小学校の上級のころからは、休日や休暇には私が内外の清掃役を勤めたが、点検が厳しく寸毫の手落ちも許されなかった。広い庭の樹木の剪定も自分の役目で下手な庭師よりは上手にやったものだ。また、自分のものとはもとより父の衣類の洗濯もした。

父は私が五歳の時からお経や漢籍を教え、毎晩長火鉢を挟んで難かしい仏教の話や先哲の伝記など懇切に話してくれたが、ちんぷんかんぷん分からなかった。父は毛穴の虫に聞かしておけばいつかは芽生える、といい、私が眠くなれば耳を引っ張りほうをつめて根気よく聞かせたものである。後年私が仏教学の研究に興味を持ち、立正大学、大正大学、駒沢大学、高野山大学などで仏教学を講ずるようになった所以であらう。

今や物質文明は極度に進み、特に日本は経済大国となり物資は豊富であるが、人道は廃たれ、あらゆる非人道的なことが横行して宗教家の任務の重要性を痛感するとき、多くの宗教家の墮落を嘆くと共に、父が普通の大学に進学せず、有り難い申し出を拒んでまであえて仏教大学に入れ宗教家にしてくれたことを今更ながら感謝せずにはいられない。私は五歳で出家して以来学問と同時に毎朝三時に起床、水行、勤行修行に励み、七十六歳まで寒暑をいわず水行して身に威力をつけ、医師から見捨てられた癌、精神分裂症の難病の者を

多く救い、濟世度生の宗教家としての任務を果し得ることに感謝すると共に、もし私のごときものが父の命に背き世間に出ていたとすれば大失敗したであろうことを思う時、父の教訓に今更ながら感謝するものである。

私は生来愚か者で人が一度読むところを二度読み直して学ぶが、ごまかすことなく正直でありたいとの信条で愚直道人と称しているが、これは全く父が身を以て教訓してくれたたまものである。日蓮聖人が「仏になる道は師に仕うるに過ぎず」と申されているが、師父にひたすら給仕奉公のできる自分をただただ感謝するものである。老体で記憶力が衰え筆走らずで筆をおく。

ふるさとと青春

林 田 孝 子（柏原町・旧姓田）

柏原町下小倉の山の迫りました所を大部谷といっておおだに
て育ちました。

家の前庭から茶畑、桑畑などを通り越しますと山から流れ出た小さな川があり、これが柏原川になると記憶しています。川を渡り大きな杉の森を右に折れて少し行きますと大池の堤に出ます。用水池ですが両側を山に囲まれて美しく青々と水

をいっぱいたたえており、中学校のボートの練習場でもありました。浅瀬は子供が水遊びや水泳のけい古で夏は賑わいました。この堤から見ます円成寺は山の緑に包まれて美しい景色だったと懐しく思い出されます。

山里でございますから四季折々の山菜などに恵まれ、ある時などは母が近所の人から木の芽を一斗枡に山盛り入れたのを買っていました。あまりの大量にびっくりしたことを思い出します。小鳥や動物などいろいろな自然が豊かでした。

小学校は半里の道を二、三人連れと雨にも風にも雪にもめげず通いました。山脇校長先生は熱心に私たちを導いてくださいました。

心をだに誠の道にかないなば 祈らずとも神や守らん
毎日の朝礼にはこの歌を全校生徒が合唱いたしました。苦しい時の神頼みと申しますが、私もこの歌を信じ心の糧といえました。

女学校時代は平々凡々に過ごしました。テニスに興じ放課後遅くまで時の経つのを知らず、寄宿舎の夕食の鐘に驚き帰途につきますと、五時過ぎの上り列車が通り過ぎました。

お裁縫がすきだったのが、長い生活のなかで大変役に立ちました。他人の手を借りず自分のできるのがあります。

であり、楽しいことでもありました。

卒業後、間もなく叔父の勤めで朝鮮に参りました。大邸という所で叔父、叔母の慈愛のもとで過ごしていました。奈良の女高師の学生だった姉が帰って来まして楽しく暮らしました。また家族三人で朝早く大邸のお寺へ十日間程お経の講議を聞きにまいったこともありまして。一年程しました折、母が帰るように申しますので、五月のある日叔母と帰途につきました。下関へ入港した時の緑したたる眺め、厳島神社へ詣でた時の何ともいえぬ美しさは、日本を見なおすよすがとなりました。

帰宅後は結婚の話がありまして、翌年の四月に林田の人となりました。人生とは思議なものでございます。それから六十五年の歳月を切り抜け、振り返ること際限なく年を取ってしまいました。

ただ今九十二才の主人と八十六才の私と二人で平和に暮らしております。年をとります程に自然のありがたさ、美しさなどに引かれまして、小さな庭があればこそと、木々の成長、草花の手入れにささやかな喜びを感じております。



若き日の周辺

谷 達雄（柏原町）

小梁山泊りやうざん

柏原の八幡神社の下に西楽寺というお寺がある。浄土宗の格式高い名刹である。この前住職が滝川厳城君。柏原中学の同級生である。中学時代の彼の部屋は本堂と庫裏をつなぐ中間にあって、お寺の境内から庫裏の玄関を通らないで、いきなり何の気兼ねもなく入ることができた。中学四、五年のころ、ここへ柏原に下宿している者、地元の者など数人の悪童が毎晩集まってだべったり、碁を打ったり、駄菓子を食べたりして数時間を過ごしたものである。

先代の住職滝川秀雄師は温厚な度量の広い方であつたので、毎晩の悪童の集まりに一度も小言を言われたことはない。私の母などは「西楽寺さんではよっぽどよいことがあるらしいな」と毎晩の私の「出勤」にあきれていた。

当時の中学の規則では、柏原町内に私服で外出するときは袴を着用すべし、という厳しい時代であつたから、多少のスリルを感じながら、滝川君の部屋で自由を満喫したものである。少しオーバーに表現すれば、梁山泊（中国の小説「水滸伝」）

の故事から、豪傑や野心家の集まるところ）氣取りであった。ここで私の生涯で得がたい幾多の親友ができた。しかし悲しいかな、今残っているのは滝川君と私だけである。

この小梁山泊の延長だが、柏原の八幡神社の裏山に高鉢山というのがある。あまり高くない傾斜の緩やかな松茸が出た山である。また、この山は中国山系特有の花こう岩の砂が真つ白で、松林が両側にあるが、むしろはげ山である。今年一月に、全国の「白砂青松一〇〇選」が選ばれたが、こは海でなく、まさに山の白砂青松である。

柏原高校が真下に見え、秋の抜けるような青空のもと、ここに寝ころぶと、この世に生まれてきてよかったという氣持になる。西楽寺の小梁山泊をこへ移してひとときを楽しくだことも、たびたびあった。こういう自然のなかのおおらかな行楽は、今のヤングには理解が難しいだろう。そのころ八幡神社と高鉢山をうまく結びつけると都会人に喜ばれる行楽地になるといつも思っていた。

出郷

私の父は八十九才でなくなつたが、頑固ではあつたけれども、頭の良い目先の利く人であつた。播州の機屋はたから養子に來た。播州人は、やや固陋ともいえる丹波人と違つて進取の氣性に富んでいて、特に機屋は目から鼻へ抜けるような商売

をしていたから、ここで育つた父には、丹波の平穩無事を旨とする風土は、生涯しょうかい性に合わなかつたらしい。しかし、やがて諦観するようになるが、心底には播州人の氣性が生きていた。

私は長男であるから、長ずるに及んで進路が当然問題になる。私は丹波流に平凡に家業を継ぐものと觀念していた。ところが父の考え方は全く違つていた。山に囲まれた狭い因循な丹波の地に止まることを考えるな、また伝來の家業であっても發展性を欠く小商売を継ぐ必要はない、という意見であつた。これには私もいささか驚いた。私には弟が二人いるが、二人に対しても同じ方針で、家業が父の代で絶えても意に介さないという。この故に私は郷里を離れることになつた。

今、次男が家業を継いでいるが、彼も父の方針で大阪で獨立するはずのところ、戦争で目指す方向が立ちいかなくなり、丹波へ逆戻りしたものである。とかく批判の多い父ではあつたが、今でも私はこの父の明敏さに脱帽している。

旧市街

柏原町も水上町へ直通の新道路ができ、それに伴つて新市街ができ、旧市街の商業が影響を受ける懸念があるようである。こういう問題は全国各地に起こっているようだ。

群馬県は全国一マイカーの多い県だが、その中心の前橋市

は関越自動車道の開通による新市街の形成とマイカー交通の影響で、旧市街の商業が振わなくなり苦慮しているという。また同県某町では車でショッピングする郊外地商業の伸びが五〇％を越え、旧市街が置きざりになる傾向に悩んでいる。

国土開発、マイカーショッピング、顧客の価値感の変化などが絡み合って、地域社会の大きな変化が起こっているのである。この対策は大変難しいと思う。

柏原の八幡神社。この格調高いお宮は、もう少し都会の近くにあれば、大きな観光資源になると思うのだが。そのふもとの古い伝統をもった優雅な柏原の旧市街、ここだけは変化の荒波に耐え、ふるさとの英知を集めて、いつまでも活力を保ってほしいと願わずにはおられない。そこにまた二月の厄神さんのお祭の心ときめく記憶がつながるのである。

思い出のふる里

上山 顕（柏原町）

出身は柏原町大新屋^{おおにや}。もとは新井村大新屋だが、昭和三十年の合併で柏原町となった。明治三十七年八月に生まれ、十四年四月新井小学校に入学。柏原中学校を経て、大正十年

四月京都の三高へ。以後ふる里を離れる。だから、私にとつての思い出のふる里といえは、新井村大新屋である。

新井村は戸数およそ三百戸、郡内で最も小さい方。大新屋は村のほぼ中央に位置し、東南に挙田^{あぐた}、西に鴨野、北に北山、延びる丘陵を切り開いた坂を越えると田路^{たじ}、母坪^{もつば}とあった。大新屋から南方へ坂道を登り峠を下ると石戸^{いしど}で、私たちは「奥山」と呼んでいたが、村の共有林があった。

大新屋は西に戦国時代の落城物語を伝える高見城山がそびえ、高い山に思えたが、四七九米とある。東方は柏原まで水田地帯、農業が主体だが、かつては養蚕も盛んだった。

小学校は大新屋に、役場は北山にあった。小学校に入学そうに求めた学用品に石盤と石筆があるが、どんなものがわかるのは、いつごろまでの人だろうか。小学校が現在の位置に、直ぐ北にあった旧敷地から移転改築されたのは入学翌年の明治四十五年三月で、講堂や雨天体操場もあるし、運動場がずいぶん広くなったと感じたことを記憶している。複式授業なるものを経験、他の学年でもあったようだが、そのときは教室は別々だったような気がする。五、六年のときは、同じ教室の左半分に五年生、右半分に六年生、間仕切りはなかった。先生が一方を授業中は、他方は自習する。おまけに、その先生はお芝居のまねが好きで、国語の時間など大きく声を張りあげて熱演された。

正月の遊びではまず風揚げ。奴風をよく買ったが、器用なものは自分で四角なものなど拵えており、私も拵えたことがある。長いしっぽをつけ、村はずれの何も妨げるものがないところへ出て、思い切り高く飛ばしていた。独楽もよく回した。正月に限らないが、竹馬も、めいめいに自分で拵え、ずいぶん高いに乗った。

春が来ると、向かい側の山のごしが、いち早くその到来を告げたが、裏山にも大きな山桜があり、どちらも、ずいぶん遠方からも眺められた。裏作には麦を作り、穂の出るころ、ひばりのさえずりがよく聞かれた。蛸もたくさんいて、一晩でいくらでもとれた。七夕祭の短冊に「七夕天の川」など書く硯の水には、里芋の葉の上に玉となつて転ぶ露を、朝のうちに集めることにしていた。

裏の深い井戸は西瓜を冷やすのに使ったが、土用には石生の店からぼたもちをとることもあつて、これもその井戸につるした。三宝寺での盆踊りも大きな年中行事だった。それに鈴虫・くつわ虫を飼育したことを覚えていた。

秋になると霧が深く立ちこめ、晴れるにつれて、峰々の頂だけが島々のように浮かんた。奥山へはよく栗拾いに出かけたが、せせらぎの底に光るたくさんの栗を見つけては歓声をあげた。私とこの何本かの柿の木が、近くの川の向こう岸にあり、その高い木に登って柿をもいだ。木登りといえば、奥

山への路の途中に美しい赤松林があり、赤松の地上四メートルほどのところの枝に寄生木が生えており、その小さな実がかむとねばねばして、ゴムのように伸びた。もちのきと呼んでいたが、牧野植物図鑑を見ると、もちのきは常緑小高木とあり、別のものようだ。ともかく私たちは、赤松に登って採ったもちのきのもちで、やがては小鳥を捕えるのだと夢想していた。もちのきの実は熟すると赤くなり美しかったが、それを採って食べた。

ところで、秋の最大行事は秋祭り、神嘗祭の十月十七日にあり、美しい秋晴れが多かったように思う。大新屋の新井神社には、挙田から田路までの神社から五つの神輿が集まり、大新屋と田路からは太鼓みこし、単に太鼓と呼んでいたが、だんじりの一種だろうか、大きな太鼓を囲んで四人の子供が四方からたたく。金糸で刺しゅうされた幕で美しく飾られていた——その太鼓が加わって巡行する。なかなかの壮観だった。そして晩秋、刈りとられた水田にテントが張られ、旅芝居がやってくる。「忠臣蔵」、「先代萩」、「菅原伝授手習鑑」などがあり、重箱にごちそうを詰めて出かけた。

今はマンション住まいだが、自然児として育ったことは幸せだったと思う。高度成長期のクルマの増えてきたころ、帰省すると、「この空気はうまい」とよく話したが、現在柏原へ向かう道路の北側、かつて湿田続きの一帯は盛り土され

て工業団地と化し、南側芋田のはずれには雇用促進住宅とかが建っている。田園風景としては殺風景でも、引き換えに著

しい過疎化は免れている。積極的によくなった点もたくさんある。ひとつに電燈は柏原では早くつき、小学一年生のころ親戚の家に見に行った記憶があるが、私とこでは高校(旧制)に入って家を離れるまで、卓上のランプで勉強していた。いま電気器具はそろい、クルマのない家は珍しい。また道路が大変よくなった。中学校へは四キロの徒歩通学で、村内ではぬかるみを避けもしたが、柏原の町へ入ると一面のどろんこ、ゴム靴はなく、学校で履き替えなどしなかったから、ぬれたままの靴で我慢した。今はどこでも舗装されている。それから夏には大変だった蠅や蚊がほとんど見られなくなった。まさに驚異的といつてよい。上水道はかなり以前からあり、下水道も計画はあるのだが、早く着工を見たいものだ。

ふだんテレビやクラブの講演会では、「本年の」とか「これから」の「二十一世紀にかけての」など前向きなことばかりが話題だが、今回は求められるままに珍しく、過ぎ去った日々のことどもを語るようになった。

＊

＊

＊

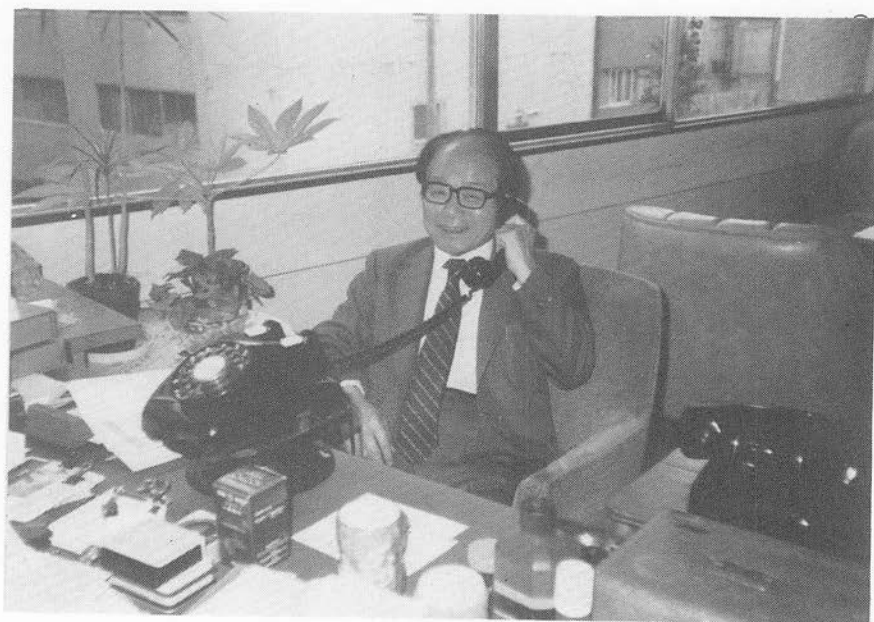
「ツチノコ」を見た

佐々木 盛雄 (春日町)

私の生まれたのは現在の春日町の北端の大路村です。前面には多紀郡との境界線にそびえ立つ三尾山連峰を望み、背後には天合宗中本山の妙高山神池寺の往事の遺跡を残す深山を負う、帯のように細長い村です。

小学校の校歌で「峨峨たる山はそびえ立ち、清き流れは溜溜と、山水秀でて麗しき、この天然の楽園に」と歌った七十年も昔の記憶が今でも浮んできます。その三尾山の頂上には、だれの築城かは知りませんが古い城跡の石垣の崩れた広場があり、そこで日の丸弁当を広げてはお張った遠足の思い出もあります。

神池寺についてはいろいろな思い出があります。そのうちの一つに、山の頂きにある「澄ますの池」があります。この池は名が示すとおり黒く濁っていて底知れぬ不気味な様子を呈していました。和尚さんの話では、昔、その池のほとりに鐘楼があって、小僧さんが鐘をつきに行くとき大蛇が襲ってくるので小僧さんに似せた爆薬を仕掛けておいた。これに引っかけた大蛇は苦しまぎれに池に飛び込んで暴れ回ったので水が濁ってしまった、ということです。「これが、その大蛇のう



佐々木盛雄氏近影

ろこじゃ」といって和尚さんは一文銭ぐらいのうろこらしいものを二、三枚見せてくれました。あのうろこは今もお寺に残っているだろうか。それから、この「澄ますの池」の魚はみんな片目だとも和尚さんはいうのです。それは小僧さんたちが魚を取ってきて焼こうとしているところ見付けた和尚さんが叱ったので魚は池に放された。しかし、片目は焼かれてつぶれているということです。しかし、私がその片目の魚を見たわけではありません。

もうひとつ、今も顔前に浮かんでくるのが神池寺の「二十六夜さん」のお月見祭りのことです。学校へあがる前から母に手を引かれて幾たびか「二十六夜」に登山して一夜を明かしました。近隣の村里はじめ、郡内各地から集まった青年男女の盆踊りが徹夜で行われ、夜店が立ち並んで行き交う人たちでごったがえすありさまでした。その時分にはまだ映画はありません。「のぞき」というものがありました。それは、大きな紙芝居のような画面を凸レンズの穴からのぞき見るものです。のぞき賃は二銭ぐらいだったと思います。むちで見物台をたたきながら男女二人が掛け合いで調子をとって説明するのです。「三府の一の東京で……」ときり出す武男と浪子」の物語りを聞いてよくまねをしたものです。

寺の本堂では、善男善女のおげる御詠歌が鈴の音とともに響いていました。夜が更けて御詠歌もやんだころにどこから

か「お月さんが出た」と知らせると、みんな縁側や外に出てきて「大樹の枝の間から姿を見せ始める月を眺めるのです。すると円い月に並んで二つか、三つかの月が続いて見えてくるのです。元来こんな現象は科学的には簡単に説明がつくものではないが、昔からこの不思議な現象を見るために多くの人が参籠したものでした。あの「二十六夜さん」の行事は今でも続いているのではないだろうか。

もうひとつ、小学生のころの奇怪な思い出を加えておきましょう。それは夏休みに父に連れられて神池寺へお参りした時のことです。山の涼しい風が心地よい蟬時雨の本堂で父と昼寝を楽しみ、夕方、下山の途中「休み場」という大きな平たい石のある曲がり道まで来た時のことです。右手に見える絶壁の草むらの中をガサガサと音をたてて転げ落ちてくるものがありました。岩が崩れ落ちたんだろう、と思っていまして、そのものが突然横走りに駆けだしたのです。それは、「まっかうり」か「かんぴょううり」のような太い丸太のような格好をして、小さなしっぽをつけた奇妙な動物でした。父は、「あれは『ツチノコ』ゆうもんじゃ。この山では時々みる」といいました。その形から、槌の子の意味かと今では思います。最近、四国の山中で「つちのこ」を見た人の話が新聞に出ていたのと思ひ合わせて、あれが幻の動物「ツチノコ」ではなかったか、と思います。

私は冒頭で述べたように明治四十一年に大路村に生れ、小学校から柏原中学校へ通いましたが、郷里の地理についてはほとんど知りませんでした。戦後、代議士選挙で駆け回るようになって、氷上郡内はもとより、丹波、但馬の隅々まで手に取るように知り尽くすに至ったのです。しかし何といってもいちばん私の眼底に焼き付いて消えぬものは、子供のころの懐かしい数々の影像です。今日の世相からみれば私は「いじめ」のがき大将だったのでしょうか。わんぱくで手のつけられない私の頭をゴツンとやってしまった若い先生も既に亡く、元旦の四方拜には、大礼服に身を固めて堂々と参列した海軍将校の勇姿も今や思い出のかなたに消え、往事ばうぼうというほかありません。

解き放された青春

足立 徹（青垣町）

私は芦田村（現青垣町）東芦田に生まれた。祖父も父も、青垣町一帯の耕牛を顧客とする獣医を営むかたわら田畑それぞれ六反程度を作りかつ村内屈指の養蚕家でもあった。記憶に残る祖父は作男を相手に農事に励み、父は自転車を買って病牛を往診するという毎日が続いていた。兄弟は五人で、二

年上の姉と、弟が三人。祖母はわりあい元気だったが、母は結核に冒されて数年間療養の末、大正十二年に死んだ。私は小学五年生、姉は柏原高女一年、末弟はまだ三才の幼児だった。祖母から「お母ちゃんの病気で毎月百円もかかるので、お父さんは今大変なんだよ。」と聞かされたことを覚えている。貨幣価値の変化は分りにくい、当時の百円はかなりの大金である。大ざっぱに言えば、米一升二十銭、地酒一升一円、小学校長の月給が約百円で不景氣風が吹き荒れていたところだった。

祖父は「子供の教育は放任主義に限る」とよく広言していたが、祖父も父も全くの放任主義で、ほとんど命令とか干渉とか、文句がましいことを言わなかった。美しい（その当時美しいことに気づいていないが）自然の中で、のびのびと「兎追いしかの山、小鮎釣りしかの川」が毎日の私たちの生活であった。書物が好きであった私は、早くから新聞小説、立川文庫、姉の教科書など手当たり次第に読んでいたので小学校の成績が良かったのは当然だが、さて、六年生になって氷上郡の最高学府・柏原中学の受験に直面した時は真剣に心配したものだ。かいてもく、程度や標準が分らない。ビリでもよいから引っ掛かりたいというのが切実な願望だった。草深い田舎の全くの純朴な少年だったのだと、今では可れんに思えてはえましい。

さて待望の柏原中学に入学し、私は自転車で通学することとした。それも、父が商売道具の自転車を更新し、私は父が十年も乗り回したお古を頂戴することになったのだ。柏原は芦田村から南方僅か二十キロだが、当時は中学に入ると柏原に下宿したものだ。道路事情が今では想像もできないほど悪かったからである。現在では板の上を滑るように舗装された大道を行くのだが、自転車通学はむしろ快適だろう。当時の道路は全く違う。県道といっても路幅は五メートル程度、路肩は草ぼうぼうだから荷車がすれ違うのがせいっぱいの狭い道だ。しかも舗装は全くされていない。当時の主要運搬機関は馬力（一頭の馬がけん引する鉄車輪の荷車）であってトラックは全くなかった。道に雨が降る、ぬかるむ、馬力の鉄車輪が食い込む、たちまち穴があく、という具合でデコボコのそろばん街道になってしまう。馬力はわが物顔にド真ん中を行く。われわれの自転車はわずかな空き端を走り抜けるのである。通学には距離はわずかだが一時間もかかった。中学からの帰途は北に向かう。冬期には雪混じりの北風が顔を突き刺すのが続き難渋したものである。

中学三年の時、体操と剣道の教師として故河田正敏先生が松江中学から転任してこられた。当時の日本のトップランナーとして有名だった長距離走者津田晴一郎（慶応大学）、短距離走者大沢一郎（早稲田大学）を育てた先生である。眼光

けいけい、気合充実した古武士のような傑出した先生であつた。

五年になる直前、私は先生に命ぜられて陸上競技部のマネージャーになった。河田先生が初めて陸上競技部にマネージャー制を導入され、初代が一年上の小玉要氏で、私は二代目を引き継いだ。陸上競技部の歴史は長いが、部員は競技会と対抗試合の直前にわずかな練習をするにとどまっていた。したがって県の大会でまれに五位か六位に入賞する選手が出るとか、篠山の鳳鳴中学との対抗戦に勝つという程度であった。しかし小玉氏がマネージャーに指名されて組織的な練習をするようになり、その上、河田先生のまな弟子・慶応の津田先生がコーチに來柏するようになってメキメキ力をつけた。特に小寺確郎さん（元日本水産副社長）の抜群の活躍が注目を浴びたが、近隣の鳳鳴中学はもとより、強豪の三田中学、福知山中学等をも圧倒するようになってきた。とはいふものの、私がマネージャーになった当初はまだ、毎日の練習が定着しておらず、私は終業と同時に門衛に飛んで行って、逃げて帰ろうとする部員を捕まえたものである。そうこうするうち、活気に満ちた陸上部を慕って入部希望者が続出し、部員は七十余名、全校生徒の一割にも及んだ。あたかもその夏には、慶応の津田選手のほかに、やはり河田先生のまな弟子・大沢一郎選手が、早稲田大学陸上部の精鋭・織田幹雄（三段

跳び、走り幅跳びなど万能）、矢柴春雄（中距離）、西田升平（棒高跳び）、木村一夫（走り高跳び）等のわが国陸上界のトップスターを率いて來柏した。柏原町はお祭り騒ぎだったのである。この年は柏原中学にも有力選手が輩出した。列挙すると、五年生の長沢収二、前田喜代治、広瀬式雄、故山口完二、奥原胖、故百木末次、四年生の故永井莊七郎、三年生の故土本良信などの諸君であった。特に長沢収二君は短距離、走り幅跳び、三段跳び等が抜群で、県大会では三段跳びの大会記録を更新した。県大会では御影師範の將積選手の超ど級の活躍によって、惜しくも苦杯を喫し、二位に甘んじたが、各地の大会で優勝し、近隣中学との対抗戦はいずれも鎧袖一触、てんで寄せつけなかった。かくて柏中陸上競技部の黄金時代が以後何年も続くことになったのである。

私は陸上部の仕事に熱中し、繁忙を極めていたものの、その間にも弁論部員として、また柔道部の雇われ選手として何回か各地の対抗戦に出場した。そのかたわら、上級学校の受験勉強に努力せねばならなかった。受験勉強の方は、お定まりの如く、居眠りが先に立ってとうてい満足すべき状態ではなかったが、万止むを得ず「易しい基礎知識だけは確実に身に付けること」に努力を傾けた。もうこのころには大分世間も分ってきていたのだが、全く自信のないままで受験した第三高等学校（現在の京大）に合格することができた。幸運と

いうほかはない。お笑い草の一例をご披露すると、この時の英語の試験に「書き取り」があった。白髪の先生（入学して栗原先生と分った）が静かに試験場に來て、英文をゆっくりと読む、それを答案用紙に書きとるのである。「エジソンは現在八十才になるが尚鑒鑠として研究に没頭している云々」という文章なのだが、先生が最初に低い声で「エディソン・イズ・ナウ・エイティ・イヤズ・オールド」と読んだのを私は誤り聴いて「ヒズ・サン・イズ・イズ・ナウ」と書いてしまった。最初の「エディソン」という固有名詞を聴き誤らなければ、後続の文章は考え易い。「エディソン」を「ヒズ・サン

彼の子」と聴き違えたのでは後続は恐らく支離滅裂だ。そんな失敗が分かつていたので、合格通知を手にした時は喜びひとしおであった。しかし、結局この三高入学が長男に生まれた私を、山紫水明のふるさとから引き離してしまうこととなったのである。

ところで、その時、姉は高女を卒業して家に居たが、次弟も三弟も中学に入っており、翌年には末弟も中学である。私は三高に行く。家計が豊かであるはずはない。皆の学資は一体どうなるのだろうか。

父は何も言わない。皆喜んでくれている中ではあるが、平気な顔をしている父を、改めて有難く思ったことであった。さて、誠実で、寛容で、およそ文句を言わず、四十三才で

妻を失った後は再婚もせず、不自由をしのびながら子どもの教育に苦勞を重ねた父は、終戦の年に死んだ。私は当時中国上海在勤で父の死に目にも会えなかった。とうとう孝行らしいこともできなかった。今や、心底父を懐しむ。父のような男になりたいと常々思っているのだが。

思ひ出すといふ

東 田 實（山南町）

私は大阪で生まれ三歳のころに父が他界しましたので東京の叔母の所で育てられました。叔母は明治図書出版の社長夫人で、社長は福知山在出身の人でした。

東京では文海小学校へ通いました。学校の夏休みに福知山へ遊びに行き帰京しました翌日、大正十二年九月一日の関東大震災のため、家も小学校もやけてしまいました。火事の起きる前夕方近くより叔父、叔母と私の三人で、宮城の広場へ避難し、翌日江戸川の親戚の家で世話になりました。

右のような事で私はまた、親戚の生郷村市辺出身の小学校校長の小森作治氏の所に預けられ、小森氏勤務先の武田尾駅より二里ぐらい歩いて西谷小学校へ通うことになりました。西谷村の同級生とはいまだに文通致して居ります。昨年四月

には有馬温泉で小学校卒業以来五十年ぶりにクラス会を開きました。その時の一切を計画実行して下さった親友が、半年後に他界されたとの便りを友人より頂いた時程淋しい思いをしたことはありません。小森校長が転勤で氷上郡上久下村へ移られ、私は上久下小学校勤務の横川実治先生の所へ預けられ、一年近くごいっしょしておりました。先生は柏原町挙田出身の方でした。

大正十五年春、私は柏原中学へ入学し、今度は上久下村上滝の説宗寺に下宿しました。この寺には葛谷俊道、隆正の両先輩がおられ三人一室で勉強したり、別室で一緒に寝たり楽しい生活が続けておりました。中学校に通っている間は、朝五時に起き先輩二人は毎朝お経をあげたり時の鐘をついたりの毎日でした。下滝駅を六時過ぎの汽車に乗り、次の谷川駅では大勢の友人達が乗り込み賑やかに柏原中学校へ通いました。授業の始まるまで毎日一時間以上待っていました。私には中学時代がいちばん思い出深く、また丹波は私のふるさとです。中学卒業の年に東京の叔父叔母の所へ帰り東京薬学専門学校へ入学しました。ところが二年生の夏に肺結核を患い、聖路加病院の先生の紹介で茅ヶ崎の病院に入院したり、熱海の旅館に滞在したりして養生しました。その後は鎌倉扇ヶ谷に藤原家の別荘を建てて頂き数年間静養しておりました。おかげ様ですっかり健康になりました。その後は大阪と京都

で勤め、会社事務の仕事を暮らしの助けにして頑張りました。昭和十八年に京都より東京へ帰り、明治図書へ勤めたり写真製版所に勤務し、最後は木製折箱製造販売の会社に勤めました。その間、目黒不動尊の近くに自宅を新築し、ここに四十年近く住んでいます。

三年前の暮れに心筋こうそくを患いましたので、会社を退職して自宅で静養しておりますが、おかげ様で健康もだんだん回復し毎月検診を受けながら過しています。昨年は小学校や中学校の親友が八名他界され淋しい思いでした。横川先生がお元気なところは毎年一度は上京なされ、そのつど拙宅にお泊りになり、お元気だった有田喜一様に出会いに行かれておりました。先生に丹波のお話を伺うのが何よりの楽しみです。本当に私にとっては丹波がふるさとです。毎年、ふるさととの文通のお相手が少なくなるのが何よりも淋しいことです。

ふるさと遠く四十五年

田 中 芳 子（山南町）

平穏に明けました新しい年も早七日。今日は昔から七日正月といわれて参りました。子供のころ私は毎年一月六日には小さいナイフと手かごを持って七草摘みに行きました。丹波

の野には生き生きとしたなずな（ペンペン草）がたくさんあって、私たちは歌を歌いながら喜々として摘み草を楽しみました。せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞ七草、と歌われておりますが、丹波では主になずなを七草といっておかゆに入れておりました。ゆでた七草をまないたの上に並べ、包丁やおはしやしゃくし等の炊事道具も並べ、「唐土の島と日本の島が橋より向うへ渡らぬさきに、なずな七草すててこてんてん」。このような歌を歌いながらすりこぎで七草をたたいていた丸まげ姿の母の優しい笑顔を思い出すたびに胸が熱くなつて参ります。

ここ八戸地方は津軽のよう^{つがる}に大雪は降らず大変暮しやすい所でございますが、七草摘みなどはとても出来ません。私はせりに、すずな、すずしろを混ぜ、丹波の母がうたっていた歌をうたいながら七草がゆを煮て神様や仏様にお供えて今年一年の家族の健康をお祈りしました。いにしえの人の何と床しき知恵ではございませんか。おもちゃやお正月の御馳走に食べ飽きて胃の疲れた頃に、雪の下でも青々と生きている栄養の高い野菜の入ったおかゆを祝つてその年の無病息災を祈る、このほのぼのとした故事を私は大切に保存したいと思つております。その意味からでございますしうか、一月七日を健康の日ともされていると聞いております。世の中は変わつて参りました。今もあの丹波の野辺に、七草摘む子が果たして

ございましたか。こんな事を考えながら私を慈しみ育てくれた今は亡き両親や、なつかしき故郷の山河、さまざまに思い出が眼前に彷彿として、熱い涙が老いのほおをぬらすのでございます。

思い出はたくさんございますが、心に深く印象づけられているのは私が柏原高等女学校の生徒でありました頃に起きた満州事変と、娘時代に始まった支那事変のことでございます。戦地の兵隊さんに慰問文を書いたり慰問袋を送ったり、また千人針を縫ったりしました。この一針が兵隊さんの命を守る力となりますように祈りを込めて結びました。出征兵士の見送り、勤労奉仕、留守宅慰問、遺骨迎え、村葬等それを毎日の仕事のようによく出かけました。事変は長びき、物資が不足してゆくなかでよく窮乏に耐え、ただただお国のためにと一億国民が同じ目的のために一丸となつて生きたあのころが懐かしく思い出されます。男子はどんどん戦地に送られ、結婚難という言葉が生まれる程大勢の女性が適齢期を過ぎ、私も売れ残り娘の一人となっていました。そのころ陸軍文官として北京在住の私の親戚の小谷御夫妻のお世話で小谷様の戦友の陸軍文官田中との縁談がまとまりまして私は田中のもとに嫁ぎました。不思議な縁とは申せ、顔も知らない者同士がお互いに小谷様の言葉を信じ合つての結婚は、当時としても突拍子もない話であり、清水の舞台から飛び降りるような大

冒険でございました。

戦争中の北京での生活は有り難く幸せな毎日でございました。そのうち大東亜戦争はますます深刻となり、原子爆弾で広島と長崎の大勢の非戦闘員が命を失い、都市は焼け野が原となりました。これが続けば大和民族の滅亡という事態となり、勝つ事のみを信じて陸に海に空に散華された若い命の忠節も空しく、遂に降伏となりました。そして二人の子供を連れた私ども一家は両親の待つこの家に引き揚げて参りました。途中広島を通りましたが、その余りの惨状に胸が痛み、降伏もやむを得なかったと両手を合せ黙とうをささげながら通り過ぎたものでした。

青春のすべてを返上して軍隊に生きた主人は地位も名誉も物もすべてを失い、北京時代も昔の夢として裸の再出発、戦後の混乱の中を真実一路生きて参りました。今は四人の子供も独立し幸せな家庭の人としてかつて私どもが歩いた道をたくましく歩いてくれております。今日、よくどこまで来たりしと、天と地と人の情に深く感謝しております。主人の弟も私の兄も戦死しました。業火に焼かれた広島も長崎も立派に復興し、世界の経済大国として栄える世の中に平和に暮らせて頂いているというのに、帰らぬ命いかんせんといとおしく思っております。

結婚と同時に丹波を離れて暮すこと四十五年、私は一日と

として丹波を忘れた事はございません。何でどうして忘れられましょう。北京時代は海を隔てること幾百里、月を眺めては感傷にひたり、送られてくるたけのこの美味、松たけの香に丹波の四季を恋いました。家の近くを東北本線が通り駅もございます。ああこの線路は遠く丹波路に続く、この列車に乗れば丹波に行けると幾度思ったか分かりません。八戸に出て買物をする私にあなた関西の生まれですわねと言われ、この地に住んで何十年というのに丹波のなまりやアクセントは私の命と一緒に生きているんだなとしみじみと感じるのでございます。このごろは連続テレビ小説「都の風」であの穏やかな京言葉や都の人情に触れて懐かしく楽しく見ております。何の不足もなくもったいないと感謝している老後でございますのに、故郷を思えば何故にこんなに涙が出てくるのでしょうか。故郷、それはまるで母の懐みとこのように大きく優しく私に迫って参ります。故郷は遠きにありて思うもの、兎追うさおいしあの山小鮒釣こふなづりりしあの川、花摘む野辺に日は落ちてみんなで肩を組みながら、こんな歌を幾度も数えきれない程口ずさみ丹波恋しや人懐かしやと胸を熱くしたものでございました。おそろく私は生きている限り歌い続けることでしょう。

懐かしい母の歌った歌を口ずさみつ七草の故事をしのび、なずな摘みし丹波の野辺に思いをはせ、戦いの中にあつた青春の日を思い出しながら幾度か巡り来たった兎の年を迎えた

老婆の感激は、誠に深いものがございます。

ポートピア81の春二人で故郷の親戚回りを致しましてから参っておりますので、今年は暖かくなりましたら主人と丹波の土を踏みみたいと思っております。

私と氷上郡

神 田 敏 博（多可郡八千代町）

私の郷里は多可郡八千代町（旧野間谷村）であり、私と氷上郡とのつながりは昭和十八年四月に柏原中学校に入学したときに始まりました。

入学試験の前日から柏原町の霞月楼旅館に父親に付き添われて、男子二名女子二名で泊り受験しました。自宅から通学出来ないで親元を離れて「寄宿舎」に入った一年生、昔の中学校の寄宿舎は想像以上に辛いものでしたが、五年生に兄がいましたので少しは良かったと思います。一人ぼっちの私にとって自宅から通っている級友を羨ましく思いながらも、黒板消しを投げたり、インクをかけあったりいたずらして遊び回るのが楽しいひとときでした。

二年生になり兄も卒業したのでいじめられてはと思ったのか、山南町谷川に下宿することになりました。太平洋戦

争も日ごとに激しくなり「薪作り」と「勤労奉仕」の毎日が続きました。朝暗いうちからのこぎりとなたを自転車に積んで奥野々坂近くの山に入り、薪二十束のノルマを達成して帰宅するのが日課であり、とても勉強する気にはなれませんでした。このころ山南町和田山の叔母宅に移り、梅田重二君と谷川まで自転車で道草をしながら通ったこともありましたが「旋盤工」として動員され、剣道場で鉄棒を切断したり、級友や女子挺身隊の皆さんと軍歌や戦時歌謡を熱唱しておりました。当時は柏原町北町の出征兵士の留守宅に下宿していましたが、食糧事情が悪く芋ずるとスイトンを食べ、休日には新井村から沼貫、和田を通過して小野尻坂の暗いトンネルの中を自転車をこぎながら親もとによく帰ったものでした。八月、終戦となり、荒れ果てた校舎と芋畑の校庭のなかでぼう然としながら、やっと勉強が始まりました。

四年生となり、柏原町新町の鶴田宏君の近くに下宿を変わり、薄っぺらの教科書を開きながら物資不足の時代に受験勉強に励みました。芋畑の校庭を耕しローラーをかけてテニスコートに作り変え、常岡幹彦君、久保知義君たちと庭球班をつくりテニスに明け暮れたのも思い出の一つです。

柏原中学校は私達五年生が最後となり、多くの級友が高校に進学しないで卒業していきました。新制高校の発足に際し

て父兄と生徒会が講堂に集まって、「共学になればどうなるのか」など激論したり、柏原高女の生徒会と会議したり多事多端のなかで、氷上郷友会賞をはからずも卒業式で貰ったりして、うれしく楽しい一年でした。

男子二組女子一組が柏原高校三年に編入され、正面本館二階で、三教室の真ん中が女子の別学となりました。今では何でもない男女共学ですが、当時は何か事あるごとに職員室に呼び出されて、生徒会長だった私も小田富士夫君たちと、色色な苦労がありました。演劇研究班をつくったり、高校昇格、創立五十周年記念行事に柏原劇場で、「人生劇場」「ジャンバルジャン」に出演したり、執行委員長として綴帳の前で諸先輩や皆さんにあいさつしたことなど、今では懐かしい語り草となりました。

長々とつまらぬ事ばかり書きましたが、これも私の青春のひとつであり、柏原、いや氷上郡で、よく学びよく遊んだ思い出は文章に書き尽くすことはできないと思います。この六年間に孤独であった私に、温かい人情味をもって育ててくださった諸先輩、級友など、氷上郡の方々によって、私の今日があるのだと感謝の気持ちでいっぱいです。京都の大学生活、会社に入って博多、長崎、神戸、西宮、姫路、大阪、鹿児島、東京と転々と致しましたが、その度に柏原を懐かしく思い出しては頑張っ て参りました。私が小学校まで育った野間谷村

も、昭和二十七年ごろにある婦人雑誌に「イノシシの出る文化村」と紹介された、のどかな良い所ですが、氷上郡こそ私の第二の故郷としてこれからも仲間入りさせて戴きたいと考えています。

昭和五十八年八月に柏原町の三友楼にて同級会があり、久しぶりに柏原の地を訪れました。三十五年振りに会った級友と肩をたたきあい、昔の木造校舎が鉄筋に変貌した母校に目を輝かせ、八幡山を眺め、なつかしい土を踏みしめつつ、氷上郡の良さを十分に味わって来ました。

また、昨年から柏原中学、柏原高女、柏原高校の昭和二十三・四年卒業生で、「ふみよ（二三四）会」を結成し、懇親を深め将来の夢を語り合う会合を、田中篤郎君、池上亘泰君、水船隆昌君や先に名前の出た諸君（男女二十七名）と楽しくにぎやかに回を重ねております。

これからも、氷上郷友会、柏陵同窓会に出席し、昔の思い出を丹波弁で語り、氷上郡の近況を聞くのを楽しみにしており、皆様も、郷土とともに発展されんことをお祈致します。



わが青春に悔いなし

上村愛子（柏原町）

神戸で生まれ、大阪で育った私にとって、丹波は、夏休み
に帰って、祖母たちの愛情の中で昔の手細工ごとや手遊びご
とを習ったり、山や川、野原で存分に遊べるところだったの
です。それが、戦争が激しくなって柏原へ疎開し、高女から
高校へ進み、卒業するに及んで、丹波はまさしく我がふるさ
ととなりました。おかげ様でこの郷友会にも入れていただい
て、ふるさとと心通わすやすがとしておりますが、今回は拙
文を書かねばならない羽目になり、はしなくも我が青春を振
り返ることになりました。

疎開してみると、ほとんど授業はなく、毎日山へ行って木
を切り、枝を落として薪を作っていました。山へ行く時は皆
で声をそろえて勇ましい歌を歌いながら、帰りは長い丸太を
やっとの思いで綿入れの肩当ての上にかつき上げ平衡をとっ
て歩いていると、土地っ子さんたちに小指でつつかれ、「こ
んなの一本持つて、ふーらふら」とはやしたてられました。
のこぎりは食いこんで動かなくなるし、縄はなえないし、刈
り上げの髪でも結べと言われるし、情ない思いをしましたが、

班長さんたちにはきつとお邪魔虫だったことでしょう。

昨秋、庭のヒマラヤ杉が茂り、日当りが悪くなったので枝
を落としたのですが、ご近所の方々からのこぎりの扱いが上
手だと感心されました。何といっても、年季が入っているの
ですもの。

稲刈りの奉仕の時も鎌がなかなかすばつと切れなくて「の
こぎりで切っているの？」といわれたこともありました。つ
け。そのかわり雨が降って授業の時は、大阪で既に習って来たこ
とが多くて、名誉ばん回できました。特に楽譜は小学校五年
生からBK（NHK大阪）の児童合唱団で歌っていてすぐ読
めましたので、皆にうらやましがられました。戦後、英語教
育が始まった時も、大阪の女学校で戦争中発音記号をマス
ターさせられていましたので、大いに助かりました。女学校三
年か四年の運動会で八十メートル十秒フラットの記録を出し
てからは、陸上競技に熱中し、百メートル、リレー、走り幅
跳び、走り高跳びの選手として、篠山、三田、神戸へ出かけ
て活躍したものでした。

本当の発育不全のような小さなやせっぱちでしたが、新聞
にはかもしか嬢と書かれ、写真や記録がよく掲載されました。
ちなみに、当時の私の記録は現在とは比べ物にはなりませ
んが、百メートル十三秒八、走り幅跳び四メートル八三、走
り高跳び一メートル三十でありました。八十メートル十秒フ
ラットの記録は女学校の雨天体操場の入口に長く掲げられて

いて、子供にも見せたことがありました。

高校ではいろいろのクラブがあったので、興味のあるクラブに次々と入って毎日クラブ活動のかけもちをしました。ソフトボール、陸上、卓球、絵画、コーラス（女声、混声）、日本刺しゅう、料理等です。校庭の隅の運動具小屋では、ブラスパンドの練習をして、リーダー（大前成之さん）の編曲したタブー、家路、チゴイネルワイゼン等をもって篠山や三田の高校へ交歓に行ったこともあります。

家が学校のすぐ近くだったので、男女を問わずよく皆が遊びに来て、ダンスをしたり、トランプをしたり、ラジオを聞いたり、連れ立って古池へ写生に行ったり、古池で泳いだこともありました。ソフトボールの練習は、野球部の人がコーチで、よくしごかれたものでした。

三十五年もたっているのに、彼も同窓会で出会えば「練習に遅れて来たから、愛ちゃんのしりたたいてやった」と懐かしそうに話してくれます。日曜日は大低ソフトボールや陸上競技の対外試合で出かけていましたので、クリスチャンの父には礼拝に出ないと叱られてばかりでした。

もっと青春を楽しみたいと思っていましたが、結婚してから一緒に楽しめば良いというので、二十歳の一月に結婚しましたがその十月には長男が生まれ、私の青春は早々に打ち切りになりました。

同級生は大学へいったりおけい古事したりして青春をおう歌しているというのに、長女も続いて生まれ、三十年の秋には上村の転勤で帯広へ、地の果へ行くような覚悟でふるさとをあとにしました。

私の二十歳の青春を吸収した長男は、助手時代も入れて芸大に十年居たのちイタリアへ国費留学し、昨年末五年ぶりに帰国して一月から群馬県立近代美術館へ勤務しています。

親のエスコートも上手になって、優しい言葉もかけてくれます。

遠い青春の日々を振り返って、今、つくづく我が青春に悔いなしの思いがいたします。

“ 暗い谷間 ” の時代と故郷

坂 本 重 雄（柏原町）

故郷や昔の思い出はそれを美化してえがくのが通常の人間の習性であり、私の場合も決して例外ではない。丹波柏原の地で崇廣小学校二年生から柏原高校卒業の時期までを過ごし、丹波を自分の郷里と思いこんでいる私にとって、その地は生活の原点であり心のよりどころにはかならず、折りにふれて子供たちや親しい知人にその思い出を無意識に美化して語る

ことが近年多くなっている。しかし自ら生活を送った当時の丹波柏原の地が自然と人情を含めて素晴らしい環境であったかという点、当時の家庭生活や学校、地域の状況と連動させながら、疑問に思うことも少なくない。

山に囲まれた丹波の冬は底冷えがして寒かった。当時の木造家屋では室内と外気の温度差は少なかった。柏原に移住した翌年の昭和十六年十二月八日の寒い朝、太平洋戦争が始まり、戦時体制が強まるなかで、食糧や燃料も不足するようになっていった。小学校でも軍隊式の規律がもちこまれ、先生がゲートルと帽子を着け、生徒の勤労奉仕の監督官のような存在となり、小学五年の後半からは雨の日だけが勉強であるは薪取り、畠作り、炭焼き、運搬にかり出されていた。

京阪神地区からの疎開児童がふえ、都会っ子の友人が田舎の悪口や不満を並べた。生活の利便の少なさや衛生状態の悪さ、私生活への干渉やうわさ話の多いこと、習慣や付き合ひの強制などへの批判は私にも半ば理解できた。とくに食糧のヤミ価購入をめぐる農家への不満は強かった。先生や上級生による生徒へのビンタもひどく、勤労奉仕作業への従事に消極的な非農家児童、疎開児童が辛い思いをする事例が多かった。私自身もビンタをくらったが、個人責任を理由とするものでなく、「みんなタルんでるので活を入れる」というようなお仕置きが多く、台風通過をまつ気持でがまんし

ていた。

昭和二十年一月一日、小学六年生の私は元旦の新年祝賀会の席上、校長から「正月はなぜおめでたいか」と質問された。当日は子供とはいえ新聞で戦況などよく読み、先生の質問に対応すべく努力したが、このとき私は答えられなかった。何人かさらに質問を受け、答えが出ないまま、校長は解答を含め訓示を長時間述べられた。天皇はじめ皇族が元気で正月を迎えられたこと、沖繩に上陸したアメリカ軍は日本の瀬戸際作戦（日本本土に敵をよせつけて一挙に全滅させる）にまんまとのせられ本土進攻中で今年は本土決戦の勝利の年と訓示された。連日、アメリカ空軍機の日本本土爆撃を受けながら、「神州不滅」、「撃ちてしまむ」という言葉が繰り返されていた。修学旅行や小学生らしき行事も少なく、卒業式にも「蛍の光」の斉唱を禁じられ（敵国イギリスの作曲）、半紙四つ切の卒業証書を授与された。

四月に県立柏原中学（旧制）に入学したが、軍事教練や勤労奉仕の比重が高く、一部の先生や先輩の説教やビンタがこわくて新入生たちは中学校生活になじめなかった。しかし、小学校時代と同様に同級生同志は仲良しでいろいろ情報や図書を交換して助け合った。二十年八月十五日、終戦を知り、事態をよく理解できないまま、なんだかホッとした気持ちになった。中学校裏手の遊泳禁止の古池に向かい、水面におおむ

けに身体を浮かべて孤独を楽しんでいた。

終戦後の民主化時代の中学・高校生活の素晴らしさへの回想、恩師や友人との出会いの思い出は数多く、「山ざる」誌上に発表される会員の寄稿にも同様の回想がみられる。中学から柏原高校にかけて六年間の民主教育を受けた時期の思い出は尽きない。終戦直後の生徒の期末試験をめぐるスト、二・一ストの先生方の対応、生徒会を中心とする文化祭や体育祭、スポーツと映画、男女共学など各々が回想記のテーマになる。人間形成に決定的な影響をもたらす青春時代の自然環境の活用と人間関係の構築と展開が走馬燈のように浮かんでくる。人生五十台の半ばに達しての老化現象と笑われるかも知れないが、近年に限らず、新聞や専門雑誌には、「わが青春」、「回想記」などの欄が設けられ、私などもこの種の文章を書く機会が少なくない。中学・高校時代の回想は、その直前の「暗い谷間」時代との対比で輝きを増し、さらに物質的豊かさの反面、心の貧しさが憂慮される近年の世相との対比でさらに輝きが倍加するのかもしれない。

一九八七（昭和六十二）年の新春を迎え、「山ざる」誌の原稿を書きながら、故郷の丹波柏原の地で享受できた青春時代を回顧し感謝の念を新たにしている。物質的貧困の厳しさの反面、自由と平和という精神的喜びに満ちあふれ、読書とスポーツの習慣は今日に至るまで貴重な財産となっている。

桜の咲くふるさと

岡 本 庄太郎（氷上町）

私は昭和九年十二月十日、氷上町の岡本憲太郎とすまの長男として生まれました。昭和二十八年三月、柏原高校を卒業し、同年四月、大学進学のため上京し、東京の葛飾区白鳥で十年余り住んでおりました。昭和三十七年夏キリスト教会を開拓するため、群馬県高崎市に移住し、今日まで、インマヌエルキリスト教会の牧師をしております。

丹波で十八年間過した時の思い出を一つ一つ書くことができたなら本当に幸いと思いますが、今日はそのうちの幾つかを記します。

私は丹波に生まれ育ったことを心から感謝しています。しかし、同時にその御恩に少しも報いることができないので本当に申しわけなく思っております。鮭は生まれた川へ必ず帰って来るようですが、私ももう一度佐治川をさかのぼり、郷里の皆さんに御恩返しのためごともしたい、キリストの福音を伝えたいと切に願っております。

丹波の自然や環境のすばらしいことはもちろんそこに住む人々の人情のこまやかなことは筆舌に尽くし難いと思います。自然のめぐみはもとより、家族を始め、近所の人、学校の先

生方や友人たちのおかげで今日の私があることを決して忘れることはできません。私は小学校（国民学校）に入学する前は大変わんぱくでまわりの人に迷惑をかけたり、自分もよくけがをしてなまきずが絶えませんでした。しかし、小学校にいくようになってからは人が変わったようにおとなしくなったといわれましたが、そう簡単に人間が変わるわけではなく、結構いたずらもしていました。小学生のころは戦争の最中で、学校の校庭を掘りおこしてさつまいもを栽培して食事の足しにするような食糧不足の時代で、さつまいもの植えてある間をみんなで列を作り行軍の練習をするというありさまでした。

小学三年のある日、自習の時間に早退した友人のカバンを他の教室にとりに行って先生に見つかり、騒いでいた他の友人と一緒に廊下に立たされ、びんたをくらい目から火の出る思いをしました。その時の先生の顔や情景を今もありありと思い出します。放課後近所の友達と遊びに夢中になり、帰宅時間を大幅に過ぎ、家に帰ってみると皆が心配していた。父からいきなりびんたを一つもらった。先の先生や父のびんたは私を多少変えてくれたと思っています。体罰の是非をうんぬんする今の世の中では、想像もできないような時代だったなァ、と思います。

昭和二十年八月十五日、日本が戦争に敗れました。それまで張りつめていた糸が、プツン、と切れたようでした。これ

からの日本はどうなるのだろう。泣き悲しむ大人たち。私も子供ながら大きなショックを受けました。よくわからないが、大変なことになるかもしれないという恐れが一瞬脳裡をかすめた。その後世の中は大きく変わりました。学校は六三三制になり、全員が新制中学校に行くようになりました。新しい木造の二階建ての校舎も完成し、男女共学ということ、学校の雰囲気も随分変わりました。そのころ、男女同権、文化国家、自由、民主主義、新日本等々の言葉がよく使われていました。建築資材として山林を乱伐したため台風が来るとよく洪水になったものです。せっかく実った稲穂が泥をかぶって倒れたこともありました。経済界の混乱は大変なものでした。インフレを抑制するためにアメリカからドッジ公使が来日し経済九原則、デフレ政策とかで、不況の嵐が吹き荒れました。

中学校を卒業し、柏原高校に進み、部活（ESS）の友人に誘われて学校の近くにある教会（日本伝導隊柏原伝導所）に行くようになりました。教会では毎週木曜日の午後、英国から来日した婦人宣教師が英語のバイブルクラスを開いていました。私は英語の勉強になるので友人たちとそのバイブルクラスに出席するようになりました。実はこのことが私の人生を大きく変えてしまったのです。教会に行くようになってから三年目、昭和二十七年十月十二日、私はキリストを信じ

てクリスチャンになりました。次の年の四月九日に洗礼を受けました。前の日に高等学校の東の山すそを流れている小さな水路に、人が一人入れるくらいの穴を掘って、その水の中心にどっぷりと浸されて洗礼を受けました。その時の感激は今も私の心の中にあります。洗礼を受けた次の日、私は父とともに明治大学の入学式に出席するため上京しました。大阪から特急つばめ号に乗り、車窓から桜の花を見ながら、私の青春をばぐくんでくれたふるさとをあとにしました。

ある朝の思い出

山内隆行（市島町）

あれは確か寒さの厳しい昭和三十四年二月十七日の、まだ明けやらぬ暗い朝、私は自転車をこいで市島駅に向かっていった。二十年間を過ごした市島を離れ、未知の都、東京で苦学するためであった。それは柏原高校の恩師、大槻隆先生の「苦学するには親元を離れた東京に限る。そのような人の集まりが東京の生活である」との言葉が、かねて日本の首都、文化の中心として、あこがれていた東京へ出る決意を固めさせた。自転車のペダルを踏みながら、これからの東京での生活の不安よりもいつ帰れるかわからないこの市島を離れる郷愁を妙

に強く感じていた。

がき大将になって山を駆け巡ったこと、上級生の強要で、小学校で飼っていた豚を職員室へ追い込んで先生にしかられた事が次々に思い出された。私は近所の人にとってあまりいい子ではなかった。そればかりか、私を決定的に悪い子と印象づける出来事が起きてしまった。近所に住む下級生が窃盗事件を起こし、それを私の命令でやったといっただけで、担任の先生や校長先生にこっぴどくしかられた。事実は、命令などしていないが上級生であり、その下級生をつれてよくいたずらして遊んでいたのも何もない訳がなかったのである。丹波新聞に「悪に進む子供達」という見出しでA君B君と載せられたのには全くまいってしまった。親にもすまない事をしたと後悔した。特に母親は気の優しい人であるため、実に申し訳ない事をしてしまったと悔やんだ。

この事件以来、私はいたずらするのはもう止めようと強く心に誓った。自分の言葉、行動を他人はどう思うかをよく考えて行動しようと誓った。この事件が直接でないと、私は高校進学を断念した。勉強嫌いではあったが、いつか父が田圃で麦踏みをしたがら、「これからの百姓は勉強して少ない土地でより多く収穫するようにせねばならない」といった言葉が耳に残っていたのでひそかに高校進学を考えていた。だがこんな事件を起こしてしまっただけでは高校進学どころではな

い。親の期待を裏切ってしまったのである。

中学卒業後、氷上町成松のT電機株式会社に全寮制の養成工として就職した。養成工は技術の実習を受けるほか一般教養も教えてもらうことができ、張りのある毎日を通していった。しかしなんといってもお金を自分で稼いで自分の思うように使えることが楽しかった。当時映画が好きで暇さえあれば三本立て映画を見に行った。見た映画をノートにつけていたら中学卒業後二年間で三百本を越えていたのには驚いた。それもちゃんばらと忍術、西部劇ばかりであった。一方、中学同級生は約四割の人が柏原高校その他の高校に進学していた。自分の生活と比較して高校で勉強に励んでいる同級生を見るにつけ、取り残されて行くような焦燥感を持つようになった。養成工として同時入社した同僚と語らい三人で三年遅れで柏原高校成松分校定時制に入学した。三人はいいライバルで勉学に励んだ。夜遅くまで試験勉強もした。勉強の楽しさを本当に味わったような気がした。一方、当時は労働組合運動が盛んで、私も青年婦人部の役員に選ばれ、組合運動、社会運動に参画して社会性に目覚めていった。定時制高校は全日制高校と差別されており、一般の会社はもとより大きな会社になればなるほど、定時制高校卒業生を高卒として扱っていないかった。私は定時制高校で弁論部に籍を置いていたので、機会をとらえて差別撤廃を訴えた。しかしそれもむなし

いこだまとなって自分に跳ね返ってきた。これが自分の大学進学を決心させる原因となった。その後T電機の先輩で定時制高校から神戸大学に合格した人が出て、ますます進学の意志を固めていった。

そして今、念願の大学に合格して上京しようとしている。まだ高校の卒業式が終っていない。私の上京に父親は何もいわなかったが、おそらく反対であったろう。当時長男が親元を離れることは一般常識にはなかった。今朝も家を出る時寝ている父に「行ってくるよ」と声をかけたが、布団の中から「おゝ」と言っただけだった。

私の財布の中にはT電機の退職金、いくばくかの貯金、弟のくれた一万円など合わせて六万円少々であった。入学金と半期の授業料を払うとあとには一カ月の生活費が残るかどうかの心細さであった。一日でも早くアルバイト先を見つける必要があったので早めに上京したのである。アルバイト先などが見知らぬ東京で見つかるものではないが、幸いに恩師大槻先生の恩師額田亘先生宛の紹介状とアルバイトについても手助けくださるよう依頼していただいた手紙を持って、それを頼りに上京したのであった。

＊

上京後一カ月が過ぎた頃だった。大槻先生より一通の手紙を頂いた。それに神戸新聞が同封されていた。その新聞には

「柏原定時制高校に学んだ三人トリオ」として勉強に仕事に励んだと先生のお褒めの記事が大きく出ていた。それを読む私には数年前のあの丹波新聞の記事がオーバーラップしていた。

大槻先生が神戸新聞に寄稿して下さったに違いない。こんなにお世話になった先生にもこしばらくごぶさたして誠に申し訳ないことと原稿を書きながらおわびしている。

青春虚実 水船隆昌君のこと

田中篤郎（市島町）

朝霧の淡く流れる校庭での朝礼が終って各学年ごとに、それぞれの教室に引き揚げていった。

私はなぜ仲間から遅れたのか思い出せないが、クラスの連中に追いつくために、近道をすべく、校舎のわきの空地に出た。ふと、前を見ると狭い空地で喧嘩けんかをしているのが目に入った。私が「なにやっとなや」というと喧嘩をやめた。喧嘩していた色白の、丸い顔をしたかわいい少年に見覚えがあった。その少年が水船君だった。

私が水船君を意識した最初の出会いでもある。柏原中学一

年生、昭和十八年秋のことだった。

水船君も私も汽車通学だったので、そんなことがあってからか、次第に親しくなっていた。

昭和二十三年三月旧制柏原中学校を卒業し、その年の四月から発足した新制高校の三年に編入された。

そのころ、山本（チャイナ）先生のもとで水泳部ができ、彼も私もその部員になっていた。六月ごろのことであった。山本先生から、兵庫県庁に出向き、以前に申込んだである水泳用のふんどしを受け取って来るようにいわれ、彼と神戸に出かけた。弁当を持っていなかったから、神戸の元町に出ると県庁行きは後回しにしてヤミ市でいろいろなものを食べあさった。「もう入らんわ」といいあって県庁に出向き、水泳用のふんどしを受け取った。そのふんどしたるや黒地の三角布にひもが通してあるだけのもので、大事なものらしく隠せないようなお粗末なものだった。

彼はそのふんどしをつまみあげて、

「お前、こんなもん締めて、よう泳ぐか、こんなもん締めるんやったら振りチンの方がましや」といって、私の顔を見たが、内心面白がっている表情だった。

彼と一緒にふんどしを受け取りに行った仲だったが、彼と一緒に泳いだ記憶も、ましてや、お粗末なふんどしを締めた記憶もない。

昭和二十四年三月、新制高校第一回の卒業生となった。水船君は四月に大学に進学、私は浪人して家に居た。

その夏のお盆のころに国領で同級会が催された。当時は各地で盛大な盆踊りが流行していた。その夜も、同級会をやっている会場近くで、にぎやかに盆踊りが始まっていた。

どちらが誘ったのか彼と私は、昼間みておいた西瓜畑に入っていた。(国領のみなさん。どうかお許し下さい。)

一個ずつ持つてそつと畑から出ようとしたとたん、見張り番に見つかった。見張り番が棒を振り上げて追いかけて来た。

二人は仰天して西瓜を投げ出し、下駄を手にして必死に逃げた。そして踊りの輪の中に逃げこんだのだが、必死の逃走だったため息切れして踊りどころではなかった。息切れもおさまり、もう大丈夫だろうと、同級生の居る所へ戻って何喰わぬ顔をしていたものの、探しに来ないかと内心びくびくしていた。彼が後で、

「惜しかったなあ。もうちょっとでみんなに食わせてやれたのに」

とささやきながらニヤリとしたのを覚えている。

その後、長い間彼との交流は途絶えていたが、四、五年前から時折酒を飲んだり、ゴルフをしたりして、また交遊が再開している。

彼は現在、動燃の広報部長として、北に南にと精力的に走

り回っている。彼を訪ねると、部長席でテキパキと事務を処理しているが、その顔からは昔の彼は浮んでこない。

しかし、二人きりになって「今度の金曜日、ゴルフどうや」と小声でいう時の表情には何か悪さをするのではないかと探していたころの面影がにじみ出て、見ている方で、思わず噴き出すことがある。三つ子の魂というか、彼が今もって稚氣愛すべきものを忘れずに持ち続けているのが何よりも嬉しい。

子供のころ (2)

足立源治(青垣町)

私は、大正十三年四月に小学校へあがった。「八つ」いきであつた。

そのころ、わが家は、祖父母、父、姉一人、兄二人、第一人、の八人家族で、母は既に亡くなっていた。

叔父が日露戦争で戦死したためであらう。祖父は日露戦史に異常な関心を抱いていた。暇さえあれば、まくらになる程の部厚い本を声高に読んでいた。聞くともなく耳をとられているうちに、アーアーと空読みになるのだった。

「おじいちゃん。どうしたん」

わけは分っている。冷やかしかつ気分である。すると、きもさ

るもの。にやっとして、

「ン？ ちょっときな」

「なんや」

「わはいまだこまで読んだかいのう」

で、暫時、講釈拝聴となる。

「第三軍が、東鶏冠山北砲台を攻めた時のことや。山地中将ゆう人が敵の弾丸で太ももを打ち抜かれたんや」「お前らやったら、痛い、痛い、ゆうて泣きわめくところや。ところが偉い人は言うことも、することも違う。山地さんは、駆け寄る看護卒に向って「これくらい傷にあわててることはない。荒ら塩とかい縄とつてこい」ゆうてナァ、ゴシゴシとこすったんや、そして、△これで消毒でけた。もうべっちゃない△ゆうて、また攻撃をかけて、とうとう、砲台を取ってしもたんや。どうや。お前らあも、これくらい強うなかつたら、えらいもんにはなれへん」

身振り手振りを加えた、見てきたような話は面白かった。

この種の話は繰り返し聞いた。講釈、戦史、芝居などが「ネタモト」になっていると思うが、岩見重太郎の天の橋立でヒヒ退治の話、水戸黄門、助さん格さんの話、安達力原の鬼婆の話、信濃丸の「敵艦見ゆ」の打電の話、等々、学齢前から知っていたように思う。

新聞もよく読んでもらった。「正ちゃんの冒険」「のんき

な父うさん」などは無論であるが、岡本一平の政治漫画の解説までおまけがついた。

まくらが長過ぎた。子供のころを思うとき、いちばん無気味なインパクトとして忘れ得ないものに御大葬がある。昭和二年二月のことである。大正天皇が前年の暮れにおかくれになり、「御諒闇」といい、一年間は歌舞音曲を慎しむことになった。

当時、小学校には、白壁、鉄扉の奉安庫なるものがあり、中には天皇、皇后両陛下の写真が奉納されていた。生徒は登下校の際は、いつも拝礼したものである。

式日には、校長先生が、その恭しい態度と白手袋に異様なものを感じた。その写真は、式場である講堂の正面壇上にしつらえた白いとばりの中に納められていた。

式が始まると、整列する生徒に、式進行の先生が、厳かにしかも静かな声で、「御真影のほろを掲ぐ。一同、礼。」と号令をかける。

オルガンがブー・ブーと単調に鳴り続け、生徒は頭を垂れた姿勢を続ける。この間がかなり長いのである。床を見つめながら講壇上のパフォーマンスをひとめ見たい衝動に駆られた。実際に、頭を挙げて先生にこずかれたくらいのことはあったろう。

オルガンが鳴り止む。「直れ」の号令で元の姿勢に戻る。

壇上のとばりが三角形に開かれて、御真影がほのかにのぞかれる。あの情景は、今ではとても考えられないような荘重な雰囲気を漂わせていた。

その天皇の葬儀である。子供心にも「おおごとだなあ」という思いを強く抱いた。式次第などは思い出せないが、とても寒く、冷たく、暗く、悲しかった。真の暗やみの中に、かがり火が燃え、たいまつをかざした子供達が歌を歌いながら校庭をぐるぐるといつまでも回った。ご大葬の歌詞も、私たちの年輩より上の人しか覚えておられないだろう。思い出すままに書いておこう。

地にひれ伏して天地に あまつち 祈りし誠いれられず
日出ずる国の国民は くにたみ あやめも分かぬ闇をゆく

大葬 おおみはかりの今日の日に 流るる涙はてもなし

如月 きさらぎの空春浅み 寒風いとど身には沁む

と歌って行進したように覚えていたが、ふと気付いたことがある。こんなたいそうな歌を歌いながら歩けない。これは式の際に歌っただけではないのか。

このころ芦田小学校には校歌はなかった。「空にそびゆる大箕山、洋々流れる佐治川」という校歌はもう少し後年のものと思う。行進歌としては、乃木大将を歌ったものであろう

が、

湊川原の五月雨 みなと 四条畷の夕嵐 しやうなわて

枯れ朽ちたれど桶の くすのき 香りは今もにおうなり かお

で始まるが、運動会などでよく歌った長い歌である。この歌で行進したのでは、と今では考えている。足袋、ぞうり着物姿の子供達にはつらい式であった。

翌年三月に京都で天皇即位の式典があった。「ゴタイテン」である。わが校からも上級生のエリートが参列した。

田舎でも祝賀気分があふれ、大人たちは、「ゴタイテン」じゃ、「ゴタイテン」じゃと酒を呑んで騒いでいた。

学校でも式があり、また大嘗祭の歌を歌った。

悠紀主基 ゆきすきの田の新稲 にいねを 御食と捧 ささげてすめ神に
いますすがごとく仕えます 御代の初めの大御言 おおみこと

祝え 祝え いざ祝え

というものであった。かなり難しい言葉の歌を意味もわからずに覚えたものを、今なお歌えるというに至っては、幼時の記憶力のたんげいすべからざるものがあるのに驚くとともにすずめ百まで踊り忘れず、で、幼児の教育の大切なことを思い知るのである。

子供の遊びからそれてしまったが、歌ついでに、少々祝日の歌を書いてみよう。

子供のころのあれこれ思い出すとき、歌といえは式の

歌とはやり歌やざれうたで、小学校唱歌が一向に浮かんでこないのはなぜだろうか。脳中深く沈没して浮き上ってこないのか。まじめに覚えなかったのか。不思議である。現在はおかんなりの唱歌を知っているが、これは、後年、自分の子供達や孫たち相手に習得したものである。だからこれらの歌について丹波の悪童達が連動してこないものである。つまり、私の唱歌には手あかが付いていないし、とても「こけむす」などとはいえない「アプレゲール」なのである。

すぐ浮かぶのは

一月一日

年のはじめのためしとて 終りなき世のためたさを

松竹たてて門ごとに 祝う今日こそたのしけれ

この歌も「松竹どんぶりかえして大騒ぎ」と替えて歌った。

紀元節

雲にそびゆる高千穂の 高根おろしに草木も

なびきふしけん大御代を 仰ぐ今日こそ楽しけれ

この歌も「なびき牛のけつ はったおせ」と替えて歌った。

天長節

今日のよき日は大君の 生れ給ひしよき日なり

今日のよき日はみ光の さしで給ひしよき日なり

明治節

亜細亜の東 日出づる処 聖の君の現れまして

古き天地閉せる霧を 大御光に限なくはらひ
教あまねく道明らけく 治め給える御代尊

(これらの歌はすべて歴史的かなづかいによる)

これらの歌は、今や宮内庁のお倉入りで、一般には忘れられてゆく運命にある。それにしても、わたしにはこれらの歌は回顧のしんとして十分機能している。

私は学校へあがる前から、毎朝、学校近くまで兄について行った。そのころからよく口にした歌で今も時々鼻歌で歌うのがある。この歌詞は当時の状況を最も雄弁に物語っているので披露しよう。

からすはカァカァ鳴いている

すゞめはチュンチュン鳴いている

障子が明るくなって来た 早く起きぬと遅くなる

着物を着替え 帯を締め

ちようずを使いにくましよう

たらいに水をくみ入れて 楊子を使い 口ゆすぎ

顔もていねいによく洗い 手先もていねいによく洗い

きれいになったらおはようと

朝のあいさついたしましう

御飯も静かに食べまして 紙と手拭い忘れずに
持ったら行きましょ学校へ さっさと歩いて遅れずに

この歌のふしは「汽笛一声新橋を」の鉄道唱歌と同じで歌い易いので、毎日のように歌っていた。

当時は、小学校を卒業すると男も女もまるで人買いにさらわれるかのようにして、村を出ていった。主として製糸工場や織物屋で働くためであった。ところがしばらくたつと、多くの人が胸を病み、かつけを患って戻って来た。私も後年、東京に出て同じ道を歩むことになるのであるが、そのころの丹波はい菌に対しては処女地ともいえるような清潔な土地であったに違いない。

近所に毎日縁側でバイオリンをひいているお兄さんがいた。この人からいろいろのはやり歌を教わった。

「枯れすすき」「かごの鳥」「月は無情」「ゴンドラの唄」「ストントン節」など意味不明のまま、文句とメロデーをお経と同様に覚えていた。近くに波ちゃんという女性がいたので、

ナミチャンタラギツチョンチョンデ パイノバイノパイ
パリゴト パナナデ パイノバイノパイ

などは、特によく歌ったものである。

少々怒られても、「ホッチッチ カモテナヤ お前の子やな

し、孫やなし、赤の他人やホッチッチ」なんてはやせば、大方の人がカリカリくるのは当然のこと。まだまだ憎たらしい言葉があった。「いや」というかわりに、「あかべんでんさん」といふながら下まぶたを指でひっぱって赤いところを見せながら舌を出し、その上、くるっとしり向けて「しりかんのんさん」自分のしりをたたいて拒絶するのである。相手はたいてい頭にくる仕掛けではある。

先にふれた「正ちゃんの冒険」のほかに、「ノンキな父さん」「ズク小僧」といった漫画が面白かった。雑誌には、少年クラブ、少年世界、日本少年、譚海^{たみかい}などが子供向きで、譚海だけは小型で二十銭、他はおおむね五十銭であった。筆者には、吉川英治、大佛次郎、佐藤紅緑、山中峯太郎らがいた。

さし絵画家には、谷洗馬、山口将吉郎、高島華宵、伊藤幾久造、構島勝一らがいて、それぞれに少年たちを魅了した。「あま玉杯に花うけて」「紅顔美談」「少年讃歌」「神州天魔境」

「鞍馬天狗」「敵中横断三百里」などいままなお血が騒ぐ思いがする。家には兄が集めたのか、漫画の豆本が数十冊もあった。立川^{たちかわ}文庫は私の歴史の知識の源泉となったもので、これも数十冊あったと思う。立川文庫は全部で二百種出版されている――このほかに、当時、講談社が講談全集を出版した

ので、これも愛読して、わが歴史学はいちだんと進歩を見た。わが家では専ら「よく遊びよく学ぶ」伝統があり、余り勉

強した記憶はないが、どういふわけか、習字だけは筆を持った手の上を父の大きい手が添えられ、新聞紙の上に筆太にグイグイ書かされたものだった。

あそびについて

前号に正月の遊びに少し触れたが、本号では本格的に「子供の遊び」と取り組むつもりのところ、やたらと、まくらやバックミュージックが多すぎた。

遊びの各論は次の機会に譲るとして、私たちの遊びは、石でも車でも木でも何でもよいのです。それらを使ってなにかの価値を見付ける作業が遊びであったのです。少くとも親にねだって買ってもらうのではない。自由の時間さえあれば、それはすなわち遊びであって、世代から世代へ伝えて少しずつ形が変わっていても、石や木を使っている限り、縄文・弥生の昔から共通するものがあるに違いない。

都会で生れ育った人は、故郷がない、と嘆きます。ないのではなくて、中味が薄いのでしょう。都会で魚とりといえば、海へ釣りに行くくらいが主なものでしょう。私たちの魚とりといえば、釣りはもちろんのこと、もんどり、つけ針、夜ぶり、かいどり、などなどあり、お宮さんの縁の下「ありじごく」を人さし指でつつきながら「くぼくぼさん、お茶がた

けたで、出てきとくんなあれ」とやったり、ばったの両足を持って、「おきく、はたおれ 一反織ったらやーすめ」とやったり、蛙のしりから麦わらで空気を吹き込む、といった遊びは、田舎ならこそのものでしょう。

竹があれば、弓を作り、トンボを飛ばし、はじき鉄砲、水鉄砲、杉鉄砲、竹馬などをかまと肥後守（ナイフ）で作った。山や川で、草木・石で遊んだ昔を思い出して、次の機会に書いてみたい。

足立遠政公の墓（青垣町山垣）



故郷丹波の国讃歌

莊しやう 正衛

(柏原町)

氷上の「足立」姓について

足立順治(氷上町)

満山紅葉してくれないもゆ
煙霧映える湖みづうみの
丹あかき波ともまごうらん
丹波の国は生まれたり
神秘の国たんば
山峽に洩れ陽あびて
狭霧しずかに流れゆき
音もなくきてゆく
幽境の大地静寂の国たんば
早緑さうどりにおう山影の
紺碧映ゆる大空に
大鳥一羽弧をえがく
悠久の天地そのままに
太古の国たんば
人の情は暖かく
その生業は純朴に
自然の恵みも豊かにて
平和を希う人々よ
美しの国たんば

私は明治三十五年二月、氷上町幸世井中の奥地で生まれ、大正八年三月、篠山の鳳鳴義塾を卒業、大正九年に上京して早稲田に住んでいました。その後、日本橋辺で会社勤務や自営業に携わってきました。現在は藤沢に隠居しています。

「山ざる」は目を輝かせて楽しく読んでいます。先号では「幸世のルーツ」について答えを頂いて、故郷の在りし日のこと、氷ノ川の恵みを受けて山峽に田畑を開いて、生き生きと暮した里人たちの遠い遠い昔の生活の姿をしみじみと思いたどるのであります。

「山ざる」十七号に掲載された名簿にふと心のうちで「これはこれは」と思うものがありました。いちいちお名前を拝見しながら、年格好、仕事の様子、家族のことなどいろいろ想像し、ほのぼのとした温かみを感じることでございます。

掲載会員数はなんと、千九百九十五名、安達健一郎さんから渡辺やす子さんまで姓氏の違うもの六百六十二。これらのうち最も多いのが「足立」姓の百二十七人、以下順に、荻野が五十一人、芦田が三十五人、田中が二十八人、山本が二十七人、村上が二十二人……と続いています。わが故郷氷上の

多様な姓の姿にはひとしお驚かされました。さらに、二字の姓の上の字が「大」のものが二十八、以下順に、西の十六、中の十五、高の十四、山の十三と続き、また、二字姓の下が「田」のものが七十六種もみられます。

これらの中には、文人、武人、また歴史上の人物の氏姓が混じっているのは、狭い氷上の地にも多くの人々の種が入って来ているんだなあ……といまさらながら感じるのであります。

そこで、氷上の馬ぐそ足立といわれる「足立」の由来、できれば、第二、第三位ぐらいまでの出自について編集子の方で古文書なり文献なりをお示し願えれば老骨のこたつ守りの「よすが」にともと、欲を出している次第です。

わが奥地に住む足立族の話では、青垣町の山垣に足立遠政公の墓所があり、ばだい寺もあったそうですが、明智光秀の攻略時に焼失した由で、家の隣に住む父と同年の足立甚蔵さんは山垣から養子に來た人であることからなにがしかの縁がありそうです。そのうえ、甚蔵さんの生家には遠政公の系図が伝わっているとのことでした。

昔、源頼朝が石橋山で敗れ、ともに房総に逃れた十三名の武士のうちに、足立重遠の名があり、武蔵七党の中にも足立党の名がみえる。その足立党は、武蔵国足立郡（東京都足立区）辺を領していたという。

頼朝の弟、牛若の待医に足立石馬允や足立藤太の名がある。歴史は移り変わり、源義経は平泉にて討たれるが、その変転のうちで足立の連中はどこへ消えたか。頼朝の鎌倉幕府は北条の手に移り、続いて足利の室町幕府となるが、やがて応仁の乱となり相も変わらぬ殺し合いの世が元和えん武まで止むことはなかった。

丹波路では、園部、八上、亀山、福知山の各城が相争ったが、遂には波多野氏の支配するところとなる。その経緯は、元亀岡高校の竹岡さんの著書「京の秘境丹波路」に詳しい。

その波多野氏配下の武将に七頭七組があり、そのうちに足立光永が足立城に寄っていた、とある。足立党の残党は、この間にも戦いにあきあきして、てい髪して僧となり、また百姓となつてあちらこちらに散っていったのではないのでしょうか。

奥地には今寺千軒といい伝えられる今寺という所があります。私の父は幼時に寺男の肩車に乗せられて田村の今龍寺こんりゅうの寺小屋へ通ったといえます。数多い寺も光秀の丹波攻めではとんどが焼き尽くされ、この今龍寺がわずかに焼け残ったうちの一寺であつたのでしょう。

私の生家の裏山には、直径七十〜九十センチメートルのひのきの大木が数十本も並び立って、樹齡三百年の偉容を誇っていました。そのふもとに先祖代々の墓地があり、珍しいし

きみの大木が生えていて、有毒といわれる花や実をつけていたのを覚えています。

最も古い墓には、天和四年（一六八四年）正月十二日没
供屋禅養禅門①と随定妙順定尼の戒名が刻まれており、その子、与三右衛門（元禄十三年九月九日没）②、以下、長次郎（元禄八年没）③、伍平衛（宝暦二年）④、与三衛門（天保二年没）⑤、勝五郎（明治二年没）⑥、足立德兵衛（昭和三年没）⑦、妻りゅう（大正九年没）―私の祖父母―、新九郎（昭和二十二年没）⑧妻たけ乃（昭和二十六年没）―私の父母―と続く家系でございます。

明治になって、「足立」姓を名のったことになにかいわれがあるのではないかと考えております。

とにかく、私も氷上の馬ぐそ足立の一員でありますので、足立の皆さんと一層の親交を持ちたいと祈念するものであります。

氷上の足立の由来もさっぱりわからないのでありますが、何千年の昔から延々と続いて来た日本国の人間であることは間違いない、いまさら祖先がどうのこうのと勘ぐるのもおかしいような気もいたします。

それにしても、氷上の歴史、氏姓のあり方について「山ざる」の編集子が考えてみようといってくださいるならお願いしたいものと思うのでございます。

「足立」姓のルーツ

足立和巳（青垣町）

遠阪村尋常高等小学校（現青垣町立遠阪小学校）在校當時は、先生を呼ぶ場合、生徒どうして呼び合う場合と同様、名前で「忠治先生」「正巳先生」と呼ぶものと思っていた。当時小学校の同級生は、一学年一クラスの五十三名で、その約半数は足立姓であった。学校全体としても同様で、自然名前を呼び合うこととなったのであろう。現青垣町（旧佐治町・遠阪村・神楽村・芦田村の四ヶ町村合併）町民の二〇％が足立姓といわれ、「丹波の馬ぐそ足立」（昔荷馬車で物を運んだ頃、道路のあちこちに馬ぐそが落ちていたことから、数の多いたとえ）といわれるのも、またむべなるかなである。

それほど多い「足立」姓でありながら、「足立」姓の人でさえ、そのルーツについてよく知らないのが実態ではなからうか。若し知っていたとしても『氷上郡志』に書かれている「武蔵国の足立遠政公が、関東御家人として、鎌倉幕府から佐治郷の地頭職として丹波へ来た」のを知っている人が詳しい方かも知れない。

関東氷上郷友会会員名簿にも、足立姓が多いので、そのルーツについて述べてみたい。

足立左衛門尉遠政公が承元三年（一二〇九年）に、丹波国佐治郷を賜り、現青垣町山垣（旧遠阪村山垣）の萬歳山に山垣城を築き居住したが、それまでの簡略した系譜は次のとおりである。

藤原（中臣）鎌足（六一四年～六六九年）―不比等（鎌足二男、右大臣、贈大政大臣、淡海公）―房前（不比等の二男、参議、藤原北家の祖）―魚名（五男、母は片野朝臣の女、左大臣、河辺大臣）―鸞取（二男、中少甫）―藤嗣（参議）―高房―山陰（民部卿、中納言）―

「有頼（但馬守）」「在衛（如無の養子となる、左大臣、粟如無（大僧都）」

田大臣）―国光（治部卿）―忠輔（中納言）―相任（遠江守）―相繼（上野介、備前守）―相国（上野）―国重

（下野、出羽介）―兼広（小野田三郎）―遠兼（武藏国足立郡領家職本主、足立氏の祖）―遠元（右馬允、地頭職、足立氏初代）―遠光左衛門尉（元春）―遠政又左衛門尉

丹波「足立」姓は關東武藏国が「足立」姓の発祥地で、武藏国の足立については『平治物語』の源氏勢汰の条に、「武藏国には、足立右馬允遠元うんぬん」と記され、『東鑑』の治承四年（一一七八年）十月二日の条に「武衛（頼朝）、大井隅田両河を渡り精兵三万余騎に及び武藏国に赴く。豊島権守清元、葛西三郎清重等、又足立右馬允遠元、兼て命を受く

るに依て御迎となりて参向せり。建久元年（一一九〇年）十二月左衛門尉に任ぜり」とある。

遠元については『東鑑』巻五、六、八、九、十二、十三、十四に、遠元の子足立八郎元春（遠光）については十九、二十一、二十二、二十三、二十四に、足立三郎、足立九郎その他多くの武藏国の足立一族についてその名が載っており、東国武士であつた足立氏の勢いをみることが出来る。

『武藏風土記』の足立郡条には、「桶川宿屋敷跡足立右馬允が居住の蹟のよし今は林となれり。その内に石の祠を建てども文字なければその来由を知りがたし。昔屋敷跡とおぼしき所より武器陶器など掘出せしこともありしという。この右馬允名を遠元といい、丹波志を按ずるに、父は大織冠鎌足十五代の孫遠兼とて当郡の領主職たりしが、遠元の時に至りて地頭職となり、足立を氏とし、武勇を以て右大将頼朝、同頼家二代の師範たりし」と書かれている。

ところで丹波国の足立氏についてであるが、武藏国足立氏の後裔が丹波国へ移住したことは『武藏風土記』でも明らかであるが、『丹波志』によれば「遠元の子遠光といい、その子遠政、左衛門尉といえり。勲功の賞によりて丹波国氷上郡佐治郷を賜い、山垣村に移り、子孫今彼地に残れり」とある。

さらに、同郡にあつた小和田城は、足立遠政公の二男左衛門尉遠信、左近大夫の居城であり、同じく三原城には足立広

成、政成が居し、稲土城は足立修理大夫政家が居していた。その他『丹波志』に出てくる丹波国の足立氏は、山垣城主長男の足立四郎左衛門基依。丹後守基家、遠政公の二男左衛門助之丞政忠、左右衛門（弓術の達人）彦助政秀、又三郎等の他何人かの足立姓が上っている。

このように鎌倉時代初期の頃に、東国武士であった足立左衛門尉遠政公が、丹波国佐治郷山垣村萬歳山の山垣城に移住して、百二十年ほどは比較的平穩で、平時は城を出て農耕した武士の姿があったかと思われる。鎌倉末期の頃からは争乱に巻き込まれ、戦火を経ながら天正七年（一五七九年）足立左衛門尉彦助政基が明智光秀に滅ぼされ落城するまでの三十七年間、郷里、青垣町萬歳山には山垣城がそびえていたのである。

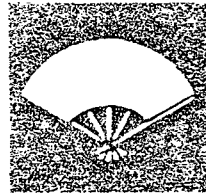
青垣町山垣の萬歳山の麓には、足立遠政公の墓があり、地元の足立の流れをくむ人の手で守られている。

現在丹波で足立姓を名のる人は、足立政基が滅ぼされたため、直系の人はなく残った分家の流れの人と、明治初期に子方や小作の人たちが名字を貰ったり、または勝手につけたようであり、足立姓がすべて子孫というのではない。

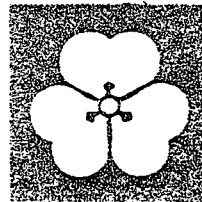
丹波の足立遠政公の流れをくむ足立氏の家紋は扇紋（五本骨開き扇、丸に五本骨開き扇、五本骨白の丸扇、丸に五本骨

骨白の丸扇、丸に五本骨扇に片喰^{かたばく}）か片喰紋（片喰、丸に片喰、丸に剣片喰）であることが記録にある。

扇紋



片喰紋



以上丹波国足立遠政公の流れの足立は、藤原北家魚名流足立といわれる。藤原氏は南・北式・京家の藤原四家といわれ、中臣氏から出た日本第一の大氏族であり、安達姓も藤原北家流のものと、坂上氏流のものがあり、その他に高麗帰化族のものもある。私には丹波の安達姓は元来足立姓と同一ではないかと思える。

私の家の仏壇に納められている過去帖でみると元禄四年（一六九一年）の故人が一番古く、家紋は丸に片喰であるから祖母の言っていたとおり関東武士につながるのかもしれない。極めて不十分な考察であるが、誤り等については読者のご教示に伺いたい。

丹波の風土と文化

岡本 丈夫（柏原町在住）



大陸文化と大和文化の接点

丹波というと、“昔丹波の大江山……”、“丹波篠山、山家の猿が……”などと山奥の印象が強い。山陰と山陽の間にあつて中国山脈の中央分水界が走り、兵庫県の屋根の東端にあるのだから当然といえないことはない。しかしこの印象は、王城のあつた京都からみてのことであろうし、源頼光の酒吞童子退治の物語などにも顕著にみえる。

丹波は、北の日本海側からひらかれた。大陸文化が出雲地方に入り伯耆・但馬を経て丹波に伝わったという証左が、丹後半島の網野銚子山古墳や竹野神明山古墳、竹田川上流にある七日市住居跡などからも明らかである。

丹波は、東部・北部の古成層地帯と、西部・南部の凝灰岩・流紋岩地帯との間の地溝に、土砂が堆積してできたのが多紀・氷上の盆地であるという。そのため日本海へ注ぐ竹田川と瀬戸内海へ入る加古川との中央分水界が、標高わずか九四五メートルの平地にあるわけである。その深く広く堆積し

た平地には、縄文時代から人が住みついて早くから農業も営まれ、その生産力が背景となつて多紀郡篠山町雲部の車塚や、氷上町北野の親王塚などが築かれたと考えられる。また、近年奈良の飛鳥宮跡から発掘された「丹波国氷上郡石里笠取□子万呂一倭納」「氷上郡井原郷上里赤搗米五斗」の木簡は、赤搗米の栽培が早くから成されていたことや、北から流入した文化が加古川をさかのぼつてきた大和文化と丹波を中心に交流し合つたことを如実に物語るものといえよう。

承平年間（九三一―三八）に編纂された『和名類聚鈔』によると、古代、氷上郡は栗作・芋田・石負・船城・春部・美和・竹田・前山・佐治・伊中・賀茂・氷上・石前・葛野・沼貫・井原の一六郷、多紀郡は草上・宗部・真継・河内・神田榛原、日置の七郷があり、山陰道が京都から続いており、かなり早くからひらけた田園地帯であつたといえる。そのため皇室をはじめ中央権門の荘園にもなつた。なかでも最もよく知られているのが、京都東寺の荘園大山荘である。伝承された文化の中にも、京都と深い関係にあるものが多い。たとえば、篠山町日置の波々伯部神社の“きゆり山”は京都祇園祭りの山鉦を思わせるもので、山南町和田狭宮神社にかかわる八ツ子太夫の存在は、京都御所などで演じられた丹波猿楽をしのばせる。

中世になると、多紀郡には波多野・酒井・波々伯部・中沢

氏らが、氷上郡には足立・芦田・久下・荻野らの国人が台頭しはじめた。現在でも、それらの系列に属するものとして、中世武士の苗字を語る人が多いのも注目に価する。江戸時代には多紀郡は、譜代大名篠山藩領となったが、氷上郡は外様大名の織田藩をはじめ多くの領主に分領された。

明治四年、丹波は京都府と豊岡県に分割され、ついで九年、多紀・氷上の両郡は兵庫県に編入された。このことにより、これまで京都への傾斜が強かった両郡が、新興の阪神の産業・文化への影響を色濃く受けるようになったことは否めない。しかし、とくに交通機関の発達のおくれが最大原因となって産業・文化はあまり進展せず、それが尾を引いて今日の過疎状態をもたらしている。

しかし現在の丹波は、国鉄福知山線の電化、近畿自動車道舞鶴線の開通も近く、阪神圏に入るようになると、大きな発展もみられることになる。またこの地方は、丹波杜氏の里ということで灘の大手の酒造会社が進出し、化学工業・電気機械関係の工場も誘致されつつある。いっぽう耕地においては、昭和の大事業ともいうべき構造改善が全面的に展開され水田の近代的な区画整理の完成も真近い。その波のなかで、今、丹波の歴史的風土にはぐくまれたよさを失うことなく、今後の丹波のあり方を住民課題として考える時期であると思う。

以下、丹波国を、篠山川、加古川、竹田川と三本の川を中心にしてひらけた町々をたどって、地理的・歴史的そして文化的な特色にも簡単にふれてみたい。

篠山川のほとり

標高二〇〇メートルの篠山盆地は、東から西に篠山川が流れ、東は京都府境に接している。そこには、京都を往来する山陰道があり、京文化の影響を受けた民俗神事の数々が伝承されている。たとえば、篠山町川原の住吉神社の水無月祭、小野新の熊野神社の八朔祭、宮ノ前の波々伯部神社の祇園祭、畑宮の佐々婆神社の畑まつり、黒岡の春日神社の秋の例祭などがそれである。発生の由緒はそれぞれ異っているものの、山車の渡御という共通点があることなど興味深い。

日本六古窯の一つ立杭焼のふるさと今田町、みごとに丹波茶の栽培風景がみられる丹南町「シャクナゲ・ふるさと構想」を採択し観光農園にも力を入れている西紀町、そして篠山城跡のある篠山町の四町が、この篠山川の流域に位置している。今、これらの四町は、大きく変わりゆく丹波の今後に対処して有機的連携を深め、新しい田園都市づくりをめざしている。

加古川をさかのぼる

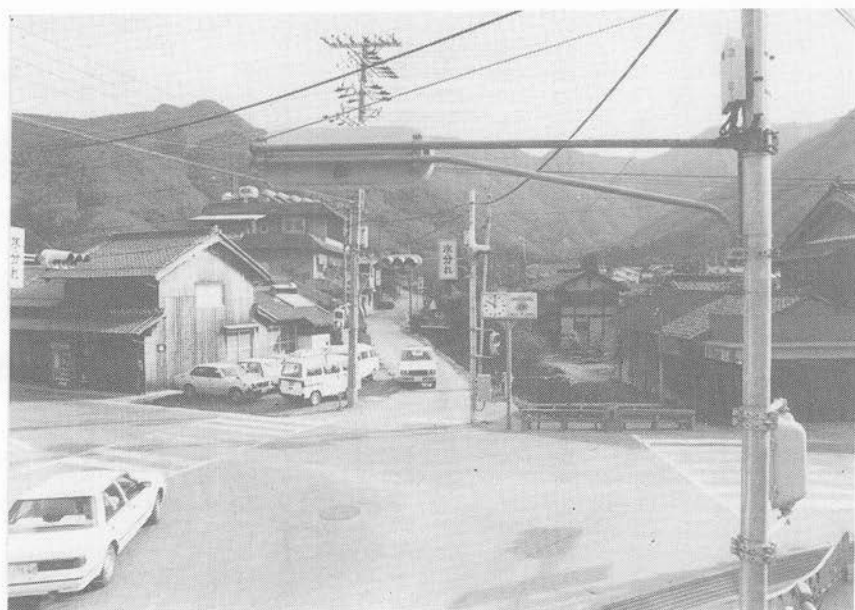
江戸時代、加古川は高瀬舟が往来し、米・炭・塩などを運

んだ物資交流の道であった。その本流と篠山川が合流する地点が、丹波国と播磨国の境界である。

石龜寺・常勝寺・恵日寺などの古刹が軒をならべる山南町には、これらの寺々を結ぶように山陰道が通る。この道を北上すると氷上町達身寺、円通寺、さらに青垣町高源寺へと続く、まさに「名刹の道」である。

このあたりから加古川に沿って氷上平野が広がる。上流に行っても流れはゆるやかで、大昔、ここが湖沼だったといわれるくらい平坦で、今も「沼」「沢野」「沼貫」などの地名も残っている。その加古川に合流するのが柏原川で、この川に沿って郡の産業・文化・教育の中心地柏原町に出る。この町には織田藩の陣屋跡があり、山の緑と調和した美しい町並が続く。この静かな町にも近年工場が進出、大型小売店舗もできて、大きく変貌しようとしている。

加古川の上流の町が青垣町である。この町の中心が『延喜式』に記された山陰道の宿駅佐治である。ここはまさに峠に境いする町で、東芦田という集落から穴裏峠、有口集落から榎峠を越えると京都府福知山市である。但馬との境いは遠坂峠で、大名草から鳥峠を越えて朝来郡生野町、播州峠を越えて多加郡加美町がある。それらの峠に囲まれたこの地は、中世の山垣城主足立遠政の統治してきた佐治郷で、古い歴史をしのばせている。



石生の谷中分水界に架かる水分け橋（氷上町）

竹田川の流域

日本一低い分水界^{みわか}、水分れ^{みわかれ}から北に流れ出た谷川は黒井川となつて竹田川に合流し、京都府に入って由良川となる。その流域の上流部が春日町^{かすが}、下流が市島町である。

日本海沿岸にもたらされた大陸文化は、この竹田川を経て丹波に伝播した。春日町の七日市住居跡や野々間の銅鐸遺跡がそれを証明する。このあたりは、この大陸文化と、古加川をさかのぼつてもたらされた大和文化の交流地点と思われ、今も七日市・八日市・十日市など中世の六斎市を思わせる地名が残っている。柏原・氷上・青垣・春日・山南・市島の六町が氷上郡を構成、さまざまな環境の変化を、六町一体の形で主体的に受け止め、今後の土地利用、地域整備のあり方を原点から問い直し田園都市化を進めている。

長い伝統にはぐくまれた風土の良さを失うことなく、能動的かつ積極的に行なうこと、そして多紀郡四町ともより連携を強め、丹波全域という視点に立つことが、住民すべてに課せられた基本課題である。

丹波の名刹

延喜式卷二十八兵部省の項に、山陰道丹波の国として、次のような記録がある。

駅馬 大枝 野口 小野 長柄 星角 佐治 各八疋
日出 前浪 各五疋

その大枝から佐治に到る道筋は、これである。現在のこの地を通っていたという確証は乏しく、説もいろいろあるが、とにかく、それは山陰から京都へ人が行きかい、物資が運ばれたであろう長い長い歴史のいとなみが刻みこまれた道である。源義経の一の谷攻めや、足利尊氏の上洛などと深いかわりを思わせる道でもある。大石義雄の妻・りくが豊岡へ向つたという道もある。そんな丹波の道の中に、名刹を次々と訪れることのできる道がある。それこそ延喜式に記録された丹波道であつたのかも知れない。それを私は「名刹への道」と呼んでいる。私の好きな道でもある。

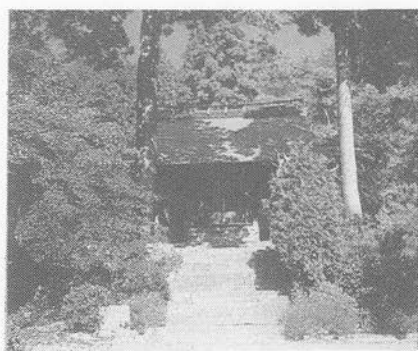
△安泰山 大国寺▽

丹南町味間奥

丹波の小京都篠山への玄関口、福知山線篠山口駅で下車して、車で北上して西の谷に入っていくと、茶畑が一面に広がる。その茶畑をみながら数分いくと、安泰山大国寺のまっすぐのびた二本の老松を眺めることができる。この寺は、大化年間（六四五頃）空体仙人が薬師如来を安置したのが始まりと伝えられ、本堂は、室町時代初期のもので、一部平安時代後期の部材が使用されていることがわかって、国の重要文化財に指定されている。境内もせまく、規模は小さいが、そ



大国寺 大日如来像



大国寺

めであろうか。とにかく、お茶の頃の大国寺周辺は一面に広がる茶畑の新芽の香が一ぱいで、そこに赤い袴で姉さんかぶりの茶摘み娘の働く姿もあり、思わず力一ぱい深呼吸をしてみたくなるのは私だけでないだろう。

(篠山口駅よりJRバス、味間奥行大国寺前下車三分)

△竹林山常勝寺▽

山南町谷川

味間奥の大国寺をあとに、篠山川の川代峡谷を下る。水は山を横切って深い谷をつくり、岩をけずって流れる。川底の大岩には、無数の欧穴があって、水の流れの急であることを

れでいて何かしら魅力のある寺である。それは堂内の大日如来や阿弥陀如来など、藤原時代の作品のかもしれない顔付きからにじみ出る親しみの故であろうか。それとも、頃ともなると、白、赤、紫、黄と咲きほこる花菖蒲を身近く味わうことのできるた



常勝寺・鬼こそ（追儼式）

証明している。山肌を福知山線の列車がしがみつくように走る。岸には山桜の並木がある。そこを過ぎて十数分で、めざす常勝寺に着く。仁王門をくぐるとまっすぐに上に伸びた石段が続く。両側に石仏が点々とある。誰が着けたか赤いヨダ



常勝寺

レかけがいとおいしい。菩提樹の木があり、沙羅しゃらの木が眼にとまる。参道の両側に平らなところが段段になって残っている。昔の坊の跡である。深い山に吸いこまれるように石段がみえる。私はゆっくり、ゆっくり登る。登りつめたところが本堂で

あり、左側が薬師堂である。それらを取巻く白塀の中をくりぬいて石仏が祀ってある。西国八十八所を巡礼してきた昔の村人が願いをこめて祀ったのが、これらの石仏であるという。本堂には、藤原時代の銅造りで高さ五十八センチ厨子におさめられた千手観音菩薩像があり、薬師堂には、鎌倉時代の寄木造り高さ七十七センチの薬師瑠璃光如来像が祀られている。

毎年二月十一日になると追儼式が行われる。村人たちが「鬼こそ、ごそごそ。鬼こそ、ごそごそ」といって親しんできた伝統の民俗行事である。この追儼式に登場する赤、青の四匹の鬼は普通ではない。大声をあげるのでもなく、床をけってあばれるのでもない。法道仙人に徳化され、たいまつ・太刀

・ほこ・錫杖しゃくじょうをもった鬼たちは、仙人に従い堂を巡るのである。それは、病氣・水難・風難からのがれ、五穀豊穡を祈るものであり、それを土地の人たちは大事に守り、伝えてきた。そんなゆかしい営みがいまでもいぶく寺である。

(谷川駅よりバス、郵便局前下車二〇分)

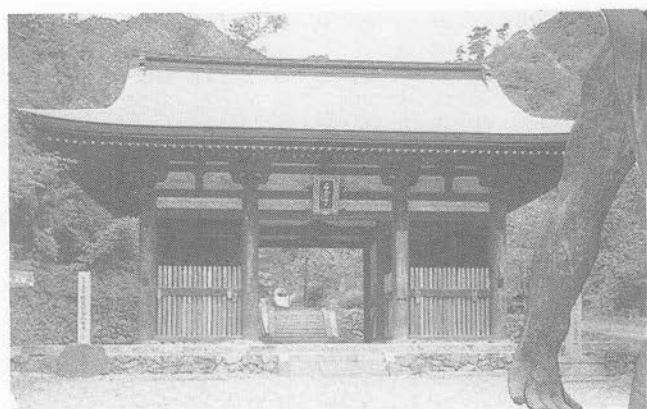
△岩屋山石龕寺▽

山南町岩屋

谷川の里をあとにして、旧小川村に入る。飛鳥宮から発掘された木簡に見る「丹波国氷上郡井原郷」に出る。ここから道を東北にとる。まっすぐな岩屋道である。山あいと奥へ奥へと進む。栗畑が目につく。昔このあたりは栗作郷くりさくと呼ばれた丹波栗の中心地であった。

奥へ進むと道の両側のところどころに、頭が五輪の塔の型をした石柱がある。これが一町ごとに建てられた町石である。古くは三十六本あったが、今はそのうちの二十五本が残っているといわれる。応永六年(一四〇一)仲春時正造立の刻印がはっきり読みとれる。

そうして三キロも登りつめたところに今は修復された仁王門が後背の山に映えて鮮やかである。門の中には、仁治三年(一二四一)に定慶のつくった金剛力士像がある。桜の寄木造りで、その眼の爛々たる輝き、体中にふき出るような力、観る者をひきつけずにはおかぬ迫力がある。奈良東大寺の



石 龕 寺

それに次ぐ代表作である。紅葉の頃、この門をくぐるのが私は一番好きである。山の緑に映える山紅葉の色が澄んで美しい。その下にたたずみ応永の銘の刻まれた石仏の汚れなき穏やかな顔をじっと見ていると、私でさえ一句詠んでみたい気がする。

聖徳太子が開

創というこの寺の岩窟は、まだまだ奥である。それをあきらめ、寺僧に案内されるままに本堂に登る。そこには足利氏とゆかりのある品がある。応永二十八年(一四二一)の両界曼荼羅だら版本もある。建武四年(一三三七)と記された鐙口もある。そんな歴史がそここにいびいている。



石龕寺・金剛力士像

境内の景色にひたり、遠い昔に思いをはせながら、時の経つのを忘れさせる一時である。

(谷川駅よりバス、井原下車、徒歩二十五分)

八十九山達身寺▽

氷上町清住

佐治川をさかのぼり、氷上盆地の中心部に出る。そこから西の方の谷が葛野谷である。その谷の行きつまったところが清住であり、丹波・達身寺の仏の里である。山吹きが黄色の花を咲かせる時、また、石楠花が淡紅色の花を咲かせる初夏の頃がよく、寺の前にひろがる田圃の向うに麦藁屋根の農家を眺めるのは、俗世間をはなれたようにもの静かでなかなか風情がある。

寺の創建ははっきりしないが、丹波の法隆寺というにふさわしく、数多くの仏像がある。いまは、古材で建てられた本堂と最近つくられた仏像収蔵庫があるだけであるが、その往古は、十九山の山の中に大寺院や坊があって、それぞれ仏像が安置されていたものと思う。また、仏師の工房もあり、仏像がつくられていたと想像する。とにかく、仏像の宝庫である。本尊は阿弥陀如来像で、本尊をはじめ十二体が国の重要文化財であり、三十四体が県の指定文化財である。その安置された仏像、無造作に置かれた仏像と対峙するとき、謎に包まれた長い歴史が、いまによりみがえってくるのである。

(石生駅より三方行バス、清住下車五分)

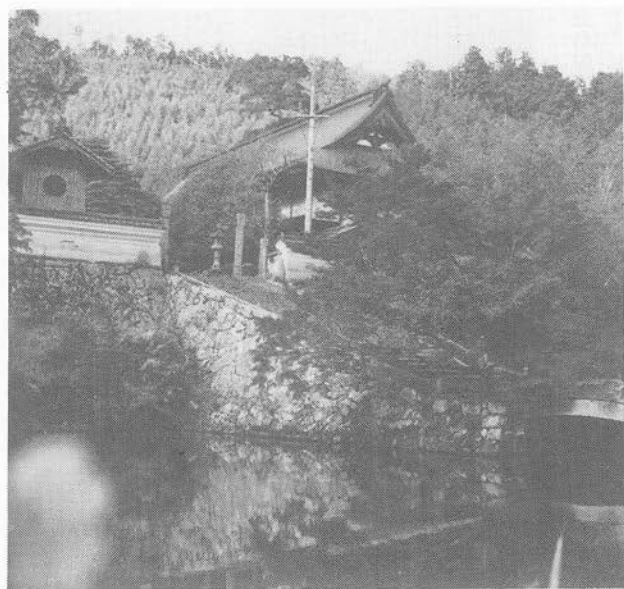


達身寺

△永谷山円通寺▽

氷上町御油

佐治川をさらに北上していくと、賀茂というところに出る。「和名抄」の賀茂郷である。早くから京都賀茂神社との関係はあったらしいが、文書では、この地を賀茂社領として認めた寿永二年(一一八二)が最初である。その北の方に「御油」



円通寺

という地名がある。おそらく賀茂神社に桐の実油を献上してきたことによるのであろう。搾られた桐の実油は、佐治川を下る。本郷の舟宿で荷物がととのえられる。滝野の灘で、高瀬舟から一まわり大きな舟に積みかえられた油や米や木材・炭などは、加古川河口の高砂の港に着く。ここで更に大きな船に積みかえられ、大阪は堺に向かう。それら丹波の産物は淀川をのぼり、賀茂神社の燈明などに使われたものと思いつきない。

そんな由緒のところに、足利義満は永徳二年（一三八二）円通寺を建立した。そこは、三方山に囲まれた静かなところである。新緑の境内の楓や本堂の背後の樺が日一日とその緑をましていく。まさに「あらとうと、青葉若葉の日の光」という様である。山門をくぐり、池の石橋を渡っていくと、本堂がぐっと迫ってくる。黄檗山万福寺の伽藍からうける印象に似通うものがある。その重厚さ、その静寂の中に曹洞宗の中本山としての歴史を感じとるのは私だけではないだろう。（石生駅より佐治行バス、井中または御油下車二〇分）

△瑞岩山高源寺△

延喜式に駅馬八頭を常駐させたと記録される旧山陰道丹波の道の宿場町佐治のたたずまいに名残りをおしみつつ、いよ神楽谷に入る。入口には、天保年間に立てられた立派な道標



高源寺

がある。「右ゆしま。左いくの」と鮮やかに刻んである。そこから約四キロ、めざす西天目山高源寺がある。

「このように、淋しくて奥まった寂境の寺を知らぬ。誰もが訪ねる大徳寺の石畳や、大原三千院の参道など美しいけれど、高源寺にくらべると、やはり都の寺だ。足もとにも及ばぬ。ここには、鬼気せまる禪機がみなぎり、身をおいただけで、胆を洗われる生気があるように思える」と、作家水上勉氏が感慨ぶかげに語った寺である。山門を入ると、苔むした参道、歴史を刻みこんだ石段が続く。両側の天目楓の若葉が、初夏の陽に映えて美しい。

急な石段を登りつめると、そこに方丈がある。特異な屋根の型が気になる。その右手、楓の木立の向うに三重塔がある。閑寂のおもむきが一ぱいの風情である。楓は、唐から伝えられたという欠刻の深い小さい葉で、全山もみじした様もまた

格別である。

歴代の僧は、京都御所にも参内した。その記録が「参内記」として今も残っている。僧はその時、土地のものを土産として持っていた。その中に佐治紬がある。佐治紬は、今では丹波布として昭和二十九年に復興されたが、それは元来、この地方の村人たちの生活の知恵として生み出されたものであった。土地にできる綿を紡いで木綿糸をつくり、草や木の皮で手染めにし、縞を織りあげたものである。それは単調な縞柄であり、素朴な丹波の香りが満ち満ちている。そんな生活の味の満ち満ちた佐治紬を京への土産にと、旅装をととのえる禅僧の姿を思いうかべながら、私は山をおりた。

(JR 柏原駅下車、大名草行バス、桧倉下車五分)

筆者紹介

青垣町 佐治出身、柏原町在住、公立学校教諭、兵庫県職員を経て、現在、県立丹波文化会館嘱託

「たんば歴史のみち」をはじめ、著書、論文、多数。



「レクイエム」演奏会と

「日中親善演奏の旅」を終えて

笹 倉 強 (西脇市)

作曲家モーツァルト(一七五六―一七九一・奥)の最後の作品レクイエム(未完曲)は、彼が作曲なかばにして自分の鎮魂曲のようだと意識しながら、苦しみの中から生み出す旋律を側近に筆記させる――映画「アマデウス」の場面は極めて劇的かつ圧巻であった。側近のジュスマイヤーが亡きモーツァルトの構想を受けついで完成した「レクイエム」は、あの映画を見ると他のどの作曲家のレクイエムよりも世界的に愛される理由がわかるだろう。

私たち城北オラトリオ合唱団は、第七回演奏会を六十一年十二月二十二日、日本都市センターホールで開いた。曲目はモーツァルトのレクイエムである。年末ともなれば世間はあげて第九、第九なのだが、私はどうしてもこのレクイエムを演奏してみたかった。過去五十二年と五十七年につづいて今回は三度目の指揮なのだが、この曲はいつも同じ気持ちで指揮することができない。年の瀬ともなれば、今年一年のできごとを振り返り、他界された先輩や恩師、知人、教え子、肉親らの冥福を祈りつつ、わが身が生を亨けてこの一年を終え



城北オラトリオ合唱団と笹倉強氏指揮風景

られる喜びに感謝しながら、ひたすら指揮にうち込む。

聴衆の中には、「この春、妻を亡くしたのでよい供養ができました」とか、「恩師を偲んで涙を流しました」とか、「愛する息子の写真を抱いて聴かせていただいた」と語る老母がどがあつた。また合唱団員さえも「亡母や恩師の写真をポケットにしのばせて歌いました」などと語り聞かされると、私も指揮の責任の重さを痛感し、今日の音楽づくりは果たしてあれでよかつたのかと反省することしきりである。

このように音楽が、私たちの日常生活に密接な関係をもつて聴かれることは、そんなに多くはない。万雷の拍手のうち、盛会裡に終えることができた感激もまたひとしおである。

またその日の会場に関東氷上郷友会から贈られたみごとな生花は、まさに錦上添花を添えられた感あり、この紙上を借りて厚く御礼を申しあげたい。

◇

その四日後の十二月二十六日朝、私は城北埼玉高校合唱団の三十三名を引卒して、成田から北京に飛んだ。「第四回日中青少年学生交流大会」、毎日新聞社、毎日コミュニケーションズ主催の国際親善の旅であつた。

メンバーの編成、プログラムの構成、記念演奏会の日程など、山積した諸々の準備に八カ月を費やしたが、多くの理解者のご支援やご協力があつたればこそ、この快挙もできたの

であった。

北京放送局ホール、海淀劇場での演奏会、上海音楽院の学生との交歓演奏会、上海音楽庁の一般公演（十二月三十一日にもかかわらず多くの聴衆が集まった）と、わずか一週間の旅であったが、高校生たちがはじめて見る中国には予想外の感慨があったようである。大陸の大地に培かれ育った青少年の大らかさ、心の広さ、親切さ、私たちは日本のあなた方と仲良くしたいのだと切望する二十一世紀の仲間意識は、まさに感動的なものだった。

私は一人の中国人通訳と次のような話しを交わした。「昔、日本人は中国にずいぶん悪いことをしましたね」「おゝそうです」「あなたはそれをどこで知りましたか」「学校で教わりました。教科書に書いてあります」「すみませんでしたね」「それはすんだこと、これから仲良くすればよいのです…」と。

戦時中には少年であった私にとっては、その事実を詳しくは知らないにしても、やはり一人の日本人として気がかりだったのである。

『日本からの平和の使者を歓迎します』『日中友誼・一衣帯水』と朝鮮やかに大書した北京第三十五中学校の教室で、両国の若者たちは共に歌い、踊り、ゲームを楽しみながら熱い交流のひとつときをもち、強烈な印象を刻んだ。

遠くに思っていた中国は、上海と成田わずか二時間の距離にある。天気図にも、日本といっしょに描かれている中国に気づく。この両国の隣接意識を高め、今後ますます親善を深めねばならないことを痛感するこのごろである。

フランス刺しゅうと私

篠原 よね子（青垣町）
（旧姓佐々木）

私は佐治（現青垣町）で生まれ育ちました。春はれんげ草の上に転がり、夏は川で泳ぎ、秋は自然の紅葉を眺め、冬はいちめんの銀世界を駆け回ってのんびりと育ちました。幼いころからなにか自分に向いたものをしっかり身につけたいと思っておりました。

大阪で結婚して二児の母となり、昭和三十四年から東京で生活するようになりました。最初の住まいは文京区の本郷でした。ここで刺しゅうとの運命的な出会いがありました。友人に誘われて訪れた刺しゅう教室、一針一針によって表現される豊かな色彩。それは正に芸術でした。すっかり魅せられた私は「自分もやってみよう」と決心しました。やっと乳離れした子供を連れ、先生のすべてを学びとろうと努力し、ひとが三年かかるところなら私は一年で、と必死の勉強を続け

ました。そうして三年目に初めて先生の展示会に出品しましたが、そのときの感激は今でも昨日の事のようにはっきりと思い出されます。

昭和四十年に三鷹市（今の住所）に変わったのを機会に人様に教えることにしました。そのうちにいろいろなグループから誘いを受け、徐々に輪は広がってきました。私は自分の学んだこと、更に自分が発見したことを惜しみなく皆さんに教えました。

昭和五十四年に「篠原刺繍教室つづじ会」と名付けて独自の教室を発足させました。第一回の作品展は三越銀座店で開催しましたが、その後は一年か一年半の間隔で、三越銀座店で四回、東急吉祥寺店で二回、京王新宿店で一回、それぞれ百数十点の展示を行い、関係の皆様の御支援と御協力によっていずれも盛況のうちに終らせることができました。

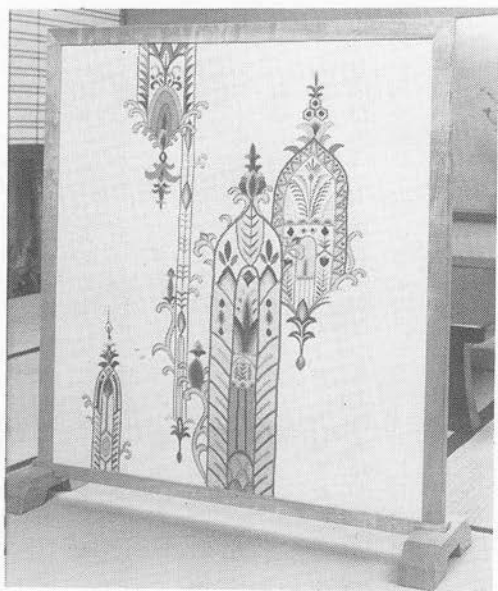
昭和五十六年及び同五十九年に代表的な作品を集めて「篠原よね子刺繍作品集」Ⅰ・Ⅱ集を全カラーで出版し、北海道から沖縄まで広く同好の人たちの御参考に供しました。昨年からある商社の紹介で中国と技術交流を図っており、なんとか具体化できればと願っています。昨秋、私のオリジナル作品が銀座の和光で売り出されました。この秋には京王新宿店で第八回篠原教室作品展を開催する予定であります。

刺繍は糸の織りなす芸術であるといわれます。対象となる



和風二枚屏風 舟

ものは花であり、生物であり、風景であって、それぞれが抽象的に表現されています。私の毎日は刺繍とつながっており、美しい花を見れば刺繍の図案化に、かわいい動物を見ればあのシルエットを、素晴らしい景色を見れば糸で表現したい、目に入るものはなんでも私には図案のイメージとつながります。そして図案ができ、どのように刺すか、次々と夢



立衝風洋

がふくらんできます。少しの時間も大切に一針一針刺します。何日、何か月もかかってで上がった作品!! その喜びは私だけのものです。

私にはいろいろな作品がありますが、他の刺繍教室にない特色は、日本画の「山水」を刺繍の技法で表現したことあります。私はこれを創るときはいつも生まれ育った故郷を思い浮かべながら想を練るのです。水清く緑豊かな故郷に育ったことに感謝いたしております。

こうして私と刺繍との出会いから二十数年が経ちました。

苦しかったこと、楽しかったこと、失意のとき、得意のとき、いろいろのことがありました。その折々に多くの方々のお力添えを頂戴しながら歩んでまいりました。これからも究める途はまだ遠く困難なものだと思いますが、私は「やるしかない」のです。郷友の皆様方の温かい御支援をお願い致します。終わりに作品集の創刊号の巻頭の言葉の一部を引用して拙文の結びといたします。

「私達の先輩の一針一針が歴史であり、文化であり、人生そのものであり、また四季のながれを、花鳥風月をあらわしてきたものと思います。私はこの伝統をしっかりと受けつぎ、更に発展させたいと願うものであります。」

描ききれないもの

常岡幹彦（柏原町）

今まで描いた数あるモチーフの中で、生涯つきあいたい材料がいくつかある。このようなモチーフは、ある周期をもつてくり返し、くりかえし描く。

大江山にある椿の古木もその一つである。写生旅行の途中、山陰線の下夜久野に叔父を訪ねると、古丹波の話から「大江山にふかーい肌をした古木があるよ」と教えてくれた。この

叔父の觀賞眼は相當なもので、絵画についても一見識もつていたので「フカイ肌」のひと言にひかれて見に行った。それは、福知山から宮津にぬける途中で、大江山麓にあった。

直径三十センチもある古木の幹は、苔ばかりではなく、古いカビやカサブタのようなもの、渋い緑や紫、淡い群青色、そして茶や白という具合に複雑層をなしている。触れるとポロツと剥げおちそうで、自然が年月をかけて造りあげた抽象作品であった。特に根元から数十センチ程は、單なる美しさを超えた世界を感じさせた。周囲には十数本の孟宗があり、その奥はうっ蒼としたやぶで、歩けば落葉が静けさを破る。

さて、具体的に制作の夢が湧いたわけではなかったが、あまりにも深い美しさにひかれて写生をすることにした。出来る限り自らをこらしめて、対象に忠実に、マルゴトかこうと心に決めた。画用紙をつぎあわせ、二メートル四方ほどの紙を用意して、それを折りたたんで、現場で繰りながら鉛筆と水彩でおおよそ実物大に写し取っていった。数本の孟宗、奥のやぶ、落葉も描いた。

この古木には、馬鹿になってトコトン探りたい意欲を強く誘うものがあった。雨や雪がかかると肌の色が沈むので、唐傘の一部を裂いて幹にさしかけてやる。十二月中頃から正月をはさみ一か月間、寒風の中をコツコツ描いた。みるにみかねた近くの奥さんが、お昼となるときまって、座敷でみそ汁

やおしんこをごちそうしてくれた。その暖かさを今も忘れることが出来ない。しかし描き進むほど、肌の深さは尋常ではなく、やれどもやれども駄目である。あとは自分の心の問題——と、ひとつきで切りあげざるを得なかった。

その後、年賀状で「椿、元氣ですか」と尋ねると「元氣していますよ」と毎年返事をもらっていたが、再度訪ねたいと氣にかかりながら、とうとう二十余年が過ぎた。

昨年一月開催の個展で百号に「漂霧」（山ざる第十七号表紙絵）と題してこの古木を描いたので、この機会にと思い五月に大江山を訪ねた。本当に久しぶりであった。あの時の奥さんは、もうおばあさんになっておられ、しかも一人暮らしだったが、お元氣で大変喜んで迎えて下さった。みそ汁をよばれた同じ部屋で、お茶をごちそうになりながら、あの頃の話に花が咲いた。

しかし、久しぶりに会った椿は枝をはらわれ、周囲の孟宗もすっかりなくなつて、古木にとって住み心地は決してよくないらしく、何とも色つやが悪く感じられた。

今、こうして出会っていると、二十年の間に私の中でこの木がどんどん育っていたことに気づく。——あの時が、一度限りの出会いだったな——と何とも感慨が深く、なかなか立ち去ることができなかった。今までも何点か描いたが、これからこの木は私の中で育ち、蓄積されたとき、又描くだろ

う。幾たび描いても描ききれない。割り切れないものを残す。それに、私の描き方や、絵画上の扱い方も異なってくる。

あの「漂蕪」と題した絵にしても、実は椿の幹を描こうとしたのではなかった。孟宗竹をかくのでもない。描きたいのは、それ以外のものではあった。

見えないものを描くことは、制作者にとって誠に至難なことだが——形のないところに形をみる——この魂の領域を大切にしたい。

今年の作品発表予定

- 上野が育てた日本の作家展 3月24日～4月5日
- 常岡幹彦個展 11月3日～15日 東京セントラル美術館主催

陶芸雑感

可部 美智子 (柏原町)

(旧姓山下)

冬の陽光をいっぱいを受けて暖かい公民館の創作室で初心者のための陶芸教室が始まった。講師は女流陶芸家の可部美智子先生と紹介され、面はゆい。公報での募集の申し込み

は一時間足らずで満ぱいとなり、二十七名の方が生徒として登録された。二十余年前、私の「陶芸」との出会いもやはり陶芸教室の応募であった。長男を主人にゆだねて毎土曜日の夜教室に通った日のことが鮮やかに浮かんでくる。新鮮な思いで未知の世界に飛び込んだ自分の姿がそこにみえる。三々五々集まって来た生徒さんたちの顔ぶれは、三十代が最も多く、子育ての中にもなにか生活の中に潤いをと、託児所に子



供を預けて参加したという人もみられた。私も三歳の児を主人に預けて、土曜日の夜教室に通った。少々主人の御機嫌を気にしつつ通ったものであるが、主人の協力がなかったら今日の私はない。あれから二十余年の月日が流れ、私の心のアルバムはずしりと重い。主人は焼き物を習うにはまず窯元を知らねばと、日本の六古窯はいうに及ばず、東に西に車を駆って見学して回った。さすが三十代の私も音をあげる程であったが、お蔭で今日、私の焼き物に対する考え方が、把握の仕方が、せせこましくなく、[〃]ものが見える[〃]ことは、やはり主人の先見の明といえよう。「やるからにはプロになれ。

お前を遊ばせる金などない」と主人は私に宣告した。なんとまあ、ひどいことをのたもうものかなとその時はあきれたのだが、現在の私はまだまだ勉強の途上であるが、ここまで引き上げてくれたのは、あの主人の言葉のお蔭と気付くことができ、感謝の思いでいっぱいである。厳しい顔で「これでも織部か」とどなった主人も今は亡い。

十年前にふとしたことから万葉の女人を手がけてみた。額田大王や十市の皇女など……。中国でも芸術研究所や工芸庁などを見学し、俑などをたくさんみることでできた。俑は暗やみの中でじっと死者の守りに就いてきたのだが、同じ目的で作られた日本の「はにわ」に比べ、なにか陽性のものを感じ、この俑を私なりにアレンジし、創作し、この明るい現

代で、生きている人たちの心を慰めることができたらと思い作り出したのが現在の陶彫人形である。

私は日本にあるいろいろな物語や歌集や詩集から題材をとり、作ってみることにした。「現代人の郷愁」「万葉の人びと」「日本むかし話」「日本の神話」等、個展毎に発表して皆様に見て頂いている。私の好きな額田王を何とか表現したいと思う。陶土に向かい指先で形作り、一へらごとに思いを込めてけずる時、額田王と私はいつのまにか一体となっている。俳優が演じる役になり切ることができ、そこに新たなキャラクターが生まれる如く、私も陶土の中に自分を埋没させ、新しく息づくものとして誕生させて行くのである。迂余曲折の後、仕事台の上に額田王の姿ができ上がった時、一つ誕生させた喜びは湧き上がる。しかし、これから乾燥し、施釉し焼成しなければならぬ。真の誕生はこれからである。このように私はつばや鉢その他の食器類とともに、新しい分野である陶彫の中に、自分の世界を創ることを始めたのである。

私自身で創った道、だから私も侵されることのない可部美智子の世界、こんな世界をもつことができた私はなんという幸せ者であろうか。創作できるのはよほど先祖の遺徳があるからといわれるが、その先祖の遺徳と、顕幽一如といわれる亡き夫の支えを頂いているからだ、と感謝せずにはいられない。

人形師は「念を入れてはいけない」というそうだが、私は

喜びである。

作品発表会予定

・陶彫十五人展

西武デパート六階 ガレリア(株)アートサロン

昭和六十二年三月二十日(金)～三月二十五日(水)

・日本陶彫会 銀座アートホール

昭和六十二年五月四日(月)～五月十日(日)

・可部美智子展 赤坂「乾」ギャラリー

昭和六十二年九月十一日(金)～九月十七日(木)

いつか花咲く

西 崎 祥 (柏原町)

「念入りに」という言葉があるごとく、一生懸命に作る時、「念入りに」作っているのである。その念がもし邪念であればどうであろうか。私は仏像を作っているのではないから一刀ごとに三礼はしないが、やはり一ひねり、一へらごとにこの女人、この子供たちの行く先に必ず幸せをもたらしますようにと願いをこめる。その願いに答えるかのように、「いいお顔」でうなづいてくれる人形たち、今日も感謝の心で窯に並べる。所狭しと並んで火入れを待つ女人像や子供たち、人の心の中に暖かい燈を、そして家庭の中に和合の心をとこれら作品たちのもつ使命に期待しつつ、窯のふたを閉め、火を入れる。約二十時間の窯たきと一昼夜の冷ましの後、ようやく対面である。期待と不安の交錯するなかで窯出しをする。明るく笑っているはずの紫式部が、泣いていたり、若菜摘む乙女らが怒っていたりすると、悲しくなる。やはり、それは私自身の心の反映であろうか。人形たちにわびつつ作り直すが、焼けたものは残念ながら壊せない。皿などは思いきりよく、ストレス解消とばかり割る。しかし壊せない私の人形たちは、私の庭でめじろ押しに並んで私を見守ってくれているのである。今日も陶土に向かい、今日あることを感謝しつつ、物語りの中に生きる人々を現代の生活の中に、息づかせる役を担っていることを自覚し、毎日真剣に取り組み、ますます表現を練磨することができるなら、私にとって大きな大きな

いつの間にか天命を知る年齢となり、一入感慨深い思いで年が明けた。私が年齢のことですまず思い起こすのは、能の世阿弥の書いた『風姿花伝』の中の第一「年来稽古条々」(これは七歳を初めとして五十有余年に至る迄を七期に分け、各期にふさわしい稽古指導の方針を明らかにしたもの)に五十歳のころにはしはれたる風体と芸の境地を花にたとえて書かれていることである。この花伝書は七編まであるが、究極の目的は花の解明にあって、全体を貫いているのは「花」の体

得ということである。ここでいう「花」とは、役者の演技、奏演が観客の感動を呼び起こした状態をいうのであって、観客を魅了し驚喜させ夢中にさせたとき「花」が咲くのである。そして「花」にもいろいろあって、美声、美ぼう、若々しい肢体、柔和な動きなど肉体的条件及び技によって生じた花を「時分の花」わざを克服し技術の練磨工夫の徹底によって心のままに生涯咲き続ける花を「まことの花」小さな一事に十数年の秘められた裏側、特殊なものを隠しもっている「秘する花」自然の運命の起伏に順応しつつ成功を待つ工夫が「因果の花」というように花を知ることを説いている。

私は能楽者ではないが、観客の感動（感動にも次元の高低はあるが）を引き起こすことを目的とし、それをこよない喜びとしている点では同じなので、演技論、舞踊論として参考になっている。誰でも良い物を見たり、聞いたり、読んだりしたときには感動を受ける。殊に私は本当に良い芸を見た時、とても激しいまな感動を受ける。生きていて良かったという喜びを味わう。そして少しでも近づきたいと願う。何のみてくれもない淡々とした芸。とても望めないことだが六十歳を目標に、恥を重ねて学んでいる。

昨年のリサイタルには、郷友会の皆様の温かいお力添えをいただき、精一杯踊り抜き、多くのことを学び得た。誌面を借りて心より御礼申し上げる次第である。また、大勢の方々

から感想や批評をいただき感謝に堪えない。自分自身満足できるものならば明日にでもやめて、親切な忠告に従い、老後のためにお金をためるとか、マンションを買うとか、社会に役立つことをするとか……。しかしこんな芸でやめては私の人生の意味がなくなり、悔いだけを残すことになる。御迷惑でもまだまだやる訳にはいかない。

世の為、人の為に役立つ尊いお仕事と違って私の仕事は大了したことはない。そんな悩みを以前、尊敬する神父様に話したとき、おっしゃったお言葉。「それは天職です。あなたが多くの人に良い踊りを見せて喜びを与えるなら、それは大きな徳を積むことになります。」

私には自分の歩む道筋が見えている。迷わず心を自由に翔かせたい。そういう年齢になったと思う。



けれども今回、ある批評家に「新しい芽が吹き出た。」と書かれた。あーどうしよう。私の寿命が足りない。

「花」が咲くのはあの世になっちゃう。

'86 丹波の動き

丹波新聞の見出しから

昭和六十一年一月一日特集号

○北摂・丹波の祭典へ向け前進の年

各町のワクを越えて広域的な取組みを

○丹波の動脈、近舞線ツチ音高く完成間近 期待と不安のぞかせる地元住民

○新年決意あらたに

「力をあわせ丹波のために」佐々木良作氏（衆議院議員・民社党常任顧問）

「丹波の時代の幕あけ」西山敬次郎氏

（衆議院議員）

「丹波都市づくり」に全力」谷洋一氏

（衆議院議員・建設政務次官）

「活力ある田園都市づくり」梶原清氏

（参議院議員・大蔵政務次官）

○故郷への手紙

心は常にふるさとにあり

東京都 有田喜一

不安な現在の世相

東京都 佐々木盛雄

青春の日々の思い出

静岡市 坂本重雄

市を二分する嵐

返子市 小谷正己
なつかしい故郷 東京都 生田正輝

政治・行政

○丹波祭りで地域開発をと山南町が独自の要綱案策定 (1・9)

○国立篠山病院は存続 公的機関などに経営移譲 厚生省の再編計画

○ここでも狭き門 ポプラの家（心障者のための通所更生施設）職員試験に六人採用予定に六十五人挑む (1・16)

○北摂・丹波の祭典推進協スタート

計画委員会設置 (1・19)

○柏原町議会建設業者を告発 (1・23)

○柏原町の谷口町長は議会を解散せず 辞職 自らが町民に信を問う 失職を

待ち町長選へ再出場 (2・6)

○市島町議会の議員定数十六人で決着

(2・6)

○柏原町長選前町長（谷口務氏）と元助役（安井幸太郎氏）が一騎打ちの様

相 (2・13)

○注目の柏原町長選挙 谷口氏・安井氏の激突 (2・23)

○柏原町長選締め切り間際に小倉氏立候補で混戦模様 有権者数六、一八八

人 (2・27)

○柏原町長に安井氏が谷口氏に大差で

初当選 公営住宅問題に決着 (3・6)

○丹波各町予算町会

西紀町中学校建設に六億円で総額二

十七億 一般会計二三％の伸び

丹南町は総額三十九億円で一％減

氷上町は総額六十億円で六％増

(3・9)

山南町緊縮意欲型の予算案総額四十

七億円

春日町美術館の造成費、春日部幼稚

園

春日町美術館の造成費、春日部幼稚

園

園改築などで総額四十一億円

市島町は前山小を大規模改修 総額三十七億円

篠山町村雲小学校改築 総額九十億円

今田町は道路整備重点に総額十六億円
(2・13)

○「ボプラの家」完成 四月一日から開所 心身障害者のための氷上郡初の通所更生施設
(3・16)

○氷上町議会火葬場問題で紛糾 住民の強い要望無視と町長質す
(3・16)

○氷上町の田中町長が「政治生命をかけて取り組む」と火葬場問題で答弁 四月に補正予算を
(3・20)

○市島町六十五年を目前に振興計画生活基盤の整備 地籍調査 水道統合
(4・6)

○柏原町長当選の安井氏の法定選挙費用超過 町選管は報告書の再確認求める
(4・6)

○柏原町長安井派選挙費用収支報告書

を修正 (4・10)

○柏原町連帯と幸せなまちづくりへ節減合理化の予算案 新井小の屋内体育館を建設 予算総額三十七億円

(4・24)
○西紀町鼓峠をアジサイロードにと苗を四百本
(4・24)

○篠山町は五月一日から四週五休制を実施 始業は午前八時半に
(5・1)

○青垣町は六十二年度から八年がかりで農業構造改善事業に取り組む
(5・8)

○兵庫五区定数減に強い不満 過疎地の実情を国政に
(5・15)

○今田町長選で新人の山本氏が僅差で当選
(5・29)

○丹波の人口 十一万七千二百六十五人(三月末丹波県民局まとめ)
(5・29)

○平岩氷上町村長会長が丹波入りした金丸自民党幹事長に過疎地域の機能回復施策と五区の定数減不満を直訴

(6・12)

○氷上町議会、長野開発で墓地公園計画前提に町有財産の売却を議決

(7・6)

○衆院五区谷、佐々木氏が当選、西山氏善戦むなしく「丹波の議席」消える 再挑戦の意欲示す
(7・10)

○参院兵庫区、中西氏が再び庄勝 本岡昭次(再選・社現)片山公人(初当選・公新)氏も
(7・10)

○参院全国区当選の梶原清さん 丹波の発展に精一杯がんばる覚悟と抱負を述べる
(7・10)

○市島中に照明灯設置
(7・20)

○六十年の多紀郡人口動態 出生四七二人、死亡四五二人、ガンが死因第一位に(篠山保健所まとめ)
(7・27)

○青垣中学校体育館の内壁に間伐材を活用
(9・14)

○青垣町議会は非核平和都市宣言を決議
(9・21)

○丹波十町の六十年年度決算は全町黒字

決算堅持の見込みと県民局発表

(9・25)

○柏原町のCSR（丹波の祭典のメー
ン会場の一つに使用する）用地買収に
疑問あり 町議会が厳しく追及

(9・25)

○丹波地区の住宅地上昇率県平均を上
回る

(10・12)

○北摂・丹波の祭典の愛称は「ホロン
ピア'88」シンボルマーク決まる

(11・16)

○市島町の荒木町長が町議会で町長選
再出馬を表明

(12・21)

○春日町議会で議員定数十八人（減員
二人）に決着

(12・25)

事業

○市島町上田の三ツ塚史跡公園内にモ
ニュメントを十一棟の白鳳建物跡に表
示

(1・19)

○篠山町で城下町の歴史探訪サイクリ
ングコースを設定

(1・19)

○近舞線の篠山川橋百五十八メートル
の架橋 高速時代の到来を告げる

(1・23)

○神池寺の遊歩道延長 森林浴や自然
探索に好適

(2・9)

○昭和六十一年度県の丹波地区の主な
事業 篠山産高の二分校改築 氷上養
護学校には高等部 氷上町に新たなば
荘（仮称）を建設 市島にデイサービ
スセンター 北摂・丹波の祭典への支
援 丹波縦貫道調査費計上

(2・23)

○県立丹波総合スポーツセンター（篠
山町郡家）三千平方メートルを公園化
植栽や遊歩道など

(3・9)

○篠山口駅にみどりの窓口 十月から
営業開始

(3・13)

○青垣町が四年がかりで自転車、歩行
者の専用道を完成 通学やジョギング
にも

(3・23)

○市島町竹田地区簡易水道拡張工事
浄水場施設など完成

(3・23)

○氷上郡医師会の住民と医師のコミュ
ニケーションを図る健康センターが完
成 包括的に検診事業

(4・17)

○柏原町新町の町営住宅団地五ヶ月ぶ
りに起工式

(4・20)

○今田町上立杭伝統工芸公園の整備
お祭り広場などが完成

(4・20)

○山南町和田に県薬草試験場が完成
“漢方の里”へ本腰

(5・8)

○春日町大路地区にゴルフ場 栢野を
トップに説明会

(5・22)

○近舞線丹南―福知山インター間の舗
装工事西紀町プラントで火入れ式

(6・22)

○近舞線市島―春日区間の舗装工事
プラント基地で火入れ式

(6・29)

○山南町の大谷橋が完成 古い世花橋
は姿消す

(8・3)

○丹波路を“電車”走る 電化に備え
試運転

(8・24)

○近舞線に対応し丹南町の杉―西吹線
の舗装工事が完了

(9・14)

○近舞線の丹波の用地買収は初田（丹南町）で交渉成立し完了 未解決は三

田市内一カ所だけ (9・18)

○秋の丹波路に電車走る 宝塚―城崎

電化開業 遠のく複線化に反応複雑

(11・2)

○「新たんば荘」建設へ造成着手

(11・23)

○近舞線春日舗装工区完工

(12・7)

○篠山口まで複線化を県と期成同盟会

が要望 分割後新会社に引き継ぎ (12・14)

教育・学校

○柏高九十周年事業で伝統を学ぶ記念

館に資料や記録など収蔵 校内緑化の造園も (1・26)

○氷上高校の食品加工幅拡大へ アマ

ゴの育成順調 ワカサギ養殖も計画

(1・26)

○柏原高校理数コースは一・一倍 鳳

鳴高校は理数コースは一・二倍、英語

コースは定員四十五名に四十九名出願

(2・6)

○多紀郡内の各教委の教職員の異動方

針同一校七年以上は転任など(2・23)

○氷上郡教委が郡内の中二対象に調査

「いじめで悩む」三十六人 やや睡眠

不足の傾向 (2・23)

○四月開校をめざす今田の県立林間学

校 (2・27)

○氷上高校女子バレー部西近畿大会で

五連覇を遂げ全国大会へ (2・27)

○柏原高校家政科最後の卒業生送り出

す 三十七年の歩みに終止符 母校に

記念の桜の木 (2・27)

○氷上郡の新年度の入学児童総数千人

台割る 遠坂小は十人 (3・6)

○氷上高校で校章・校名を入れたかわ

らせんべいを名物菓子にと計画

(3・9)

○小学校の新入児激減で八学級減の異

例事態 教員の新採用は困難(氷上郡

教委) (3・16)

○氷上郡関係の校長の顔ぶれ

田中貞典上久下小校長・芦田有行久

下小校長・足立恵新井小校長・常岡譲

遠坂小校長・田原肇神楽小校長・畑中

寿雄北小校長・吉見一郎前山小校長・

岸本健芦田小校長・藤本忠大路小校長

・足立文吾竹田小校長・荻野忠一進修

小校長・荻野恵五郎黒井小校長・稲畑

介広春日部小校長・舟川浩船城小校長

(3・30)

○小・中学校教職員の異動 氷上九十

五人、多紀は六十五人 (4・3)

○西脇北高から篠山産高校長に荒木大

三氏 (4・3)

○柏原高校で柏陵記念館補修工事など

完成 九十年の伝統を一目で(4・3)

○柏原高校のコース班が定期演奏

ニューミュージックも 卒業生も賛助出

(5・8)

○柏原高校の延べ大学合格者数 国公

立大に四十人、早慶八人、関関同立四

十一人 (5・11)

○柏原高校に“ブロンズ娘”が留学

日本文化が知りたい (6・3)

○氷上高校女子バレー部は県高校総体で六年連続優勝する (6・12)

○県総体で女子勢奮闘 柏原高校のソフトボールが準優勝 総合では六位 (6・15)

○柏原高校盛大に九十周年記念式 伝統に恥じぬ学校に 校訓碑除幕や祝賀会 (6・15)

○氷上高女子バレー部高校総体で初優勝 (8・7)

○柏原高校とセントメリディアン高校がハワイで友好深める (9・4)

○氷上高女子バレー部が山梨国体で優勝 三年ぶり二回目の壮挙 (10・19)

○柏原高校の就職戦線求人数百五十人の激減だが就職希望者も大幅減でひと段落 (11・30)

産業

○春日農協が野菜団地造成めざす ナ

ススイートコーンを中心に大納言小豆、レタス加え (1・9)

○美和で主婦が農閑期のは場を活用 今月から木の芽を出荷 (1・16)

○市島町が近舞線開通に対応し特産物に「ぶどう」 将来はワインの里づく (1・23)

○春日町国領養魚組合が長谷池つり場を整備 ワカサギやコイ料理 廃木利用で休息所建設 (1・30)

○昭和六十年分の柏原税務署管内の農業所得標準決まる 水稲所得金は大幅ダウン 野菜はレタスなどアップ (2・9)

○西紀町でシャクナゲ村民募る 内容充実し定着化へ (2・9)

○西紀町シャクナゲ村でたる詰めタクアン便 田舎味を村民に (2・23)

○建設省が市島町北岡本に由良川水系の雨量観測所を設置 (2・23)

○山南町「薬草料理」の開発(町飲食業組合の協力を要請 秋の文化祭で試

食も (3・2)

○市島商工会は広域商業診断調査結果で大型ショッピングセンター建設など共取の研究推進 (3・2)

○幻の丹波赤米を今に 古代文化掘り起こす 氷上青年会議所のむらおこし事業の一環 (3・13)

○青垣町営木工センター六月からオーブン 研修生の募集も 間伐材の活用を促進 (3・20)

○多紀郡の農作業の標準賃金 機械田植えは十アール七千円 (4・10)

○西紀町シャクナゲ祭り(四月二十六日から二十八日) 五百鉢をずらりと展示 (4・17)

○氷上町農協が会館前広場に青空市(毎週木曜日) 新鮮な農産物を直販 (4・20)

○国鉄のアイデア商法 旧多田山トンネルでシメジを試験栽培 (4・27)

○ツツジの名所復活 柏原町商工婦人部が鐘ヶ坂に植樹 (5・1)

○市島町の神池寺 近舞線で脚光浴びる 境内一周コースを整備し自然探索や森林浴など (5・11)

○市島町の西山酒造の天楽小鼓が全国新酒鑑定評会で“金賞”に輝く (6・3)

○氷上町香良の独鈷の滝周辺を自然の宝庫として注目 (6・12)

○篠山町城北地区でテッポウユリの出荷始まる (6・29)

○山南町和田の農協稚蚕共同飼育所で画期的な飼育法 掃きたてから配蚕までにエサ一回やるだけ (7・13)

○青垣町の天子の家では中元シーズンへ大忙し 有名百貨店から注文 (7・13)

○主食の米を見直そう 米飯学校給食の拡大要請(丹波地区農協) (7・24)

○市島町酒梨の岩沢紀夫(二六)さん Uターンして観光牧場開設 (8・3)

○春日町近舞線対応で活気 店舗建設

やビジネスホテル、総合レジャーセン
ター(野上野地区)も (8・7)

○黒大豆の酒を商品化 多紀酒造が「桜蘭」発売 (8・7)

○篠山農協の特産館ささやま完成 九月にオープン (8・7)

○漢方の里にニューフェース “門外不出”の種子届き中国薬用白菜試作 (8・24)

○マツタケ山入札 ことしは高値で落札 (9・4)

○ヘチマの繊維でびょうぶを作る 氷上町青年部村おこしチーム (9・18)

○山南町「谷川郷」クリ園 低木仕立てで大豊作

○丹波マツタケ顔見せ キロ六万円で出荷(篠山町農協大芋支所) (10・2)

○カラスが目算狂わす ナシ狩り例年より数日早い打ち切り(春日観光農園) (10・5)

○この秋 篠山に人気 テレビ局の取材どっと (10・12)

○お米三年続きの豊作 (11・6)

○山南町小野尻の方山さん新しい姿の若松を試作 ゆるく曲がった枝ぶり (11・20)

○新製品「白い立杭焼」試作品を展示(今田町陶磁器組合) (11・27)

○“丹波の黒豆”全国へ 着実に需要を拡大 (12・7)

○市島町高谷山に民間中継局が完成 テレビ難視聴を解消 (12・14)

○氷上郡産米一位はコシヒカリ 作付面積減だが収量増 (12・28)

社会・文化

○「ハレー彗星みたぞ」丹波星の広場などで家族連れ百人が観察 (1・9)

○山南町上滝の自動販売機のドリンク剤に殺虫剤 老人飲み危うく助かる (1・12)

○好景気期待を込め市島の初えびす祭り 威勢よくもちまき佐治の初えびす

(1・12)

○丹南町大山上の古墳時代後期の集落跡住居にはかまども (1・16)

○伝統行事を伝えよう タコ上げ(東小)やモチつき(南小) (1・16)

○篠山町の青年団が新成人対称に意識調査 職あれば帰郷四十% (1・23)

○篠山署の六十年の少年非行概況 中学生の不良行為激増 (1・26)

○市島町前山名物の標準時計 六十年ぶり時計台新調 (1・26)

○高齢化丹波にショック 増え始めた老人の万引き「今は子供より老人」 (2・2)

○柏原署まとめの昭和六十年中の少年非行 遊び型で低年齢化 親の放任が大きな原因 (2・2)

○氷上町絹山の谷集落で今も続く事始めの行事 モチを食べ酒をくみ交わす準備は男子が中心に (2・6)

○丹南町大山上で柱穴や井戸状遺構 堅穴住居跡二棟も 複合遺跡を確認

(2・9)

○篠山町立町の来迎寺で渡辺寛柔(応挙孫弟子・幕末の郷土画家)の大涅槃画を一般公開 (2・13)

○多紀郡連合青年団が四十周年 盛大に記念事業 桂文珍の落語など (2・16)

○柏原町の土谷正男さん捨女栓抜きを発案 手ごろなみやげ品に厄除け大祭で発売 (2・16)

○「やせられる」に六十万円 「しまった」の後悔も 丹波生活科学センタ―へ相談 (2・16)

○有田喜一氏(元文部大臣)死去 丹波に一時期築く 国政や郷土の振興に尽くす ねばり強い誠実家 (2・13)

○西紀町上板井で古墳前期の水田遺構 丹波で初の出土 (2・23)

○山南町の「十三塚」が国の重要文化財に本決まり (2・23)

○十年続く国領史談会 ふるさとの歴史探る 民俗行事や庶民生活も

(2・23)

○牛乳パックを名刺に ポプラの家人所者に再生作業を (3・2)

○氷上町の西小で三年生以上を対象にファミコンについてアンケート 高学年になるほど熱中し友人関係や心身にも影響 (3・2)

○丹波少年自然の家の六十年年度利用実績延べ五万人を突破 土・日曜もフル回転 (3・6)

○町政三十周年事業で「春日の文化財」発刊 春日町で予約受け付け中 (3・6)

○篠山地方観光協会が募集した「アイデア民芸品」優秀作品は商品化へ (3・9)

○目の見えない人達に光を 県立柏原病院で初の角膜摘出 (3・13)

○篠山町は藩士沢井家の長屋門を町文化財に (3・13)

○県立丹波文化会館で丹波地方の伝統行事をビデオに (3・13)

○市場町上牧北の稲荷神社の初午祭
伝統の“富くじ”に人気 (3・20)

○山南町上久下小校庭から出土した二
宮金次郎像儉約の教えを子らにと同窓
会らが再建 (3・20)

○生田克己元県会議長死去 地方自治
一筋の生涯 氷上郡政界に大きな影響

(3・23)

○市島町竹田の毎年開く尚久同窓会

小学校卒業して六十五年目 百歳目指
し頑張る (3・23)

○生田さん安らかに― 八百人が参列
し告別式 (3・30)

○故有田喜一元文相が郷土の発展に尽
くした功労をたたえ地元(南地区)主催
で追悼会 (3・30)

○丹南初の女性校長誕生 “熱い視線”
浴びて大山小の源光恵さん着任 (4・3)

○篠山さくら祭り(四月五日から二十
日まで) 演能や子ども武者行列など
多彩 (4・6)

○春日町黒井の春日少年柔道クラブ
見事／県大会二連覇 県代表で講道館
(全国大会)へ (4・10)

○強引な訪問販売に用心を 苦情相次
ぎ六十件も (4・10)

○准看護士をめざし准看護高等専修学
校に男性十一人も入学 (4・10)

○篠山歴史美術館の入館者(六十年代)
は十四万人に／ (4・13)

○丹南町で弥生の凹線文土器や扁平片
刃石斧が出土 (4・24)

○氷上郡の高三が自殺 大学進学に悩
む? “突然の死”に衝撃 柏原高校
全校生徒集め報告 (4・24)

○市島町法泉寺で悲願の庫裡が完成
(4・27)

○好評／テレホンサービス 行事催
し物が即座にわかる 氷上町公民館の
「八二一五〇〇〇番」 (4・27)

○中兵庫信用金庫で四億五千万円を不正
流用 前支店長を告訴 内部検査で
事故発覚 (4・27)

○山南町の新縁寺新住職(二十三世住
職須田憲明さん)の誕生と梵鐘つき初
め式 (5・1)

○ふるさと氷上町で発表会 新舞踊
“岩波流”右扇会(会主岩波裕子さん)
熱演に目を見はる (5・1)

○青垣町初代町長小寺逸八氏死去 郡
教育界にも足跡 (5・15)

○四十年ぶりに修学旅行 春日町黒井
小昭和二十一年の卒業生 恩師まじえ
三十人参加 伊勢・志摩・鳥羽一泊二
日 (5・18)

○廃熱利用で暖冷房／ 通産大臣賞に
井上良則氏(春日町黒井出身)(6・1)

○山南町井原のは場整備で白磁や青磁
破片が出土 弥生時代の住居跡か (6・3)

○“古代ムード”満点 山南町井原の
水田で古式にのって赤米を盛大に田
植え祭 (6・12)

○ふるさとを懐しむ／ 大阪氷上郡友
会が総会 (6・12)

○氷上中三十一年卒D組が恩師の還歴を祝って三十年ぶりにクラス会

(6・15)

○柏声会(本庄柏声さん主宰の民踊グループ)のカナダ公演大成功 モチつき実演も好評

(6・22)

○篠山町大芋中遺跡で古墳後期の住居跡など発掘

(6・22)

○青垣町ロイヤルクラブが町内五カ所に間伐材で電話ボックス設置(6・26)

○日本標準時制定百周年記念で子午線をひた走る 青垣―氷上―山南

(7・17)

○円応教五法閣盛大に完成祝賀会

(7・17)

○丹波の最高齢者大田さつさん(百四歳)死去

(7・17)

○山南町下滝郵便局の川代とつり橋スランプ 全国のマニアに大うけ

(7・20)

○各地の川裾祭りにぎわう 氷上町石生は「水分かれ祭り」と名称を変更

山南町梶では演芸大会が人気集める
春日町黒井では練り込みや文化展

(7・31)

○春日町船城仲よし会結成し楽しい老後

(8・3)

○大にぎわいの市島川裾祭り(8・3)

(8・3)

○篠山町福住の水無月祭り 豪華な山車が巡行

(8・3)

○氷上町清住の達身寺 炎暑のなかカヤぶき屋根ふき替え

(8・14)

○アメフトの若きホープ開田英人さん(青垣町出身) 日本一のチームで活躍

(8・21)

○米南オレゴン大で合宿

(8・28)

○丹波の夏まつり各地でにぎわう

(9・7)

○篠山城跡二の丸基礎構造を調査 石垣の刻印びっしり 種類や数は「日本一」

町村合併に尽くす
○石生浄福寺で三十五年ぶりに釣り鐘新調
○利用客に好評NTTひかみテレホンセンター 観光や国鉄、バスなどの時刻案内
○氷上町長野で創価学会の大規模墓地霊園起工式
○ポプラの家運営軌道に乗る(9・25)
○市島町中竹田の西山謙三さん(俳号小鼓子)が「西山小鼓子集」を出版
句作初期から三百句
○村起こしだ ワッショイ!! 各地で秋祭り盛ん
○「快適な生活をしよう」山南町の健康まつり 薬草飲料展示
○青垣町でNHKの兵庫を歩く 丹波布に高源寺 三百四十人が参加
○青垣町で二〇〇一年日本画家選拔展開幕 若手作家の作品一堂に 地方の時代にビッグ企画

○ふるさとと素晴らしい 大阪水上郡

友会が山南町へ里帰りツアー(10・30)

○「二重の喜び」四度目 「望洋(裸

婦像)」と「子牛」柏原町磯尾さん父

子が日展入選 (10・30)

○春日町中山の小橋さん方で秀吉の朱

印状を発見 年貢の二公一民制など布

告 (11・9)

○さあボタン鍋の季節 篠山町のシシ

肉専門店頭にイノシシの姿がズラリ

(11・16)

○青垣二〇〇一年展開幕 五千八百九

十六人が鑑賞 (11・20)

○春日町七日市の城山のふもと 炉端

焼の店築城 (12・4)

○氷上町油利で発掘 平安時代の柱穴

三十個 室町時代のものは焼失を示す

柱の炭 (12・7)

○篠山の山中に他殺体 大阪堺の女性

散弾銃で撃たれる (12・11)

○市島町白豪寺境内に「ぼけよけ地蔵」

建立 (12・18)

○寒い冬でも元氣いっぱい 青垣町内

の三小学校でミソ汁給食 (12・18)

○篠山の殺人事件 尼崎の会社員を逮

捕 別れ話に怒り射殺 (12・28)

○丹波地域の新成人は千三百一人

(12・28)

○六十五歳以上の老人四・八%が痴呆

症状(柏原保健所管内) (12・28)

昭和六十二年一月一日特集号

○丹波も高速時代 近舞線三月に一部

(丹南―福知山間)開通

○北摂・丹波の祭典開催まで一年余

実施へ仕上げる年

○統一地方選挙の年 県議は四月十二

日 町長・町議は四月二十六日に投票

○新春に寄せて

「丹波の祭典を起爆剤に」佐々木良作

氏 (衆議院議員・民社党常任顧問)

「個性的な計画、推進を」梶原清氏

(参議院議員)

「個性あるふるさとづくりを」中西一

郎氏 (参議院議員)

「郷土丹波発展に全力」谷洋一氏

(衆議院議員)

「国を思い丹波を愛す」西山敬次郎氏

(前衆議院議員)

お便り・短信

足立(岡原)敦子さん(柏原町)

北上に参りました五年となりました。

こちらに参ります時、厳しい冬が待ち

かまえているのではと、少々不安もご

ざいました。雪もさほど降りませず、

子供達は初めてスキー等をやり、喜ん

で冬をエンジョイしております。朝晩

もうストーブをたいています。今日この頃

でございます。

(61・10・22)

足立 治氏(青垣町杉谷) お蔭様で

元気で頑張っておりますが、年には勝

ひぐらしに耳をかたむける年となり

(61・10・25)

足立和巳氏（青垣町中佐治） 去る八月三十日に満八十八歳の父をなくし、丹波の実家で葬儀をしました。都会と違って田舎の「しきたり」の「二日洗い」とか「寂し参り」とか色々三十四年振りに出した葬儀で勉強しました。長く都会生活をした者にとっては、都会での葬儀の方が神経を使うこともなく、合理的でよいとつくづく思いました。

(61・10・31)

足立順治氏（氷上町井中） 八十才を過ぎても元気で、どこも悪いところはなく幸せです。湘南地区にいますので地域の市民の皆様のためにと、家庭不用品のリサイクル運動の推進につとめています。市役所や神奈川新聞社、地域婦人会、老人会等のご協力を得て毎日多忙でいます。バイクに乗って東奔西走です。庭いじりもしますが、なかなかいそがしくて。白い「カツラ

チャボ」が優雅に芝生のあちこちに遊んでいます。

(61・10・27)

足立真一氏（青垣町徳畑）・松子さん（氷上町香良） 十年前遠坂より出て来てくれました両親も元気で有馬老人会の皆様にだいにされ、ゲートボール、俳句、農園と楽しく暮しております。三人娘も高校・中学にと元気で通学しております。

(61・10・23)

足立卓己氏（氷上町） しばらく仙台へ単身赴任で行っていましたが、今度千葉へ参りました。（連絡先は横浜市の従来どおりの住所で願います）

(61・10・23)

青木（金川）かよ子さん（春日町）

昨日関東も梅雨入り。うっとうしい雨空を眺めながらお便りをしたためております。先日は思いがけない氷上郷友会よりのお便りと、山ざる十七号をお送りいただきありがとうございます。こちらに来て三年、未だに丹波弁を使い心は常に丹波へ思いをはせてい

る昨今ではございますが、あらためて

この思いを深めています。この便りは

私に來たものですが、主人も同郷です。

青木修市島町出身 (61・6・18)

浅野（松田）加代子さん（山南町）

知人がいない東京に、どうしても自分の生涯の仕事はこれしかないと思いつるさとを後にしてもうすぐ二十年、数年前から郷友会のご本を送付いただき、ふと寂しくなったとき、どんなにこゝろをなごませていただいたことが、年中無休の仕事上親睦会にはどうしても参加できません。でも私の同級生、同窓生もほんの近くで頑張っておられるのを会報の住所欄で知り、ちょっぴり心強く思います。飲食業自営

(61・11・5)

浅香秀之氏（青垣町小倉） はじめて

「山ざる」に接することができ感無量です。「丹波の動き」は今後とも楽しみにしております。

(61・9・17)

芦田（足立）和代さん（氷上町）

故郷から離れて少し寂しく思ったことがありますが、この地域にこんなに多くの同郷の方々がいらっしゃることを嬉しく思いました。(61・6・18)

有田潔司氏(氷上町) 長らく御厚配にあずかりましたが、来る十二月一日宝塚市の方へ引越すこととなりましたのでお届けします。有難うございました。(61・11・7)

有田久代さん(氷上町) 有田喜一生存中は格別のご交誼を頂き深謝致しております。立派な追悼号有難うございました。(61・10・21)

井上英一氏(市島町) 今年六月大阪転動になりました。〒592高石市千代田二―三大日本インキ社宅二―三(61・10・21)

井本義一氏(柏原町) 三十三年余の銀行員生活より私企業の一番頭として九月八日より出向中の身です。日本橋の三越本店、三井信託銀行の隣の「果物の千足屋総本店」を親会社とする所

有ビル(十階建テナント十五社)の管理会社で、取締役管理部長として総務、経理、人事などでも屋で、日々新しい体験に好奇心を燃やしつつ、一步一步悔いのない毎日を積み重ねて参りたいと考えている今日この頃です。

飯田光雄氏(青垣町) 山ざる十七号ありがとうございました。今では一年中で一番待ち遠しい本です。(61・10・18)

池田(森本)訓子さん(春日町野上野) 広い関東の地に大勢の同郷の方々が活躍されているのを知り、大変力づけられました。(61・6・26)

石井 裕氏(柏原町) 東京に来て一年半、氷上郷友会に入っていたのですが、初めての会合で是非出席したいのですが、当日は早くから所用が入っており出席できません。次回は必ず出席させていただきます。年会費はどういう方法で納めさせていただいたらよろしいでし

ようか。(61・10・13)

※ 年会費は現在千円です。郵便振替(東京一―二三―三〇)にてお振込みいただくのが最も簡便です。振替用紙は本誌に同封してありますのでご利用ください。(係)

石田(田中)富佐子さん(氷上町成松) 秋も深まって参りました。せっかくお手紙いただきましたが、残念ながら主人の転動で関東をはなれました。皆様のご多幸をお祈りしております。

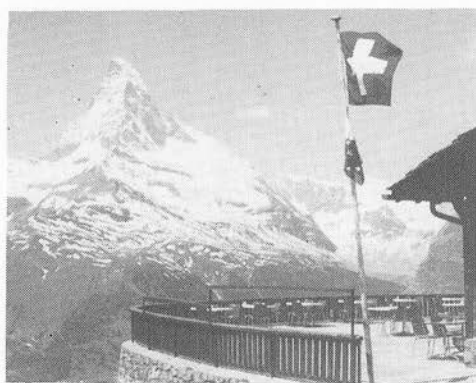
〒665宝塚市逆瀬台一―一―四―八一
一 岩見好晃氏(春日町) 今月大阪に戻りました。〒631奈良市西登美ヶ丘七一〇―一二(☎〇七四二―四五―六六八四 市原(芦田) このゑさん(市島町) 秋も終りを告げ寒さが加わって参りました。親睦会にお誘い頂いて有難うございます。出席させて頂きたい気持はいっぱいでございますが、土地不案

内がさまたげて失礼することになりました。悪しからずご免ください。

(61・10・21)

泉(大野) 睿子さん(柏原町) 今年
はカメラにもこってスイスを撮影して
来ました。ユングフラウヨッホ、アイ
ガー、マッターホルンと雄大な景色。
自分で四ツ切まで伸すのがたのしみで
す。染色もして忙しい毎日を元気で暮
しています。

(61・10・17)



マッターホルン(海拔4,478m)勇姿

植木英吉氏(山南町和田) 井荻郵便
局長は退職し、ただいまは趣味のカト
レヤ栽培に専念しております。

(61・7・2)

植村(善積) 章子さん(春日町)

郷友会の皆様 ますますご健在でご
発展を誌上で拝し、陰ながらお喜び申
しあげております。久しく皆様にお会
いしませんので懐しう存じます。一度
お目にかかれたらどんなに嬉しいでし
ょう。からだの調子はいかがでしょうか、
用心して遠出はいたしません。近所の
散歩ぐらいでまことに退屈な日々です。
おひとりおひとりのお顔を思い浮べて、
なつかしさに涙してしまいます。

(61・10・20)

臼井(余田) 田鶴子さん(市島町)

東京に出て来てもう二十年になりま
す。主人(臼井小五郎 氷上町出身)
は昨年七月から熊本で勤務しておりま
す。(陸上自衛隊北熊本第四二普通連
隊長) 東京勤務になりましたら、二

人で出席させていただきたいと思いま
す。

大江(足立) 範子さん(青垣町)

二人の息子夫婦とは別ですが、三人
の孫もでき時折逢っては楽しい一刻を
すごし、ズッコケ・ファミリー振りを
満喫しております。趣味の踊りと三味
線は老化防止のため細々ながら続けて
います。

(61・11・1)

大城戸(三井) しず代さん(春日町)

はじめて(懇親会に)参加させてい
ただきます。楽しみにしております。

(61・10・16)

大野(若林) すゞ子さん(山南町上滝)

秋もいよいよ深まり、ことしは早く
寒くなったようですが、皆様にはお元
気で活躍のことお慶び申しあげます。
祝寿者の皆様おめでとうございます。

いつまでもお健やかでありますよう
お祈り申し上げます。

(61・10・26)

大竹(足立) 博美さん(青垣町)

この夏やっとマイホームができ引越

いたしました。(※新住所は住所変更欄参照) (61・11・7)

大塚(西浜) 富久子さん(山南町)

丹波を離れて三十年近くになります。

どの記事もなつかしく特に「山鳥先生のこと」は興味深く拝見いたしました。山鳥先生は、わたくしにとって生涯忘れられないたいせつな先生でございます。

(61・6・19)

岡林(荻野) 逸男氏(柏原町)

いつも楽しい集いのご案内いただき有難うございます。今回は次回は出席と思いつながら、いつも近くになると仕事が入り、各界で活躍の皆様のお話を聞くことができず残念に思っています。

(61・10・27)

荻野 勲氏(市島町)

今度天王寺鉄道管理局経理部情報システム室へ転勤いたしましたのでよろしくお願いします。

〒545 大阪市阿倍野区天王寺北一丁目四番二号天王寺鉄道寮 ☎〇六―七一

四―三二〇三

(61・11・3)

荻野吟逸氏(市島町) 長い間お世話

になりましたが、勤めの関係で神戸に住むことになり退会させていただきます。

(61・6・16)

荻野(吉竹) 聡子さん(山南町岡本)

いつもいつも「山ざる」や同窓会のおさそいやらお送りいただきありがたく存じています。なつかしい丹波のかおりもいっしょに送られて来る思いがいたしております。九段会館の近くに荻野が事務所を構えておりますので、週に何回か手伝いに行っております。

(61・10・23)

音無(山本) 太美子さん(春日町黒井)

ご案内状有難うございました。出席したいは山々なのですが、黒井の母百二才で天寿を全うしまして三回忌に当ります。そちらの方に参りますのでやむなく欠席させていただきます。

(61・10・20)

片岡(三品) 恭子さん(山南町)

美しい海と山にめぐまれた横須賀に

住んで十五年余り。横須賀・横浜道路

も完成して、帰郷も便利になりました。この年になってもやはり実家に帰るのが楽しみです、年に二、三回は心ウキウキハンドルを握ります。(61・1・13)

桂 一朗氏(柏原町) 九月より会社

の住所が有楽町から麴町へ変りました。仕事は前と変わりませんが、気分一新です。お立寄りくださいませ。憫ワコー

ル宣伝部 〒102 千代田区麴町一―一 三九―一 一八―一 (61・11・4)

木村(塩谷) つた江さん(市島町岩戸)

山ざる十七号に丹波の動きをくわしく掲載して下さってうれしく拝読させていただきます。わたくしは姉妹が四人氷上郡に嫁ぎ、全員元気に暮しておりますので、年一回は必ず実家に集合し、子供のころの思い出に花を咲かせます。(61・7・8)

親しくして頂いていた大先輩の松山様が亡くなられて以来、こころならずも会長様や郷友会の皆様方にご無

沙汰がちで申し訳なく存じております。

松山様のご逝去なさいました年の秋、夫（木村）が心筋こうそくで突然他界しました。この十一月十一日で満三年経ちました。昨今ようやく一人暮らしにも馴れて参りました。「老人問題研究所」などとおこがましくお年寄りたちの相談などしておりますわたくしが、七十才になり自分の老後の生き方にとまどいました。調布市の「ブッククラブ」に入会し、同人誌「たきおん」の仲間でよい友人に会い、何とか自分史を書く^{○○○}と七十の手習いをはじめました。「たきおん」をご希望の方は左記へお電話くださいませ。☎〇三—三〇〇—六八九五（61・10・18）

喜田綾子さん（氷上町小野） 今年こそは（懇親会に出席しよう）と思っていましたが、また結婚式で播州まで出かけることになりました。母が京都にいますので、月に一度は京都までは出かけるのですが……。

久米 裕氏（佐治、黒井、柏原）

父が昭和二年（八年まで佐治の尋常高等小学校の校長、九年（十年と黒井小の校長。わたくしは昭和七年（十二年と柏中在学。昭和十年（十一年は中央団（柏原下宿）。今年八月四日弟二人と佐治、黒井小学校を訪ねて来ました。柏原の学校へは昨年訪れて来ました。入舟山も昔のまゝ。校庭の楠もそのまゝなつかしく眺めて来ました。

（61・10・16）

黒田（足立）加代子さん（青垣町）

都内に知り合いがございませんので、近くへお出の節は同級生に限らず是非ご連絡がいただければと思います。

（61・10・11）

小谷正雄氏（柏原町） 会長とごいっ

しょに八十才を祝っていたきますことを、有難く感謝しております。

（61・11・2）

小林武治氏（春日町） 私事昨年晩秋入院加療、年末退院、元日から出勤が

んばっております。理事長は明年四月までの任期ですが、あと一期やってほしいとのこと。二年位でやめることを認めてもらってしかたなしにやります。財団法人私学研修福祉会の理事長は再選され六十三年九月十九日まで勤めます。私大連盟の方は来年二月改選、やめたいのですがこれも或いはもう一期やるかも知れません。国学院大学院友会長は来年改選、会長八年やりましたので、是非やめたいと思っています。仕事を減らして頑張りたいものです。

十月二十九日西崎さんの会にはお邪魔します。（61・10・18）

小林 宏氏 地理的に出席できませんので（青森市在住）今のところ会員でなくしてください。そのうち転居すれば入会いたします。

※ 関東氷上郷友会のサーブス・エリア

は新潟県・長野県・静岡県を結ぶ線以东以北としております。決して入会は強制するものではありませんが、この

地域に在住の水上市出身あるいは由縁のある方々に、もれなく〃山ざる〃誌や、総会のお便りを差しあげ、故郷をしのんだり、近在の郷友の活躍をうかがい知るよすがとしていただきたく存じております。今後ともよろしくご協力ください。

(係)

後藤豊次氏(山南町井原) 小生八月十五日腰痛のため身体の平衡を失い、早朝床上にて転び左膝頭で右手首を激突し骨折しました。爾来外科医に通院治療を受けておりました。腰痛も非常に激しく歩行も困難のため、御会は出席不能と思ひ、机の引出しへ(このはがきを)しまい込んでおきました。ようやく筆をとる程度に回復しましたので、他への書責を果すべく延引ながら通知申します。(61・11・11)

近藤田治氏(春日町東中) 昨年の盆には久しぶりに長男夫婦と孫三人を連れて、車で春日町の墓参りをし、従兄弟四人、甥二人等と昔語りをしてなつ

かしい国領温泉に泊ってきました。帰るたびに変貌する郷里の姿に驚きます。

(61・7・4)

坂口(荻野) 充子さん(水上町成松)

この会のことは二年程前に知ったばかりで、ぜひとも出席(懇親会に)したいのですが、都合がつかず今回は欠席させていただきます。(61・10・27)

坂本重雄氏(柏原町) 第十七号の特集、大変興味ぶかく読ませて頂きました。若手の会員の文章が少ないのは残念です。(61・8・5)

桜井(荻野) 美枝子さん(水上町成松)

わたくしも郷里のなつかしい年令になってまいりました。山ざるを拝見して丹波の山河を思い浮べています。

田螺和えかめばふるさと目のうちに
今後ともよろしく願ひします。

(61・6・23)

清水正男氏(山南町谷川) 十日ばかり丹波の方に帰っておりましたのでご返事が遅れました。初めて(懇親会)

に出席させていただきます。

(61・11・2)

下中昭男氏(山南町、吹田市在住)

東京を離れて丸四年になりますが、月に一、二回は上京しているせいか、子供達が皆在京のせいか、東京の方が自分の居所のように錯覚を感じております。(61・10・16)

菅野(土元) きぬゑさん(柏原町本町)

長い間東京に住んでおりますが、会に出かける勇気がなく、だれかお友達でもあればと思うばかりで残念です。

(61・10・17)

瀬々(中井) 妙子さん(柏原町)

去る八月七日同窓会をかねて柏原へ参りました。卒業して三十四年も過ぎ去ったなんて信じられないくらい、先生方も健在でした。そして九月三日にぬかるみに足をとられ骨折同様のひびで一ヶ月余の休養。やはり年をわきまえなきや。(61・10・27)

田中(柳瀬川) 貴美子さん(山南町谷

川）東京に来て二十八年近く、このような誌や会のあることを知り、懐かしさでいっぱいです。（61・6・8）

田中正博氏（市島町竹田） どうしていつもお昼に会があるのででしょうか。

夕方六時半とか七時にやっていただければ出席者も増えると思いますが（土曜日仕事の方もまだまだ多いと思います）。

（61・10・14）

田中（門田）芳子さん（山南町梶）

その名もなつかしい丹波の国を思い出させる“山ざる”を二部もお送り下さいまして誠にありがとうございます。みちのくに住むわたくしにとりましては大きなめぐりめでございます。一言一句も残さず拝見させていただきますたいと楽しみに致しております。

（61・6・12）

先日篠山町で出身で西宮市にご在住の旧友夫妻を迎え、十和田湖から八甲田山方面に、みちのくの秋を案内し、二泊三日の旅をして参りました。一週

間共に過しまして丹波のなまり丹波の方言に接し、ほんとうになつかしくわたしの口からも忘れかけていた方言がとび出したりして、すっかり丹波の人になってしまいました。自分の生れ育った国の言葉ほどなつかしいものはない、それはまるで母のふところのように温かいものでございます。

（61・10・20）

高見幹雄氏（市島町） 東京に出て来て二十一年、その間五十七年十月から二年間青森県庁にお世話になりましたが、現在は厚生省に勤務中でございます。いま厚生省では人生八十年時代といわれる未知の世界を迎えるに当たって、だれもが生甲斐を持って暮らすことのできる活力ある福祉社会を作りあげていくことが、緊急の課題となっているところでございます。このような課題に応えるため、老人保健法の改正案が今国会に提出されていることもあって、連日連夜その対応におわれている毎日

です。（61・10・28）

竹内 健氏（氷上町方町） 昨年山ざる編集委員の足立源ちゃんの紹介で会合（九段会館）に初参加しましたが、四十数年振りの旧友に遭うことができうれしかった。丹波を出て四十数年、故郷のこと遺憾ながら全くうとくなり、目下山ざるに意見を述べる資格なし。源ちゃん（柏中で一期先輩）が編集委員ならこの世に酒がなくならない限り、任せておいて大丈夫と思っています。

（61・6・11）

竹中（森田）紀代子さん（山南町）

長い海外生活だったので、同級生などの消息もわかりませんでした、なつかしく（山ざるを）見させていただきました。（61・6・9）

谷 敬三氏（柏原町） 八十五年八月

より約三年の予定で中近東カタール国に来ています。

勤務（出向）先

QATAR STEEL Co., LTD

住所 QATAR STEEL Co., LTD

P.O. BOX 50090 Umm Said

QATAR

(61・11・26)

※ このお便りはカタールから届きました。
た。

(係)

谷垣 尚氏 (柏原町) 昨年北九州市

より横須賀市の古巣へ帰りました。勤務先変更 城水鉄工所を退職し(五月末)、愛知産業㈱に勤務(六月より)

☎ 四四七―〇二〇一 (61・6・21)

辻田 昌氏 (氷上町石生) 福島県在住の兵庫県人会事務局をやっておりますが、現在氷上郡出身者は三名です。

郷友会について話しておきます。

(61・7・11)

土田直吉氏 (青垣町) 以前五回出席

またゴルフも三回参加させて頂き、旧友と会い懐かしく思っておりますが、一時体調をくずししばらく欠席しております。

いつも逗子の小谷正巳君と同道しておりますのに、この三月思わ

ぬ病いで療養わずか三ヶ月、六月二十八日不帰の客となり残念でなりません。自分の体調も回復しましたので、そのうち出席させて頂きたく、いまから楽しみにしています。

(61・10・22)

出町 (粕谷) 京子さん (柏原町)

九十周年並びに祝寿の方々おめでとうございます。わたくしの父も生きていたら八十才なのに残念です。十一月八日は大田原市で舞踊会を開いています。

(61・10・18)

徳田八郎衛氏 (柏原町母坪) 郷里出身の各界での活躍を拝見するのは楽しいですが、「記事」では固くなりますし、「本人執筆」では手前ミソのよう

になりますので、なるだけクラス・メイトに書いていただき、かつ文中に郷里での「主人公の悪童ぶり」等も添えていただければ興味がそゝられるのではないでしょう。

(61・9・16)

友井洋介氏 (山南町) 東京に転勤して来てからはや四年になります。妻も

丹南町出身ですので(山ざるを)楽しく読ませていただきました。今後も郷里に関するニュース等期待しております。

(61・6・18)

豊田 薫氏 (神戸市) 旧制柏原中学校同級の有田喜一君も逝き、淋しくなりました。郷友会の皆様のご健勝を祈ります。

(61・10・15)

中西 (西田) 育代さん (春日町黒井)

東京生活も二十三年目を迎えました。山ざるを届けていただき郷友会があるのはじめて知りました。丹波の近況、名簿の中になつかしい知人の名を見つけ何度も何度も拝見いたしました。

(61・6・13)

野村節三氏 (山南町) 三陸の山々も紅葉し、日増しに秋が深まって参りました。大学(北里大学水産学部)での

仕事は、水産微生物学で、魚類の病原菌を研究しています。

(61・11・8)

畑 雅樹氏 (春日町多利) 国鉄上野第一運転所(北区上中里)所長をして

おります。現在民営化へ向って準備にがんばっております。なお本来の仕事は東北・上越新幹線の車両管理です。上野駅から出発する下り列車はわたくしの所で管理しています。来年は国鉄は会社となります。(61・7・14)

日置孝彦氏(水上町御油) 鎌倉時代の文化を今に伝える神奈川県立金沢文庫は、全国に類例のない博物館です。勤務して十八年になりますが、歴史・文化の解明は遅々として進みません。施設も五十年を経て老朽化し、二十一世紀を展望した県立金沢文庫のあるべき姿を目指して、昭和六十五年十月の開館に向け改築に着手したので、研究資料調査どころではありません。(61・7・4)

広瀬(森下)明美さん(柏原町)
このたび主人のソウル支店勤務のため次の住所へ移ることになりました。

〒140 Shingdong-A Apt, 6-909,
214-21, Seobinggo-Dong, Yong

San-ku, Seoul, Korea

広瀬 典氏(春日町松森) 今年四月より東京都練馬高等保育学院で専任講師をしております。(61・10・30)

藤井(小西)裕子さん(春日町栢野) 名簿欄を拝見しますとき、やはり一番に生れ年と出身地を見せていただきますので、わたくしのも記させていただきます。昭和二十五年生れ。(61・6・26)

本部 文さん 夫本部真之事、長い間の療養生活をしておりましたが、その甲斐なく去る五月一日永眠いたしました。いつも「山ざる」誌楽しみに拝見しておりました。ありがとうございました。亡き夫に代って厚く御礼申しあげます。(61・6・9)

藤原(橋間)ひさ子さん(山南町)
まだ子供が小さいため遠くまでは家を空けられません。でもまた会へ出席させていただけの日もそう遠くないと存じます。そのときをこゝろ待ちにい

しております。(61・10・28)

前田和秀氏(柏原町) 十一月一日付で自衛隊中央病院看護学院長より防衛医科大学校学生部長に転勤となりました。なおわたくしの母前田コタケ(旧姓竹安、明治三十八年二月十一日生)も元気で、わたくしどもと暮しておりますが、足が弱って出歩けません。山ざるを読んではなつかしがつております。ときには電話をかけたariしてご迷惑をおかけしているようです。(61・10・22)

牧野(竹村)礼子さん(春日町)

今回送られて来た山ざるの本に父の顔(柏高商業科竹村正雄)を見つけ、さっそく父のもとへ送りました。父も「なかなかいい本を出しているなあ」とよろこんでおりました。また次号を楽しみに待っています。(61・6・27)
松山康裕氏(春日町東中)・尚子(田野)さん(水上町) 今春の転勤で熊本より東京勤務となりました。今後と

もよろしく。日清食品㈱マーケティング室勤務です。(61・6・19)

最上次郎氏(美蘘郡吉川町) 氷上郡出身者でないため、また中学時代のクラスメートも京阪神地方に集まっていることもあって、(会への出席)無精しています。小生も今年満八十才を迎えました。年の割には元気でいます。伴仲信次様には郷友会とは全く関係ない筋でお目にかかるなど不思議なご縁です。(61・10・15)

このたびは可部美智子作の陶彫をお贈りいただき厚く御礼申しあげます。郷友会にはご無沙汰をしています、不思議な縁で氷上郡とは全然別なルートから知り合うようになりましたとは。

(61・12・24)

森田淳二郎氏(篠山町)・まさ子(植木)さん(氷上町成松) 氷上の女房に多紀の亭主。おたがい「おかしなことというてや」などといいかわしませんが、おくに言葉というより生れ土地の

言葉をやとりしています。こういう夫婦を幾組か集めて座談会を開いてはいかがでしょう。おもしろいことになりませ。(61・10・17)

安田 功氏(春日町黒井) (山本) 総体的には御年配向きが多いように見受けれますが、若い人にも向くような記事があればと思います。(61・7・1) 安富(山本) 恵子さん(柏原町)

子供が大きくなったら是非いろいろな催しにうかがおうと思っておりますが、実はこの三月、下関の梅光女学院大学に主人が赴任しまして引越しました。わたくしも短大の方の非常勤講師を勤めております。離れてしましますと急に郷友会のことになつかしくありません。貴会の繁栄を祈りつつ…。

〒751下関市生野町二一九一
☎〇八三二一五四一〇三四

(61・10・27)

山内(細見)明子さん(春日町)
十二月初めごろに香港に行くことに

なりました。香港在住の柏原高校出身者の消息など知る方法がありますか。

FLATC-1 4TH FLOOR
WINFIELD B.L.D No 5

HAPPY VALLEY HONG KONG.

(61・11・4)

山口敏之氏(氷上町) こちらに来てから早や七年が過ぎました。久しぶりの丹波の香りがなつかしく、もっと早く(郷友会を)知っていればと思いましたが。いろいろ会合があれば教えてください。

(61・6・9)

山田和也氏(山南町太田) 十月初旬にここ横須賀に引越しました。こちらは都心よりも二、三度暖かく、すごしやすいところです。(61・10・23)

山田(上田)淑子さん(柏原町)

出席させていただき故郷のだからとお目にかゝれたら、どんなにうれいでしょう。でもなんだか気おくれがして出かける勇気がありません。五十年昔を語れる人があったらと、同窓会も

ないクラス会もないわたしの憐れな夢です。柏原自動車の初代女車掌です。

(61・10・18)

山本権一氏(柏原町) 在京中はたい

へんお世話になりました。七月初めに

奈良の方に变りました。〒631奈良市東

登美ヶ丘四―二〇二〇―三八五

☎〇七四二―四五―六七八二

(61・10・18)

山本(西垣)紀子さん(山南町太田)

もう五年以上もふるさとの土を踏ん

でないわたくしにとりましては「山ざ

る」など最高に素晴らしく懐かしく有

難い読みものです。毎年懇親会が開か

れることだけでも、これまたうれし

いことなのです。都合により出席できる

ときはかりではありませんが「会」そ

のものが誇りであり、こゝろの支えと

なっております。

(61・10・17)

余田士郎氏 有田さんの思い出の関係

記事をはんとうになつかしく読ませて

いただきました。小生昭和三十一年に

仲人をしていただき、以後大臣になられるたびにパーティに呼んでいただきました。もちろん葬儀にも参列させていただきました。でも知らないことが多く、改めて感じ入っております。

(61・6・16)

余田 進氏(市島町中竹田) 今春長

男大学卒業し、九月から二年間フラン

スに留学します。長女は一年生です。

いつまでたっても楽にしてくれません

わ!! 眼鏡二ヶでがんばっています。

(61・6・16)

吉田勇司氏(市島町) 十一月三日、

六日ドイツのケルンで研修を受けます。

出発は十月二十六日。アンカレッジ、

ハンブルグ、パリの友達に会って来る

予定です。最近テニスを始めました。

半年前からは上の娘と幼稚園で同じク

ラスの男の子二人を連れて、早朝マラ

ソンを毎日続けています。今年の夏は

同じマンションの6家族で長野へキャ

ンプにも行きました。(61・10・15)

若森敏郎氏(山南町北太田) 還暦に入ってますます元気。今後とも海外技術協力の仕事を続けて行くつもりです。なので、なにとぞ皆様のご協力をお願い申し上げます。(61・10・18)

渡辺(荻田)和代さん(京都市在住)

さっそく「山ざる」をお送りいただき

有難うございました。友人勢川武彦さ

んから会や会報誌のお話しをうかがい、

楽しみにしておりました。勢川さん推

せんの山鳥先生のことを書かれた文も

もちろんですが、生前父(荻田庄五郎)

がよく話していた方々のお名前が、こ

こかしこに見え、ご活躍の様子と思

いますと同時に、父への想いもなつか

く、こころ暖かく拝見しております。

ほんとうにありがとうございます。

(61・7・7)

渡辺(荒木)政子さん(氷上町)

郷友会「山ざる」により遠い郷里を

身近に見聞できることをたいへんうれ

しく思っております。現在はまだ子育

てに追われていますが、いつの日か親睦会でなつかしい人々の笑顔に会えることを楽しみに…… (61・10・16)

塩見五男氏(青垣町東芦田) 去る八月三十日(土)港区六本木の中華料理店ろざんにおいて、昭和三十二年柏原高校卒業者のうち、関東地区に在住している者の同窓会を開催しましたので報告します。当日は残暑きびしい日でしたが、このような会は卒業以来初めてでしたので、女性の出席者六名(総出席者十九名)を含めて思い出話に楽しい一刻を過ごし、次回の再会を約して散会しました。この会は年齢的にも社会の中堅として活躍しておられる方が多く、出席できなかった方の近況によりますと、多くは出張等のためやむなく欠席で、次回は是非出席したいとの便りが多かったようです。これを機会に柏陵同窓会の環が広がればと願っております。因みに当日の出席者は次の通りでした。(敬称略)

浅香進、兼松(安達)千恵子、滝浦(池畑)佐代子、片岡(井上)久美子、足立圭造、臼井凱也、小口(北川)貢子、木守昭三、辻(小谷)英子、吉成(佐々木)千鶴子、高田守、徳田八郎衛、灰野悦昭、林孝男、日置孝彦、矢尾鉄太郎、山中秀雄、依藤俊平、塩見五夫。

なお八月三十日現在の関東在住同学年生は四十八名(留守宅を含む)です。

(61・9・1)
この度急拠台北に転任が決定し、二月上旬に赴任することになりました。このため五年ぶり、この正月に帰郷いたしましたところ、福知山線はオール電化で大阪からの所要時間も随分短縮され、また水上郡も着々と発展しているのを見て誠に心強く感じました。赴任期間は三年間ですので、帰国しましたらまた会にも出席させていただきたいと考えております。なお、留守宅は現在のままです。

計 報

謹んで

ご冥福をお祈り申し上げます

植田恭代(井口はつゑ)殿(春日町)

61・6・28

小川 敏殿(市島町)

60・

織田信和殿(柏原町)

61・9・24

小谷正己殿(青垣町稲土)

61・6・28

小西 保殿(柏原町)

61・8・15

塚口 稔殿(水上町)

50・

西川政一殿(市島町)

61・6・3

本部真之殿(京都府)

61・5・1

村上大憲殿(水上町水上)

60・10・30

渡辺金三殿(水上町朝坂)

61・11・

小林武治殿(水上町)

62・4・12

松尾源三殿(水上町)

62・5・9



新規登録会員 (敬称略)

足立一郎 (青垣町) 〒227 横浜市緑区元
石川町三六六二
足立省一郎 (昭5東京都) 〒251 藤沢市
藤ヶ岡二二一九 (順治氏長男)
☎〇四六六二二二一六一二
青木 修 (昭22市島町) 〒351 和光市本
町31シーアイハイツ和光一六一六〇
九 ☎〇四八四一六四一三八二八
伊藤忠商事 ☎四九七一三四四四
青木正文 (市島町) 〒227 横浜市緑区あ
ざみ野三一三一五一五〇四
日本楽器 ☎五七二一三一一一
赤松麻裕美 〒176 練馬区練馬三一〇
一八兵庫相互銀行豊島園寮 ☎九九二
一六七七三 兵庫相互銀行新宿支店
☎三六三一八七二五
池上雄三 (昭26氷上町石生) 〒228 相模

原市上鶴間一六五二町田ハイツA二
一三 ☎〇四二七一四二一三〇二八
N T T 厚木電気通信研究所

池田 (子守) 宏子 (昭18柏原町) 〒236

横浜市金沢区釜利谷町一九一七一
七六 ☎〇四五一七八四一〇六四九

石井 裕 (昭13柏原町) 〒104 中央区日
本橋堀留町二一一一丸金俣内

臼井小五郎 (昭16氷上町) 〒275 習志野
市秋津二一一四一五〇二 ☎〇四七

四一五三八八五七 陸上自衛隊北
熊本第四二普通連隊連隊長 ☎〇九六
一三四四一三六六

北野 (池田) 広美 〒214 川崎市多摩区
菅仙谷二一九一五仙谷ハイツ二

〇七 ☎〇四四一九四四一六二七九
小竹 (藤原) 房子 (氷上町) 〒248 鎌倉

市大町三一五一四

☎〇四六七一二五一四八二二
小前 (矢野) 美也子 〒227 横浜市緑区

美しが丘一六一五コルビル五〇

一

酒井 (三村) 智美 (昭32氷上町) 〒950
新潟市姥ヶ山六一一一一5桜ヶ丘ハ
イツ三〇四

☎〇二五二一八六一〇八二二

清水和敏 (昭23柏原町) 〒125 葛飾区亀
有五一五五一六 ☎六二〇一五〇九

丸金俣 ☎六六二一〇六四一

鈴木 (荻野) 明美 (市島町) 〒277 千葉

県南葛飾郡沼南町大津ヶ丘三一四八
一〇 ☎〇四七一〇九二一〇一五三

塚口恭一 (氷上町) 〒300 11茨城県稲

敷郡阿見町大字荒川本郷一三二七

一四 ☎〇二九八一四三一五九三

土田 (足立) 千代の (大10青垣町)

〒142 品川区荏原三一一一二一

☎七八三一四〇〇四

中村 (芦田) 美子 (青垣町) 〒105 港区

芝二一六一〇

永井 (荻野) 恵利子 〒223 横浜市港北

区綱島西四一六一一〇ガーデンハ
イツB二〇一

☎〇四五一五四四一八四五

野沢(足立)繁子(昭19青垣町) ㊦ 271

松戸市高塚新田一六〇一五八

☎〇四七三一九一〇五八〇

樋口(久保)順子(昭20山南町)

㊦ 244 横浜市戸塚区南舞岡二一三一三

☎〇四五一八二一七二一

藤原直樹(昭35山南町大河) ㊦ 227 横浜

市緑区松風台二一七岡三松風寮

岡三証券渋谷支店

細木(河村)敦子(柏原町石田)

㊦ 347 加須市東栄町一三三

☎〇四八〇一六二一三九八〇

松山康裕(昭25春日町東中)・尚子(田

野、昭29氷上町) ㊦ 223 横浜市港北区

すみれが丘三〇一栗原マンショ

ン二〇七☎〇四五一五九二一〇四五五

村上悟悠(昭9東京) ㊦ 143 大田区池上

七一二一〇☎七五一二〇三五

曹禅寺

森本康成(市島町) ㊦ 156 世田谷区桜丘

二一八一〇一〇一 日本通運

☎五八四一七一一

柳瀬川隆志(昭10山南町) ㊦ 131 墨田区

東向島五一四一四☎六一九一〇八

〇〇 憐英和社長

☎二九四一二〇三〇

山内(白井)艶子(昭27春日町)

㊦ 247 横浜市戸塚区笠間町一五五五

一第三大船パークタウンG三一

☎〇四五一八九三〇八九〇

山内敏行(山南町) ㊦ 244 横浜市栄区飯

島町二三六〇一ニ☎〇四五一八九

四一三九五 日本石油精製根岸精

油所☎〇四五一七五一三六一

吉田喜久夫 ㊦ 270 13 千葉県印旛郡白

井町堀込二一四二一〇二

☎〇四七一九一五二四九

(柏原高校昭三七年卒業)



住所(地番、自宅電話番号を含む)、勤務先(同

電話番号)変更、但し、

新住所、新勤務先のみ記

載(17号名簿記載もれ分を含む)

足立 要 ㊦ 211 川崎市中原区新城一

九一七☎〇四四一七六六三二七二

つるや洋装店☎〇四四一七六六一七

六三〇

足立圭造 日通航空東京航空支店

☎七七七一五二二一

足立紘八郎 帝國産業(東京支店

☎五四二一八七六一

足立真一 憐ウイング

☎〇四四一七三三八七〇二

足立佳之 天幸倉庫

☎〇四六二二八二二四二一

足立卓巳 憐ニユ東京フーズ

☎〇四三六一七四一〇三八二

足立武夫 日本鋼管㈱

☎〇四五―三五五―一一一

足立忠三 団体役員

☎五四三―四八一―

足立(臼井)千佳子 〒160新宿区新宿

六―二―四―四〇一

足立 彊 ☎〇四八四―三一―五一七

九 つるや洋装店 ☎〇四八四―四

一―五一七九

足立(山本)眸 〒112文京区水道二―

五―一―四〇五 ☎八一六―六八一三

足立 勝(水上町) 〒354埼玉県入間

郡大井町鶴ヶ岡四―一二―一二

旭化成工業 ☎五〇七―二二二〇

足立 勝(青垣町) 松下電器産業㈱

☎四三四―七九二―三

足立三義 日本航空㈱ ☎四五六―七

一六〇

足立幸仁 〒336浦和市田島八―一六―

一五 鍊志寮

足立由宏 日本電気㈱ ☎〇四二三―六

四―一一―一内線三二四九

足立(藤本)邦子 三鷹市立東台小学

校 ☎〇四二二―四七―五七六七

足立良作 吉原製油市川社宅 ☎〇四

七三一―二六―九四四八 吉原製油㈱

東京支店 ☎五九一―九二七―

赤井正洋 三菱信託銀行 ☎四〇七―

三六八―

浅香 進 ☎〇四五―三二―三九三

一 西鉄航空 ☎七四七―〇七三一

浅香寿一 新潟三洋電子㈱ ☎〇二五

八―八三―三四三四

浅香(竹岡)秀之 〒336浦和市原山二

一三〇―一〇 カイメイ㈱ ☎七九

八―三〇―一

浅野(松田)加代子 ☎〇四八七―二

五―四四八五 飲食業自営 ☎〇四

八九―六六―八五三九

芦田正子(淑子) ☎〇二六二―二八

一八四七四

新川和博 都立農産高等学校校長

☎六〇二―二八六五

井上悦三朗 伊藤忠燃料㈱ ☎五八四

一八六一―

井本義一(桧)千屋興業 ☎二四一―

一一八八

伊地知(平岩)康二 渡辺紙工業㈱

☎八六一―二三三―

伊比敏郎 動燃事業団東海事業所

☎〇二九二―八二―一一一

飯田光雄 ☎〇四三四―三二―二二八

〇

生田清弘 ☎四一五―一八九三 新明

和工業㈱ ☎二四五―六六四六

池上忠志 第一生命保険相互会社

☎二一六―一二一―

池上亘泰 日本鋼管㈱ ☎二二二―七

一一一

池田(森本)訓子 ☎七〇五―三七四八

池田達人 〒353志木市幸町三―二〇―

八 ☎〇四八四―七三―五八七二

第一商事 ☎〇四八四―七三―二五

六四

石井(吉積)孝子 中央興医会㈱薬剤

師 ☎七〇二―〇一六―

石井 弘 〒371前橋市下細井町六三五

一四〇〇二七二一三一〇九九二五

塩野義製薬(株)前橋分室 〇〇二七二

一四二四二九一

石川美代子 松井製作所 〇九三七一

八六〇一

石倉軍二 〒110台東区入谷一四一三

一五〇二

石倉良介 ツバコー横浜販売(株)

〇四五一三一〇七七六五

石田吉郎 〇四六六八二〇二一〇

磯尾順江 〒153目黒区目黒一〇二一

一〇二〇七

岩曾(細見)豊明 赴任先での住所

〒658神戸市東灘区住吉宮町五一

一四 〇〇七八八四二一〇八二一

岩槻邦男 東京大学理学部 〇八二四

一六二二五

上鳴一晃 住友スリーエム 〇七〇九

一八一

上田 脩 〒112文京区小石川五一七

上田欣洋 〒250小田原市成田七二日立

東成田寮 〇四六五一三六一六九四

四 日立コンピュータ機器(株) 〇四

六五一四八二五二二

上田三四二 清瀬上宮病院

〇四二四一九三一六一一

上野重喜 〒233横浜港区港南台三

一七二二 〇四五〇八三二一七

三三一 NHK文化センター 〇四七

五一一五

臼井三訓 〒185国分寺市南町二一八

六ライオンズマンション五〇二

〇四二三二二二五九九〇 フジ

タ工業(株)海外事業本部 〇四〇二一

九一一

打田輝一 サッポロビール(株) 〇五七

二一六一七〇

梅津嘉市 〇五四一六一六五一八

江間時彦 〇三八八七七四一 日本

製薬団体連合会 〇二七〇一〇五八一

小笠勝啓 〒232横浜南区永田山王台

五一三三七一

尾松祥子 〇四七一〇九一八二八三

大木健次 クボタ鉄工(株)市川工場

〇四七三二二八〇一七一

大竹(足立)博美 〒277柏市宿連寺二

三一五 〇四七一〇三三〇七八七

大槻作次郎 オーバル機器工業(株)横浜

事業所 〇四五〇七八五〇七二四二

大西康雄 〒111台東区駒形一〇二一

一〇一八〇六 〇八四五五二〇八

(株)タツヤ 〇六二二一七一〇一

大野良夫 〇二八〇一九二一八三五

岡 博 (株)IMAGICA 〇四四

三一三八一

岡田一男 〒658神戸市東灘区岡本七一

一三一六 〇七七八一四一一二

二二二

岡田(荻野)昌子 都婦人情報センタ

一相談室 〇二三五一一一五〇

荻野正平 日本新薬(株) 〇二四一一二

一五一

荻野 勉 ニチレイ(株)春日工場 〇

五二〇九一六三一

荻野正規 日立製作所横浜工場副技師

長 〇四五―八六四―五一〇〇

奥井 廣 〒136 江東区大島七―一四―

一―五一二 〇六三六―一五二七

音無太美子 〒331(郵便番号のみ変更)

加賀山次郎 日本鋼管(株)経営企画部

〇二二七―一

加藤信太郎 日本ビ―シ―ジ―製造(株)

〇二六五―九〇三一

柿原嘉直 大同鋼板(株) 〇二七九―〇

七五一

桂 一朗 〒227 横浜市緑区つつじヶ丘

三六―四―二―三〇六 (株)ワコール

東京宣伝部 〇二三九―一―八一

門山(田中)寿子 〒232 横浜市南区日

限山一―二―一六 〇四五―八四

五―四〇九三

金城(竹安)百代 住友生命 〇三四六

一〇八五四

木呂場(安田)明子 〇四七四―五

四―八三九二 田坂鉄工建設(株)東京

支店 〇四四七―一―八一

岸部正巳 〒190―12 武蔵村山市三ツ藤

一―一〇三一六 都多摩食肉衛生検

査所 〇四二五―二四―五六七四

岸本真輔 日本ボディファッション協

会 〇八六一―五七九八

北野参則 〒214 崎市多摩区菅仙谷二

一―九―二五仙谷ハイツ二〇七

監査法人サンワ事務所 〇四三八―二

四六八

北村(大野)貞子 〒252 綾瀬市小園南

一―六一―

久保春雄 〒314―03 茨城県稲敷郡阿見

町中央一―一―一―一〇二 〇二

九八―八七―七八四二 (株)茨城環境

技術センター 〇二九八―八七―一

〇一七

黒田(足立)加代子 〒167 杉並区西荻

南四―七―一三

小竹政孝 〇四六七―二五―四八一

二 日揮(株) 〇四五―七―二―一

一一

小中克巳 秋田大学 〇一八八―三

三一五二六一

小島晴喜 〒168 杉並区宮前一―一六―

二三宮前ロイアルハイツ一〇五

〇三三四―五五〇五 第一勧業銀行

本店業務本部 〇五九六―二二九三

小森 敏 〒192―02 稲城市大丸五三六

一五―二―二〇一

小山(篠井)美江子 〇四五―九八

三一七五二七

小山元和 〒270 松戸市幸谷六四七

〇四七三―四五―六六〇八

古倉克実 日本構造(株)社長 〇四七

四―六七―七二三一

児玉安正 三和銀行 〇二一―一三一

一一

近藤勇夫 〇二六八―一九五七

近藤 勇 〇四七三―二六―一九三一

近藤俊明 〒272―01 浦和市堀江一―二

九―三一谷尾莊一〇六

近藤寿一 ホイヤ(株)

近藤善昭 〒981―31 泉市南光台南五―

二六―三三 〇二二―二三三―九

三一七 大東京海上火災保険(株)仙台

東支社 〇二二―二三九―六二〇―

斎藤文子 〒238―02三浦市三崎町字諸

磯一五〇〇油壺エデンの園六号館六

五〇八 〇四六八―八九―二八二〇

坂上五朗 ホンダ販売ムサシノ(株)

〇四二二―四九―九二三一

坂木正幸 〒361行田市富士見町二―

四―一九理久荘

酒井 昇 〒950新潟市姥ヶ山六―一―

一五桜ヶ丘ハイツ三〇四

〇二五二―八六―〇八三二

デサント新潟営業所 〇二五二―八

三一三一二

笹倉 強 城北学園埼玉高等学校

〇四九二―三五―三二二二

笹倉良正 東洋ゴム工業(株) 〇四〇四―

一二五一

神 康幸 〒353志木市本町六―四―一

ハサニーハイツII二〇―一 〇四八四

一七三―八八二九 (株)CBSソニ―

出版 〇二六六―五八七八

杉上崇志 〒339岩槻市木曾良二―八八

〇四八七―九八―三〇〇七 マガ

ジンハウス 〇五四五―七一三八

杉本啓助 〇三六五―二四六一 新日

本製鉄(株)人事部 〇二四二―四一―一

内線六〇一九

鈴木大助 〒180武蔵野市吉祥寺本町二

一五―一二 〇四二二―二二―一

六三一

鈴木(塩見)千世 〒270―01市川市本

塩二二―一四コスモ行徳二〇五

財団法人好仁会薬局 〇八一―二―四〇

八五

鈴木智丈 〒432浜松市鴨江一―一八―

一―コーポスズキ1F 〇五三三―

五四―一〇四一

勢川武彦 (株)商船三井 〇五八四―五

一一一

勢志公一 〒222横浜市港北区大豆戸町

八〇三―二大倉山ハイム七―一〇五

田中憲雄 野村証券(株) 〇二一五―〇

一三五

田原敏男 旭タンカー(株)営業二部

〇五〇―一―一七九一

田村(大西)良子 〒190―11西多摩郡

羽村町緑ヶ丘二―一七―一四 〇四

二五―七九―〇〇八 ヤマハ音楽

教室 〇四二七―七三―三二六五

高田(和田)英夫 〒271―01浦安市弁

天三―二―一〇―二 〇四七三―

五―一―一三四八 (株)白子

高田 守 三菱電機(株)特許部 〇二一

八―二―一三五

高橋(井本)博子 新宮銘木店 〇六四

六―七七九六

高松常太郎 湊屋紙商事(株) 〇五五三

一七二―一

高見秀史 (株)リビングマークテイング

センター専務取締役 〇二三―一―七

一一一内線三四八二

高見幹雄 厚生省保険医療局老人保険

部老人保険課 〇五九一―五九七七

竹内一郎 〒185国分寺市内藤二―六―

一三 〇四二五―七三一―二六―

日商岩井 〇五八八―二四八〇

竹下正敏 一七六練馬区中村一―一二―

八―三二 住友商事 〇二三七

一三五〇四

谷垣邦夫 一〇八港区白金一―一五―二

一二二六 郵政省大臣官房人事部

〇五〇四―四六三〇

谷垣宣弘 一五三目黒区目黒三―一―七

一三〇四 〇七一三―二〇二九

谷垣 尙 愛知産業 〇四四七―〇

二〇一

谷川義男 三井生命保険相互会社東京

融資室 〇二一三―〇三七七

谷口 捷 〇四八〇―八六六三

辻(小谷)英子 今製作所 〇〇四八

〇一四三―三三一四

辻田 昌 一六〇福島市方木田字樋口一

一―五 〇二四五―四六―四八一―

県警本部交通部 〇二四五―二二―

二二五― (福島県兵庫県人会事

務局

土田浩一 一四三大田区西馬込一―二五

一―一ヒルズ西馬込二〇二 〇七七六

一八七〇八 日東精工 〇四九四―

二四四一

常岡(小松)昌子 一四五横浜市旭区左

近山三―一―三〇六

出町(粕谷)京子 西崎祥舞踊研究所

〇四九一―八九六二

友井洋介 一三三越谷市大里四〇―一―

五四〇 〇四八九―七七―四三五七

中西美樹 一四四横浜市戸塚区品濃町五

五三一―パークヒルズJ一〇一〇

〇四五一―八二四―五〇七七

中村隆一 東京光電子工業 〇九二

二―九五九八

中山博司 日本工建 〇七五五―三

二四一

長沢(足立)淳子 一四九一〇一八王子市

西寺方町一〇〇一―九六 〇四二

六―五一―二九八七

長沢収二 一八九東村山市恩多町五一―

二―一六 〇四二三―九四―〇五三一

長沢 剛 藤沢薬品郡山出張所

〇二四九―二三―〇五一九

西垣秀正 ワシントン・コンドミニア

ム 〇三四五―九一四五

西村忠明 日本運送 東京北支店長

〇八五五―二二五五

西安二三夫 若葉地 〇四九二―

八一―八一二二

西山貞夫 シオノギ製薬 〇四六

七―四三―一―一九一

新田浩勉 白崎建設 〇四五一―四

三一―一―二二

野村正隆 菅生高等学校副校長

〇四二五―五九―二二〇〇

橋爪(藤原)忠 〇四七四―八四―

七七六九

橋本俊宏 東京印書館 〇九三九―一

一六一

畑 時美 渡辺紙工業 東京支店

八四九一六六一

早瀬徳郎 〇二〇〇一〇四三八 三和

印刷 〇四一九一七〇〇七

原直之 194 101 町田市金井町七五

六一二二 〇四二七一三四一三三

八六 イトマン農水産 〇四七八一

九一二八

樋口行央 244 横滨市戸塚区南舞岡二

一三三三 〇四五一八二一七七一

二一 日興証券上野支店 〇八三二一

五三七一

平井(九合) 富子 KDD 〇三四七

一五五八八

広内康邦 140 品川区南品川三一六一

一〇アトラスコーポ七〇三 三共 〇

品川工場 〇四九二一三一三一

広瀬敏行 192 八王子市南大沢町三一

二一四一三〇六 大日本土木 〇二

六八一五五一

広瀬靖典 都立練馬高等保育学院

〇九九六一二二二

藤井(小西) 裕子 〇八八三一〇一一

藤井佳人 〇四二九一五七一三二七

五 ニュースター 〇九一五一〇一

一一

藤原(荒木) 淳子 242 清水市堂林二

一二二二〇

藤原(土家) 輝子 227 横滨市緑区鴨

志田町五六八一八

藤原(橋間) ひさ子 〇四六三一二

二一五一四一

藤本和幸 214 川崎市多摩区菅稲田堤

三一一九一四六コーポ杉二〇二

自衛隊中央病院 〇四一一〇一五一

藤本(山崎) さゆり 右に同じ

船越祥郎 東村山税務署 〇四二三

一九四一六八一

細見次郎 杏林製薬 〇中央研究所

〇二八〇一五六一二二〇一

細見忠司 三井生命保険相互会社本社

厚生課 〇二一三一〇三一七

本庄 暁 〇四二四一八二一二一八

七 三井東庄化学 〇五九三三七四

二六

前川(原) 和子 〇四六八一七二一

一三五六

前田和秀 防衛医科大学校学生部長

〇四二九一九五一二一一

松下(西垣) トシ 〇四二四一六一

五七〇〇

松山 裕 横河電機 〇四二二一

五五一〇四六一

九川健三郎 北海道大学工学部 〇一

一七七一六一二一一内線六六四四

三浦(目下) 和子 135 江東区東雲二

一四一〇一三二〇 〇五二九一三

二四一

三浦茂夫 十条板紙 〇社長 〇五四三

一七四五

三浦(豊島) セツ 244 横滨市戸塚区

汲沢町七二八一二七

ファミリ着付教室自営

三澤(荻野) 智子 247 鎌倉市今泉二

一八一三 〇四六七一四三一

一〇二七

三原靖男 キリンビール 〇四九九一

一六一一

水谷正人 マツモト産業㈱ 〇七八五

一一二一

水本ひろみ 兵庫相互銀行東京支店

〇八六二一四四五

南(中道)保子 〒161新宿区下落合二

一三三三八三楽社宅四W一三

〇九五二一八九〇九 三井航空サー

ビス 〇五五三三七二一

宮(佐々木)和子 〇四九二一六二

一八七七 上福岡市役所 〇四

九二一六一二六一

百木雅崇 〒164中野区弥生町六一八一

一一 〇二二九一六三〇

森田(久石)清子 〒985多賀城市東田

中二一四〇一二八一二〇一

森田(寒川)新子 〇四三六一六六

一六四一八

森田 宏 陸上自衛隊富士学校

〇五五〇一七五一二三一

森本益夫 〒167杉並区南荻窪一七七一

一八サンハイツ南荻窪一〇五 〇三三三四

一七二八 住友電工ゴムプラスチ

ック事業部 〇四二二一五一

矢尾渉 東京地方裁判所 〇五八一

一五四一

安田正巳 〒270松戸市新松戸五一

中央パークハウスD九一〇 〇四

七三一四五一三九〇二 朝日新聞社

安田雅美 N T T東京総支社 〇五八

八八二一五

山内(芦田)隆行 伊藤忠エレクトロ

ニクス㈱ 〇四八六一五九五〇

山内(十倉)弥生 〒241横浜市栄区飯

島町二三六〇一二一

山岸(細見)幸子 K D D 〇三四七

一五五八八

山口哲生 〇四七四一二三一七六

二 大和銀行 〇六〇七一四一八一

山口敏之 イーグル工業㈱ 〇四九

二一八一一一〇

山口泰男 東北大学金属材料研究所助

教授 〇二二一二二七一六二〇〇内

線二九〇六

山田和也 〒239横須賀市吉井五七四

日本ビクター吉井寮 〇四六八一

三五一八三三四 日本ビクター 〇

四六八一三六一八八四内線二三二二

山田勝康 〒187小平市学園東町二一

一六一二

山田耕平 レンゴー㈱東京支社

〇五九七七一六五五〇

山田(井元)幸子 〒231横浜市中区矢

口合九一ユニブル横浜山手第二ノ

三〇七 〇四五一六二三一六一八三

山中雄平 日本臓器製薬㈱ 〇二二

二一七二一五三一

山本一志 日本ビクター㈱ビデオ事業

本部人事部 〇四五一四五三一

一一一内線二〇五三

山本崇志 トヨタ自動車㈱東京支社直

納部業務課 〇八一七七一七九八四

由良卓郎 〒153目黒区東山三一二〇駒

沢住宅 R E 二六 〇七一三一〇三五五

法務省 〇五八〇一四一一

余田 功 住宅都市整備公団調査役

☎二六三―八七六一

余田孝博 ☎〇五三五二―四一―一〇六

七 日本ケーブルシステム ☎〇五

三五二―五―二二―一

横谷（芦田）逸子 〒337 浦和市大門四

九一八―六五

横谷律夫 〒157 世田谷区喜多見九―八

一〇メゾンフェリカ二〇三 ☎四

八八―八〇五四 松下電送機 ☎四

三八―五〇二二

横山 隆 川崎製鉄機 ☎五九七―四

七五二

吉住重造 ノーブルスター機会長

吉田勇司 ルフトハンザドイツ航空

☎五八〇―二二四八

吉竹正明 農林水産省 ☎五〇二―八

一一―内線五四三八

吉見勝弘 住友商事機東京本社

☎二三七―四三三一

善積敏夫 三菱油化機 ☎二八三―五

二五三
義水正浩 〒152 目黒区大岡山一―四―

一〇―四〇五 ☎七二四―九〇八二

市ケ尾高等学校 ☎〇四五―一九七一

一二〇四一

和久頼生 東京三洋電機機 ☎〇二七

六―六三―八一九〇

若宮（大隅）八重子 医院事務

☎〇四七四―四六―一〇五

渡辺（藤本）秀代 〒350 川口市青木一

一〇―三グリーンプラザ川口一―

八〇二

会員のみなさまへ

●『山ざる』誌は、同じふるさとをも

つ者の、はのぼのとした心のふれあい

を求めます。老若男女を問わずに、お

互いの仕事や趣味を通して、気がね

のない親しい交りを広げたいのです。

●この雑誌は毎年一回発行し、全会員
に無料で贈ります。登録もれの方や住
所変更等がありましたら、事務局まで

ぜひお知らせください。

●関東水上郷友会は、すべて有志のボ
ランティア活動によって運営されてい
ます。この『山ざる』誌や通信費等の

資金源も、会員篤志家の寄付や協賛広
告料、郷友会会費等によってまかなわ
れます。

●年会費は一〇〇〇円と規定されてい
ますが強制的なものではなく、これも
郷友のご協力に期待するものです。事
情ご理解のうえ、お手数ですがどうか
ご援助願ひあげます。

●次号に原稿をお寄せください。締切
は来春一月ですが、それまではいつで
も受けつけます。郷友会事務局宛（春
日建設機内）にお送りください。

●広告の本誌の貴重な資金源です。ぜ
ひ多数ご出稿ください。一ページ二万
円。半ページ一万円。名刺広告四千円
です。事務局へお申し込みください。

（編集部）

新春役員会

恒例の新春役員会が、六十二年二月九日（月）午後六時より、飯田橋かすがホールで開催された。

渡辺副会長の司会で伴仲会長の挨拶があり、そのなかで、明年に迫った「北摂・丹波の祭典」に対応した郷友会希望者の郷土訪問バスツアーが提案され、全員の賛成を得た。来年五月の実施をめざして詳細案を検討、今秋訪問団を公募することになった。つづいて渡辺副会長より「山ざる」18号の編集進行状況が報告され、一八〇〇部にもなる雑誌の製作コストや郵送料などの諸経費増をどう捻出するかが討議され、足立正理事から広告と寄付金について、足立和巳理事から年会費について、それぞれ会員のさらなる協力を要請することとなった。

そのあと当会の運営について諸問題が討議されたが、なかでも熱を帯びた議論

が展開したのは、近年若年層の大幅に増えた当会諸行事の活性化についてであった。一昨年、伴仲会長から提案された

「青年部・婦人部」案の意図もそこにあったが、会の行事に若年層や婦人層の参加をいかに呼びかけるかということである。当日出席の各役員も、みな若いころから郷友会に出席して大いに益を受け、何かにつけて心の支えとなったことなどを語り合い、何かよい知恵を出し合おうということになった。「山ざる」誌の充実は会の活性化に大きく貢献してきたがクラブ活動は目下「囲碁」と「ゴルフ」

同好会の二つのみ。もっと他に人気の出るクラブ活動はないものか、会員からも広く知恵を集めて研究しようというわけである。ご意見をぜひお寄せいただきたい。

佐々木盛雄氏から政界の現状分析や自民党政権の将来展望など、興味深いお話しが聞かれた。荻野武さんが持参されためずらしい「丹波ワイン」を賞味したり

いつになく熱気みなぎる充実した役員会であった。

当日の出席者は次の二十二名である。

伴仲信次、村上末吉、渡辺隆男、佐々木盛雄、須原清、吉住重造、荻野武、足立和巳、足立かおる、足立謙悟、足立源治、足立正、小田富士夫、坂上勝朗、常岡幹彦、鶴田ゆき子、西崎祥、山中岩雄、秋元多美子、岡吉明、谷垣正雄、藤田正雄

柏陵同窓会東京支部から

母校創立九十周年を記念して発行された「柏陵同窓会名簿」により、東海・北陸・関東・東北及び北海道在住者を改めてピックアップ。従来の支部会員と重複照合して新たに会員リストを作成した。これにより六十一年末現在の会員数は一三七二名となった。

恒例の総会は七月五日（土）東京九段会館において行われたが、新規会員の出



新装なった柏陵記念館

席者も多く、ここ数年超えることがなかった百名の大会を突破した。

また、母校九十周年の記念式典には、小田富士夫氏（高校二回、昭和二十五年卒業、読売新聞社勤務、町田市在住）が招かれて、特別講演をされ、喝采を博した。

柏陵同窓会東京支部へのご連絡は〇三―二九三―二九六一内線二九〇坂上まで。



記念講演壇上の小田富士夫氏

柏高第八回生の卒業記念同窓会が柏原で開催されました。いまその時の写真を見ながら、あの時の感激を思い起こしております。

三月に案内状を頂いて何をさておいても丹波に出かけました。前日、尾松（旧姓・田辺）、伴野（旧姓・赤井）さんと新幹線にぎやかにおしゃべりしているうちに到着です。同窓会当日は、あいにくの小雨でしたが、柏原の町を車から見ながら、会場の柏高に到着、体育館に設けられた受け付けには、懐かしい人達、丹波弁が温かく飛び交います。校庭のあの大きな「くすの木」は変わりませんが、新しい校舎や体育館が建ち、私達の通ったころとは大分趣が異なっています。十一時半記念写真の撮影です。前列に並んだ先生の中には、われわれ生徒と見分けがつかない方もおられます。

代表世話人の岡林写真館の岡林克昌さんの姿に私達学生のところ撮って頂いた父上の面影が重なり、一瞬懐かしく昔に引

卒業三十周年記念 同窓会に出席して

木呂子 恵美子（旧姓 河内）

昭和六十一年四月二十七日の日曜日、

き戻された様な気がします。バスで「吉祥苑」に移り、懇親会がありました。六町村の世話人三十名の方のお骨折りで百三十四名の学友と十名の恩師が御出席各地区毎のテーブルが用意されていました。まず、卒業後亡くなられた方に黙とうを捧げ、校歌を合唱し、世話人のあいさつ、安藤平八郎先生のあいさつ、そして、あの葛谷先生の乾杯で始まりました。時間のたつうちに、あちこちのテーブル入り混じり、一年生の時いっしょの人、三年の時の人、皆と三十年振りの面影を見つけて、話し合います。いつの間にか三十年の空白がなくなってしまうのが不思議です。そのうちに時間がたって、感激いっぱい同窓会は終了しました。企画、準備その他万端、お世話頂いた方々本当に有難うございました。五十歳を目前にして、皆さん大変な時を過ごしておられることでしょう。年とともにこんな出合いの場が大切に思われてきます。またいつかぜひと思います。

ゴルフ同好会報告

年四回のゴルフ同好会は、今年で二十回目を数える。いつも四組から六組で半数が伴仲会長夫妻ほかの常連、あとは時折顔を出す人や新人である。名門コースが多く、ウィークデーなのでゆったりとプレーできるのが何よりも有難い。性格の出るスポーツ、丹波共通の人柄のよさなどモロに出て、何故か気が合う。霧囲気がまた格別である。パーティでは勝ち負けもそこそこに、田舎の話題が続出する。新人の参加を歓迎、初心者も遠慮なく、カモになる心配もない同好会。

永上ゴルフ同好会成績(昭和六十一年)

第23回 3月27日

総武カントリークラブ総武コース

1位綾木健 2位川畑明光 3位大根

川孝 B B 渡辺貴美子

第24回 6月6日

河口湖カントリークラブ

1位村山宗裕 2位豊嶋幹男 3位岡

林京子 B B 足立正

第25回 9月11日

大厚木カントリークラブ

1位岡林京子 2位渡辺隆男 3位安

永孝 B B 沢田みさを

第26回 12月3日

真名カントリークラブ

1位岡林逸男 2位角田和也 3位早

瀬徳郎 B B 神田敏博

囲碁同好会報告

六十年十一月から開始された毎月第二土曜日を例会日とする同好会活動は、六十一年度も引続き開催され、盛況とはいえないまでも、一度も欠けることなく、十二回の月例会を行うことができた。

九月には伴仲会長より寄贈いただいたトロフィーを賭けての大会が行われ、初代チャンピオンに川畑明光さんが就いた。

参 加 者	勝	敗	ジゴ	参加回数	備 考
足立 (正)	44	23	2	11	最多勝利賞
藤田	32	38		11	敢闘賞
前川	31	44		12	最多参加賞 (皆勤!!)
上小沢	29	34	1	11	努力賞
小日向	18	25	1	9	
坂上 (勝)	18	27		9	第1回会長杯2位
増田	17	19		9	
永塚	12	8		4	
山本	10	5		3	
松山	9	5		3	第1回会長杯3位
足立 (源)	7	4		5	
坂上 (豊)	6	2		2	
中村	4	0		1	
川畑	4	2		2	第1回会長杯優勝
勢川	3	1		1	
石川	2	1		1	
黒田	2	1		1	
坂口	2	2		1	
新島	1	0		1	
酒井	1	1		1	
小山	0	3		1	
近藤	0	7	1	4	
矢尾	0	0	1	1	

年会費受領

自昭和61・1・1
至昭和61・12・31

△昭和60年度分以前まで▽

藤井 豊 木下 清央 近藤 田治 豊

村上 善英 土田 直吉 横溝 初子

岡林 逸男 前田 武彦 有田 潔司

石田 吉郎 下中 昭男 山本 清士

久安 敏夫 山端 教子 足立 石蔵

安達健一郎 小田富士夫 須原 逸郎

有原芙久美 佐藤 公子 山本 憲司

榎本 康子 丹波観光開発センタ―

△昭和61年度分まで▽

藤田 千治 芦田 善和 片岡 恭子

泉 睿子 横幕 尚子 山口 敏之

大会は年二回(三月、九月)に行い、さらに楽しい会に行きたいと考えているので、丹波、氷上郡の出身などにこだわらず、同好の士の多数のご参加を期待している。現在同好会から通知を出しているのは六十名。問いあわせは〇三二六四一四〇一一春日建設小日向まで。

安藤	英二	三浦	和子	竹中紀代子	村上	秋雄	藤田	典明	広瀬すがの	依藤	俊平	山崎	礼子	足立美都子
本部	文	村上	良男	福井 謙三	足立 勝	芦田 和代	友井 洋介	梅津 浩平	藤田 正雄	北野 参則				
上武	正次	足立 正	高井 静	渡辺 秀代	小野 勝弘	上村 邦子	田中 篤郎	福田 治子	坂上 勝朗					
中山	博司	門脇俊一郎	有田 毅	松山 康裕	浅野加代子	高野 康慶	井上 陽一	和田 信雄	足立知佳子					
古藤	一	山田 隆生	織田 信和	大石佐代子	大塚富久子	婦木 一男	勢川 武彦	前川 和子	酒井 明朗					
谷垣	博	永井 均	酒井 智美	高橋 通也	梅津 嘉市	細見 忠司	常岡千紗子	芦田 昌保	今井 洋子					
酒井	昇	森田まさ子	田中登喜子	梶田 廣子	石井 恭代	足立美佐子	荻野 一雄	徳田八郎衛	藤本 和卓					
清藤	節子	荒木 泰雄	井上 悦子	田村 良子	佐々木 茂	谷垣 尚	鶴田 宏	足立 源治	秋元多美子					
坂上	五朗	竹内 健	権田 京子	山田 一也	葦田 有功	葦田 冬子	池上 亘泰	井田 悦子	井手 梅野					
若菜すぎ子	後藤 春雄	足立あつみ	土田 浩一	本城 英明	桜井美枝子	大坪 真子	常岡 幹彦	西山敬次郎	柳瀬 隆志					
池田	訓子	堀内久美子	小西 保	羽賀 澄代	前田 軍次	田中三喜男	新田 浩迪	山内 隆行	柳瀬 隆志					
田中	茂雄	頼沢 豊	鈴木 智丈	田中 一美	小谷 崇	長沢 淳子	山本 紀子	中野 周子	渡辺 圭三					
小中	克巳	大野 良夫	畑中 慶二	千葉 和子	足立 敦子	飯田 光雄	山本 紀子	中野 周子	渡辺 圭三					
久下	重子	猪川 節子	林谷 集	牧野 礼子	藤井 裕子	天野 清子	細見 利明	大嶋 喜好	坂本 正幸					
西崎	祥	岡 博	広瀬 明美	臼井 三訓	足立 忠司	森岡 幸子	鈴木 恒子	石井 和世	藤原 輝子					
山内	明子	村上 末吉	樋口 行央	音無太美子	石橋 昭彦	丸川健三郎	谷 達雄							
樋口	順子	川上 邦夫	田中 芳子	土田 邦彦	吉見 勝弘	吉竹 正明	△昭和62年度分まで▽							
壇	和美	竹内 光子	小林 隆代	常岡 昌子	塚口 裕子	大江 範子	上島 一晃	植木 格	志村 勝郎					
竹内	茂子	杉本 啓助	橋本 真二	浮田 信子	吉田ひろみ	菅野きぬゑ	加藤信太郎	波多 洋三	山中 人美					
荻野	正平	余田 士郎	莊 克衛	石井 孝子	森田 清子	高橋 博子	上野 忠明	松井千恵子	大地富美子					
足立	元美	荻野 吟逸	影山 朱実	酒井 重男	西浦 浩子	秋山 康男	由良 八郎	滝浦佐代子	赤対 泰					
足立	真一	足立 松子	福田ちさと	松下 トシ	柿原 嘉直	石川美代子	須原 清	高桑 良弥	横田 公子					

安間喜代子 堀井 隆川 植木 英吉

足立 治

高取由美子 木村つた江 辻田 昌

△昭和66年度分まで▽

永井希代子

畑 雅樹 片瀬 勝義 陶山 笑子

足立 忠三 足立 昌彦

●氷上町 殿 (60年) 一〇、〇〇〇円
●今井和幸殿 一〇、〇〇〇円
●満浦謙之殿 一〇、〇〇〇円

坂本 重雄 畑 武司 足立 眸

足立 三治 近藤 勇

●市島町 殿 一〇、〇〇〇円

足立 勝 上田 脩 荻野 武

△昭和67年度分まで▽

●氷上町 殿 一〇、〇〇〇円

木呂子恵美子 小林 康宏 清水 正男

水船 隆昌 渡辺 金三

●森田信三殿 一〇、〇〇〇円

鶴田ゆき子 常岡 昭 早瀬 徳郎

△昭和68年度分まで▽

●片山日幹殿 一〇、〇〇〇円

安原三智子 谷 春夫 足立かをる

林田 孝子 畑 秀夫 渡辺ひろ子

●小谷正雄殿 一〇、〇〇〇円

上田 正巳 山口 泰男

山田 淑子

●小林武治殿 一〇、〇〇〇円

△昭和63年度分まで▽

●菱田ふみ子殿 一〇、〇〇〇円

森本 益夫 中村 正元 林谷 集

寄付金 自昭和60・11・12
至昭和61・12・31

●渡辺和代殿 一〇、〇〇〇円

久保 知義 和久 頼生 松山 裕

●田中芳子殿 九、〇〇〇円

中川 則文 荻野よ志江 寺田 重則

●飯田三郎殿 五、〇〇〇円

野村 節三 井本 義一 横山 律子

●久保知義殿 五、〇〇〇円

浅香 秀之 足立 稔 近藤 勇夫

●莊 克衛殿 五、〇〇〇円

東田 實 田中 寛 木下 忠

●渡辺金三殿 三〇、〇〇〇円

△昭和64年度分まで▽

合計 三五〇、〇〇〇円

△昭和65年度分まで▽

●谷垣正隆殿 三〇、〇〇〇円

足立 高彦 足立 順治 小笠 勝啓

●梶原 清殿 二〇、〇〇〇円

井上 巖 藤田 かね 中西 育代

●梶原 清殿 一〇、〇〇〇円

田中貴美子 黒田加代子 飯田 三郎

●足立誠一殿 二〇、〇〇〇円

大野 善三 橋爪 忠 市原このゑ

●板野英彦殿 (60年) 一〇、〇〇〇円

●柏原町 殿 (60年) 一〇、〇〇〇円



昭和61年11月 7 月

会 計 報 告 書

(昭和60年10月 1 日～昭和61月 9 月30日)

関東水上郷友会
会計理事・足立和巳

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	2,315,973	現金27,922 定期預金1409,349 振替貯金559,991 普通預金318,711	出 版 費	1,525,950	“ 山ざる17号 ” 製作および発送代
1 年 会 費 収 入	463,000	延 270 名	通 信 ・ 印 刷 費	224,710	総会並びに役員会案内状印刷・発送他
総 会 費 収 入	325,000	65 名	総 会 費	419,000	於私学会館
役員会費収入	99,000	33 名	長 寿 祝 費	77,000	祝品及び発送費
編集会費収入	51,000	17 名	会 議 費	363,070	新春役員会, 編集会議, 常任委員会等
寄 付 金	160,000	延 16 名	慶 弔 費	0	
広 告 料 収 入	949,000	延 43 名	支 払 手 数 料	15,690	郵便振替手数料, 銀行振込手数料
受取手数料	0		消 耗 品 費 他	21,770	丹波新聞新年広告, 事務用品等
雑 収 入	61,902	預金利息	繰 越 金	1,777,685	現金 34,062 普通預金 97,193 定期預金 1,115,349 振替貯金 531,081
合 計	4,424,875		合 計	4,424,875	

**桂建築総合研究所
一級建築士事務所**

感性の時代、感覚が優先する時代に、住まいも、商店も、ソフトな、心にうったえるデザインが要求されています。

丈夫さを求めたハードの時代よりも、自分の居住空間を快適にすることが、生活を楽しく、心を豊かにしてくれます。

経済的なノウハウを駆使して、美しいモダンな空間をデザインする
それが弊社の願いです。

株式会社桂工務店

最近職人の手間が高騰し、予算をオーバーします。造作は能率的に省力化をはかることがコストダウンになります。

弊社は施工技術を練磨して、高効率、迅速、確実をモットーに、厳選したノウハウによって施工を行います。

株式会社 商店建築社

商業施設は市民文化の支えとして、各都市でイノベーションされています。弊社は月刊誌商店建築の外、臨増、別冊等を編集し、全国に発売しています。

有限会社桂研究所

商業施設の立地、経営等で相談がふえています。
コンサルタントを業とする会社です。

東京都世田谷区南鳥山 2-33-11

村 上 末 吉

T E L-308-8820

(春日町中山出身)

建築材料販売工事

建設大臣許可 第 1834 号

中央建材工業株式会社

常務取締役
東京支店長

荻 野 武

(市島町出身)

本 社 名古屋市千種区高見 1—6—1

電話 052 (761) 6181 (代表)

東京支店 東京都中央区銀座 7—14—3

電話 03 (543) 8106 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1—8—15

電話 06 (443) 6665

仙台出張所 仙台市高松 2—11—15

電話 0222 (73) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7—12

電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5—1—25

電話 0252 (45) 1705

松本出張所 松本市野溝木工 1—6—58

電話 0263 (25) 0351

広島出張所 広島市西区中広町 1—4—16

電話 082 (291) 3780

◆エレクトロニクスパーツの専門商社◆

株式会社 三 誠

東京都文京区湯島2-24-13 (834) 3171 (代表)



取締役社長 足立 誠一

☆主要取扱メーカー

日本航空電子工業株式会社

多治見無線電機株式会社

株式会社フジソク

日本開閉器工業株式会社

ライン精機株式会社

本多通信工業株式会社

Sonnenschein



美味無比 木の实酒

栗の三年酒

くり

さん

ねん

しゅ

この木の实酒「小鼓くりの三年酒」は、純粹の丹波産栗の实、梅の实など山野の木の实を原料として秘醸したもので、常用すれば胃腸を整え健康と美容と活力を増進します。

ストリートでお飲みいただきますと、さわやかな梅の香りがひろがり、あと口にはコクのある栗の味が残ります。

お正月のお屠蘇には、縁起のよい「小鼓栗の三年酒」をお用い下さい
キット好評です。

◆ 丹波焼壺詰
◆ 徳用びん詰

(	1、
35	50
00	00
00	00
ml	ml

小鼓の 山酒造場

氷上郡市島町中竹田
電話(〇七九六)⑥〇三三二代

交通事故

もし、あなたが加害者だったら……

水かけ論の
あげく…



仕事中また
電話がくる…



いったい誰に
相談しよう…



AIUの自家用自動車保険

貴方の財産を守る

火災保険から

万一の災害・病気に備えて

生命保険まで

あらゆる保険について お気軽に ご相談ください



代理店 **永愛友商事** 代表者 **KK前田和市**

〒107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIUビル 電話585-0740代

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に

明日香園の健康銘茶を！

《明日香園のオリジナルブランド》

ウーロン茶の缶ドリンクがただいま大好評です

各種御注文は本社工場にて直接承っております

よろしく御用命下さいませ

創業明治四年

伝 統 銘 茶

株式会社 明日香園

代表取締役社長 池畑豪士郎

本 社

東京都千代田区九段北2-3-2 TEL(03)265-2579

本社工場(御注文承り先)

兵庫県氷上郡柏原町南多田3146 TEL(0795)72-3588

直販店

西武百貨店池袋本店B1 TEL(03)981-0111(内線)2044

大菱印刷有限会社

田 中 寛

〒110 東京都台東区台東1-27-5 大塚ビル

☎03-833-1595

REWARD®

 Onaji MaiMai®

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ

 **ノブリスター株式会社**

取締役会長 吉 住 重 造

(春日町中山出身)

本社 〒101 東京都千代田区東神田 2-4-7

電話 03 (866) 9121 (代表)

調布市社会福祉協議会理事

調布市豊かな老後のための市民会議実行委員
老人問題研究所

木村 つた江

東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5

電話 東京 (300) 1505番

のびのびベビー・こどものファッション 白藤

株式会社



本 社 〒158 東京都世田谷区瀬田1-22-19
TEL 03-700-3 1 2 1 代表

代表取締役 山 本 清 士

高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

取締役社長 足 立 三 治

東京店 品川区西五反田 7-22-17
東京卸売りセンター12階
電話 (03) 494-3285~7

本社 川崎市中原区新丸子 701
電話 (044) 722-6371 (代表)
社長室直通 711-3324

南海工業株式会社

社 長 石 亀 義 明

本社 社：東大阪市大蓮東 2-12-4
JIS工場：電話 06(721)5454/5455
柏原工場：永上郡柏原町拳田小字浅川160-1
電話 07957 (2)3744

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近 藤 勇 夫
(国領出身)

東京都新宿区下宮比町8番地
電 話 (260) 6 2 8 1 番 (代表)

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠
(氷上町黒田)

千葉県八千代市八千代台西 7-5-29
電 話 0474-84-7121番

あなたの《保険》を
見直してみませんか。

明治生命

足 立 正

〈認定生命保険士〉〈変額保険販売資格者〉

株式会社 **明治生命保険代理社**

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町2-3

事務所 03-663-4231~5

自 宅 0427-26-8149

歴史と共に綴るあなたの人生記録

自分史年表〈らいふめもり〉

■B5判176頁・定価1,500円・送料250円

未来に書きつぐ暮らしの〈べんり帳〉

50年ノート〈Memory21〉

■A5判160頁・定価1,300円・送料250円

株式
会社

ホングー出版

代表取締役 池田 忍

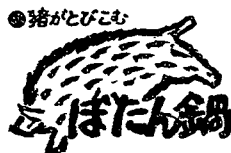
東京都中央区日本橋茅場町3-3-4坪井ビル

〒103 ☎03(666)1922(代表)

郵便振替 東京 3-144071

城下の面影を残す 奥丹波柏原の宿

山菜料理からアマゴ・ヤマメ・鱒・鯉・鮎・等川魚に始まり
香り高い松茸・丹波牛の肉料理、ボタン鍋



日本観光旅館連盟会員

三友楼

兵庫県氷上郡柏原町八幡筋 電話：丹波柏原(07957)②1110～2

客室数17室、収容人員60名、駐車場完備、送迎用マイクロバス

東急建設株式会社

専務取締役 芦 田 重 秋

〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号

渋谷地下鉄ビル内 電話東京〇三(四〇六)五一一一(大代表)



ゼーゼル機器のカーエアコンは国内はもちろん、
世界に気持のよい風を送っています。
お子様の学力向上には公文式の算数・国語教室で

足 立 和 巳

自宅 府中市栄町一―一五―二七

電話(〇四二三) 六四―七二二七

ミワ電気工事株式会社

代表取締役 足 立 謙 悟

〒220 横浜市区岡野一丁目八番地八号

電話 〇四五(三二二)五二九一番(代表)

足立勲平

自宅 藤沢市鵜沼藤谷一七四
電話〇四六六(二二)六四六一

交通毎日新聞編集部
次長 足立静雄

東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一(白亜ビル)
電話六四二一三四一四番テロ
札幌・仙台・高崎・横浜・名古屋
大阪・広島・岡山・高松・福岡

有限会社ミツワシステムズコンサルティング

取締役社長 足立謙悟

足立徹

株式会社ニュー東京フーズ

代表取締役 足立卓巳

東洋リノリウム株式会社

上田修

新明和工業株式会社

常務取締役 生 田 清 弘

〒100 東京都千代田区大手町二丁目六番一号

朝日東海ビル十八階
電話(〇三)二四二一一二四四一(代)
テレックス二二二二一九〇

有限会社井上商店

社 長 井 上 和 三

電話 三鷹市深大寺三八〇六
〇四三一一三二一三四八八

有限会社 植 木 紙 工 所

代表取締役 植 木 一 夫

東京都文京区白山三丁目一ノ十三
電話(八一)八五七三番

小 田 富 士 夫

日製産業株式会社

取締役社長 大 木 正 徳

〒105 東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話(〇三)五〇四一七一一番

パイオニア株式会社
人事部人材開発課

課 長 大 西 修 三

本社 153 東京都目黒区目黒一丁目四番一号
電話(〇三)494一一一一番(大代表)

埼玉日産モーター株式会社

取締役社長 大 西 俊 治

本社 与野市上落合九三五番地
電話〇四八八(59)五一〇三番(代表)

(株) パンオーディオシステム

代表取締役 岡 林 逸 男

〒330 大宮市盆裁町五一四(押田ビル)
TEL(〇四八六)六五―三六九四(代表)
〒167 東京都杉並区善福寺四―八一―九
TEL(〇三)三九四―六八四四

総合エクステリア
株式会社 大 樹

代表取締役 岡 吉 明

南大和店
本社

丹波興産株式会社

代表取締役 柿 原 陽

〒150 東京都渋谷区桜丘町三十一番十五号
住友生命渋谷ビル
電話(03)四六四―一七七―一番(代表)

参議院議員

梶 原 清

同和火災海上保険株式会社

主査 神 田 敏 博

〒103 東京都中央区日本橋三丁目五番十五号
電話(〇三)二七四―五五一―(大代表)
FAX(〇三)二八一―二七〇九

文芸局担当部長(吉川英治全集担当)

小杉仙生

株式会社 講談社 文芸局
〒112 東京都文京区音羽二―一二二
電話東京〇三(九四五)大代表一一二一

日本学士院会員

理学博士 小谷正雄

自宅 東京都大田区山王三ノ三六ノ四
電話東京(七七二)六六五二

D・M・Sダイレクト・メール・サービス株式会社

取締役 業務推進本部長 坂上勝朗

本社 〒101 東京都千代田区神田小川町一ノ十一
電話 東京(293)二九六一番(代表)

静岡大学教授

坂本重雄

自宅 静岡市小鹿三丁目四―五(〒422)
公務員住宅八―二六
電話 〇五四二(八二)八〇五八番

銀座店のご案内

丹波ささ山
山家のお酒

さ さ

ぎんざ6―2第13金井ビル2F
電話(五七一)四四二三

須原清

東京都中野区南台五の三〇の六
電話(三八一)一六二一番

勢川 武彦

〒164
中野区東中野二ノ一七ノ二〇
TEL 三六一―八六七六番

田中 篤郎

田中 寛

〒164
東京都中野区中央4―29―4長瀬ビル

高見産婦人科

医学博士 高見 嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話（九五六）〇六〇〇番

高見 齒科

高見 幸男

〒176 練馬区錦町二―八―三
電話 九三三―六七三一番

谷垣 正雄

東京都杉並区高井戸西一―二四―一七
電話（三三三）一〇七六番

株式会社 環境計画コーオペレーション

取締役 谷 口 捷

〒150 東京都渋谷区道玄坂一―一五―一七
プリメーラ道玄坂ビル八〇四
TEL (〇三) 四七六一―一〇四〇

参議院議員

田 英 夫

江南ハウジング株式会社

常務取締役
営業本部長 千 種 倫 幸

〒102 東京都千代田区麹町五丁目七番地
紀尾井町TBR七―一二号
電話 代表 (一一三〇) 三六三一

東亜国内航空株式会社
整備本部 整備工場

次 長 豊 島 幹 雄

〒144 東京都大田区羽田空港一丁目七番一号
空港施設第二綜合ビル
電話 〇三(七四七)六九七五番
座席予約受付(七四七)八一―一番(代)

常 岡 幹 彦

中 井 良 平

〒272-01 浦安市美浜一五―二一五
電話 (〇四七三) 五三一八七九一

ザ・カード株式会社

取締役社長

西尾久之

郵便番号 一〇四
東京都中央区銀座二丁目四番一号
銀楽ビル七階
電話東京(03)(561)八〇〇二番(代表)

日本舞踊教授

西崎祥

〒223 横浜市港北区大棚町五〇〇一八
電話(〇四五)五九一―六六五五
西崎舞踊研究所 電話七八一―八六〇三

西山敬次郎

東京事務所 東京都中央区日本橋蛸殻町一―二八―七
弓削ビル
電話(〇三)六六二―二〇〇二

三和印刷株式会社

代表取締役

早瀬徳郎

〒160 東京都新宿区高田馬場一―一―一〇二

黒川木徳証券株式会社

畑秀夫

本社 東京都中央区日本橋一―一六―三
電話東京(〇三)二七八―七八四六番

波多洋三

文京区春日一―一七―二
電話(〇三)八一―二八六〇番

日本構造株式会社

代表取締役

古 倉 克 實

船橋市習志野六―一二二―八
電話(〇四七四)六七一七二三(代)

都宮八王子靈園・東京靈園正門前

青葉山
真照寺住職

堀 井 隆 川

〒193 東京都八王子市元八王子町三一―三九七
電話(〇四二六)六三一八四〇三

藤 田 正 雄

自宅 〒215 川崎市麻生区王禅寺六七八―四
電話(〇四四)九五四―四九五七番

エクステリア専門商社
株式会社 大 洋

代表取締役社長
松 下 文 雄

本社 〒351 埼玉県朝霞市膝折三一七―五
電話(〇四八四)六六一―一五五一(代)

船 越 祥 郎

東京都昭島市郷地町五四九―一四
電話(〇四二五)四四―五九九七

動力炉・核燃料開発事業団
広報室長

水 船 隆 昌

〒107 東京都港区赤坂一丁目九番十三号
(三会堂ビル)
電話五八六一三三一(大代表)

株式会社興水タイヤ商会

取締役経理部長 三宅良夫

〒210 川崎市川崎区元木一ノノ一
TEL 〇四四一三三六三二(代)

宮野近

曹禅寺

村上悟悠

東京都大田区池上七丁目二番十号
電話 〇三ー七五一ー〇六七八番

ブライダルファッション
(株)シャルム商会

常務取締役
東京店長 村上昇

東京店 〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話 (〇三) 三七四一〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 (〇七五) 二二二一〇二一五(代)

社団法人日本産業用ロボット工業会

事務局長 小森康宏

〒105 東京都港区芝公園三一五一八
機械振興会館内二二三号
電話 (〇三) 四三四一二九一九(代表)

エイ・エム・ティ株式会社

取締役社長 百木雅崇

東京都港区浜松町二ノ三ノ二三
フクダビル
電話 (四三一) 三五五一番

だいな
大七証券株式会社銀座支店

投資顧問部
安 田 功

〒103 東京都中央区銀座四丁目一〇番三号
電話 東京 (五四五) 九二一一 (代)

伊藤忠エレクトロニクス株式会社

国内営業本部
(隆行改め)

本部長付
山 内 隆 幸

〒150 東京都渋谷区渋谷二丁目一五番一号
東邦生命ビル7階
電話 (〇三) 四八六一五九五〇

株式会社高野建築設計事務所

企画室

室長
村 上 善 英

〒113 東京都文京区本郷二一九一七 三好ビル5F
電話 (〇三) 八一三三七六〇一 (代)
FAX (〇三) 八一八一六一五五

紳士服地・毛皮・仕立て：等のご相談は
鷹岡株式会社東京支店
営業第二部

課 長
村 田 年 彌

〒103 東京都千代田区神田須田町一丁目三番地
電話 東京 03 (255) 六六一一 (代表) 一九番

社団法人日本ブラント・技術部
プロジェクトマネジャー

技・術士
(電気部門)
若 森 敏 郎

〒100 東京都千代田区有楽町一丁目八番一号
日比谷パークビルヂング(三階)
電話 東京 (213) 八五五一番 (代表)

渡 邊 隆 男

下北沢商店街振興組合

副理事 旭

弘

子供服 アヤ 東京都世田谷区北沢二丁目二四一九
電話(四六七)七四二八
電話(四六〇)七七四七
ニューメディアハウス AVASUN 電話

安達 健一郎

〒188 保谷市中町三丁目一三
電話 〇四二四(二)三四四六

船舶事業部

参与部長

有 田 興 司

東京支店 東京都港区浜松町一丁目二七番一七号
〒105 TEL(〇三)四三四七八二(代)
〒105 TEL(〇三)四三四七八二(代)
〒650 神戸市中央区加納町六丁目二番一號
TEL(〇七八)三三二一九三八(代)
株式会社ネオス 本社

損害保険のコンサルタント

日本損害保険協会 特販(一般)資格 第特一三五八号

飯田保険事務所

飯 田 光 雄

自宅 四街道市旭ヶ丘三丁目九一二
〒284 電話〇四三四(三)二二二一三

佐々木 盛雄

自民党 東京都千代田区永田町一丁目十一
〒100 電話五八一六二一一(内)二六五
事務所 東京都新宿区新宿五丁目十七番六
〒160 電話(〇三)二〇九一三七六〇七番
自宅 東京都新宿区中井二丁目十一番十八
〒161 電話(〇三)九五一一二八五八番

NHK家庭部・医療番組班
チーフ・ディレクター

大 野 善 三

〒150 東京都渋谷区神南二丁目二一
自宅 〒228 (〇三)四六五一一一一内線三二九七
神奈川県相模原市相模台七丁目五十八
(〇四二七)四六一八七九〇

旭タンカー株式会社
営業二部

次長 田原敏男

〒100 東京都千代田区内幸町一丁目二番二号
(大阪ビル二号館)
電話 (〇三) 五〇八一—二二八一番
テレックス 二二二—五六七七番

兵庫県東京事務所

所長 今井和幸

〒102 東京都千代田区平河町二丁目六—三
都道府県会館内
電話 (〇三) 二五一—四二六六

自衛隊中央病院
高等看護学院長
理学診療科部長

前田和秀

病院 東京都世田谷区池尻町一ノ二ノ二四
〒154 電話 (〇三) 四一一—〇一五一

NHK文化センター

編成委員 上野重喜

フジタ工業株式会社

臼井三訓

日本製薬団体連合会

理事 江間時彦

編 記	集 後
--------	--------

▲故郷を思う熱い胸のう
ちが美しい言葉で描かれ
た原稿がたくさん寄せら
れました。ありがとうございます。

ございました。遠い昔、美しい空の下で
友垣とむつび親しんだ折々の記憶が、
時の流れとともに遠ざかってゆくのを
覚えるとき、懐しさはひとしお切ない
ものに感じられるでしょう。暗い空
からみぞれがピチヨピチヨ降って、ひ
びが痛い、しもやけがかい、と泣い
た日もあったでしょうに。

▲それにつけても故郷というものは、
それぞれ独自のデッサンに、離れて暮
した年月という絵の具で色を着け、回
想という名の仕上げをすることで、か
くもピッカピカになるのでしょうか。

学校から帰ると父に「晩げにやる牛の
草を刈ってきときな」といわれて「ア
ーア、今日は水晶取りに行く約束しと
んのに」とか、「たきつけがのおなっ
とるさかいちいとくばかいてきな」
といわれて「今日はじゃこ釣りにいく
んやから嫌や」といっては、しぶしぶ

自分の何倍もある大きな桑かごを背負
って、かんじきを持って松葉かきに山
に入ったものでした。これが楽しい、
甘い思い出となっているのは、どこら
辺で砂糖が混じり込んだか、思案投げ
首、「いいことばかり」重ね合せて、
仏さんにはちみつかけたような甘い味
にするか、少し香辛料をきかせるか、
わが家じこみの故郷を創造することは
楽しいことに違いありません。

▲「山ざる」誌も含めて、郷友会の場
が老人ホームとまではいかなくても、
「どだい年配者ばかり集まって、若
い衆は寄りつかん」という声も聞きま
した。「出発進行」でがむしゃらに進
んでいる発展途上の人たちと、おおむ
ねゴールが見えてきて後ろを振り返る
暇ができた人たちとの接点を見付ける
工夫をしなければと考えています。若
い人たちの投稿を期待しています。

▲投稿についてのお願
い
●必ず原稿用紙を使い、タテ書きで一
字一字を正しくマスに入れること。
●書き出し、改行のときは一字下げて

二マスめから書き、句読点、(、)等
は一字分。——……は二字分とする。
●訂正は、原文を||線で消し、その
右側の行間に書き込む。

●漢字の使用範囲、送りがなについて
は常用漢字と現代かなづかいによる。

▲むさんこにうだうだゆうわけやない
んですけど、一応のルール設定も必要
かと思えます。よろしうおたのんしま
す。かくいう編集子もひいさんつこう
てきた字もせんぐり忘れてしもて、ど
もこもなりまへん。ほんまに、ろうか
は静かに、余もふけてまいりました。
ごめんします。(源)

山ざる 第18号

昭和六十二年五月三十日発行

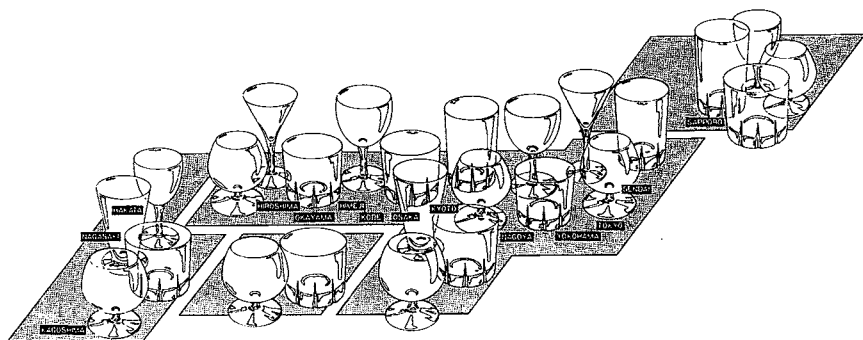
編集委員

足立源治 足立正 小田富士夫
足立和巳 大野善三 小杉仙生
坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦
鶴田ゆき子 宮野近 渡辺隆男

発行者 関東東水上郷友会々長 伴信仲次
〒102 東京都千代田区飯田橋二丁目九番
春日建設株式会社内・密三(三六四)一番
振替・東京一三三三番・製作 柳二文社

ころざしはパーフェクション 大和実業は常に新しいシステム&サービスで 店舗展開をめざします。

エスカイヤクラブを頂点に、札幌から鹿児島まで
 全国主要都市をネットする大和実業グループ。
 たえず移り変わるニーズに、一歩先じたシステム&サービスで、
 常にパーフェクトな店舗展開をめざします。



- エスカイヤクラブ
- ザ・ロイヤル
- 櫓(やぐら)茶屋
- グラントパブ
- ギャルズ
- クラブVO

- VOキューティ
- VOローズルーム
- セプンティクラブ
- ザ・トップクラブ
- ザ・トップクラブ
- ミュージックサルーン

- 舞妓
- やぐら亭
- スイートクラブ
- ザ・セラーズ
- ラジオシティ
- ザ・ワインバー

- ジェファーソンクラブ
- BAC
- ブカブカ
- カフェバー 5/6
- やぐら寿司
- 曙
- YAKINIKU HOUSE 298

取締役社長 岡田 一男 (春日町三井庄出)

大和実業グループ 大和実業株式会社

本社/〒530 大阪市北区芝田2丁目1番18号 西阪急ビル10階 ☎06(372)8571(代)



北沢 八幡神社 社殿 当社施工

綜合建設業

建設大臣許可第233号



春日建設株式会社

取締役会長 伴 伸 信 次

取締役社長 伴 伸 信 義

東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号・電話03(264)-4011番(代表)